

家兔卵巢黃體及間質細胞組織ニ就テ

(昭和四年十一月十五日受附)

水 美 登 利

本研究ノ大部分ハ金澤醫科大學產婦人科教室ニ於テ成シタルモ、其ノ後更ニ實驗ヲ追加シ其ノ足ラザルヲ補ヒタルモノニシテ、第二十八回北陸醫學會及第二十七回日本婦人科學會總會席上ニ於テ大要ヲ報告シタルモノナリ。

目 次

第一章	緒論及文獻ニ就テ	第五章	卵巢間質細胞組織ニ就テ
第二章	研究材料及研究方法ニ就テ	第一節	序 言
第三章	自家實驗例	第二節	自家實驗總括
第四章	黃體ニ就テ	第三節	間質細胞ノ「リボイド」ニ關スル考察
第一節	黃體ノ一般的所見及其退行機轉	第六章	結 論
第二節	第一節ノ考察	文 獻	
第三節	黃體ノ「リボイド」ニ就テ	附圖ニ表及附圖說明	

第一章 緒論及文獻ニ就テ

抑モ黃體細胞ガ成熟濾胞ノ顆粒膜細胞ヨリ發生スルモノナルカ、將又其ノ內莢膜細胞ヨリ發生スルモノナルカニ就
キテハ古來盛ニ論爭セラルルトコロニシテ、顆粒膜細胞ヨリ發生スト主張スル Bischoff ノ所謂上皮細胞說、內莢膜細
胞ヨリ發生スト唱導スル Bach ノ結締組織細胞說及顆粒膜細胞、內莢膜細胞共ニ黃體細胞ニ變化スト主張スル上記兩說

ノ折衷說トモ見ルベキモノアルコトハ茲ニ贅言ヲ要セズ。

然ルニ一八九五年、一八九六年、一八九七年ニ Sobotta ガ「ラウス」及ビ家兔ノ黃體發生ニ關シ精細ニシテ間然スルトコロナキ研究ヲ行ヒ、上皮細胞說ニ有力ナル根底ヲ確立シテ以來次第ニ上皮細胞說ヲ支持スルモノ多キヲ加ヘ、次イデ R. Myer, Wallart, Schröder, Reusch 荻野等ガ人類黃體ノ初期ノモノニ就キテ試ミタル研究モ亦黃體ルテイン細胞ハ顆粒膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ形成セラルルモノニシテ、內莖膜細胞ハ黃體發生初期ニハ黃體內ニ認メラルルモ一定時期以後ニハ認メラザルニ至ルコトヲ立證セシヲ以テ、今日ニ於テハ結締組織細胞說ヲ主張スルモノ極メテ少數トナレルハ是又周知ノ事ナリ。

サレバ家兔ノ黃體ニ就キテモ Sobotta 以降ノ研究者ニ於テ、一二ノ者ヲ除キテハ再ビ結締組織細胞說ヲ唱フルモノナキニ至レリ。然レドモ上皮細胞說ヲ主張スルモノト雖モ黃體發生ニ當リテ濾胞ノ內莖膜細胞ハ如何ナル運命ニ陷ルモノナルカニ關シテハ其ノ所說ヲ各々異ニスルハ頗ル奇トスベキトコロニシテ今日未ダ一定ノ見解ヲ見出サザルガ如シ。

試ミテ Sobotta 以來家兔黃體研究者ノ文獻ニ就キテ之ヲ見ルニ、Sobotta ハ前述ノ如ク黃體ハ顆粒膜細胞ヨリ發生ストスル先鋒タルモノニシテ、內莖膜細胞ハ交尾後三十二時間乃至四十二時間以後ノ黃體ニ於テハ之ヲ認メズトシ、此細胞ハ黃體基質ノ紡錘形結締組織細胞ニ變化スルモノナリト云ヒ、Honore ハ上皮細胞說ニ左袒スルモ、內莖膜細胞ハ交尾後六日乃至十一日ヲ經過セル黃體ニ於テ其ノ周邊部ニ散見スト云ヒ、Cohn (1903) ハ交尾後二日以後ノ例ニアリテハ認メザリシト報ジ、井岡 (一九一七年) ハ生體染色所見ニヨリテ上皮細胞說ニ賛スルモ內莖膜細胞ハ交尾後七日ノ黃體ニ於テモ黃體周邊部ニ殘存シ、黃體ルテイン細胞トハ其ノ原形質内ニ於ケル生體可染顆粒ニヨリテ區別シ得ルモノナリト云ヒ、氏モ亦該細胞ハ黃體基質結締組織細胞ニ移行スト信ズルガ如シ、Borell モ亦井岡ト同ジク生體染色ニヨリテ之ヲ究メ上皮細胞說ヲ説クガ如キモ、內莖膜細胞ニ就キテハ明快ナル記述ヲナサズ。一九二〇年廣瀬ハ家兔ニ人胎盤孔劑ヲ注射シテ人工的ニ黃體ヲ發生セシメ得ルコトヲ發見シ、其ノ所見ヨリシテ黃體ノ結締組織細胞說ヲ支持シタリ。其ノ後足立 (一九二三年) ハ廣瀬ノ研究ヲ追試シ精細ナル研究ヲ行ヒ、此ノ人工的發生黃體ニ於テモ亦上皮細胞說ヲ主張シ內莖膜細胞ハ黃體ノ血管分布以後ハ認メ難シトセリ。然ルニ戸莉 (一九二六年) ハ家兔ノ妊娠性黃體ニ就キテ其ノ發生並ニ退行ノ狀況ヲ研究シ、內莖膜細胞ハ妊娠後半期ノ黃體ニ於テ尙殘存スルモノアリテ、之ガ黃體基質ノ結締組織細胞ニ變化スルモノニ非ズト云ヒ、同年岩田ハ家兔ノ非妊娠性黃體ノ退行機轉ニ就

キテ研索シ、黃體ルティン細胞ハ顆粒膜細胞ヨリ形成セラル、モ内莢膜細胞ハ黃體ノ全經過ヲ通ジテ其ノ消滅ヲ見ルコトナク、黃體ルティン細胞ノ變性消失後はガ増殖肥大シ、黃體發生部ニ於テ新シキ間質細胞組織ヲ形成スルモノナリト説ケリ。

斯クノ如ク黃體形成ニ際シテ顆粒膜細胞及内莢膜細胞ノ態度ハ未ダ闡明ノ域ニ達セズハ黃體發生時ニ於テ是等ノ細胞ガ極メテ短時間ニ甚シキ形態的變化ヲ來シ容易ニ其ノ真相ヲ捕足シ能ハザルコトニ基因スルモノニシテ頗ル興味ノ存スルトコロナリ。

上記ノ如ク黃體發生ニ關シテハ多數ノ研究ノ試ミラレタルニ拘ラズ家兎ノ黃體ノ退行機轉ノ研索ハ比較的等閑ニ附セラレタルガ如ク之ガ研究ハ甚ダ罕ニシテ從來信憑スベキ研究ナカリシガ、最近前記ノ岩田氏ガ之ニ關シテ研究ヲ試ミ、家兎ノ非妊性黃體發生後二十八日迄ノモノヲ追及檢索セラレタリ。然レドモ其ノ後ノ變化ニ關シテハ之ヲ知ルニ由ナク、妊性黃體ノ退行機轉ニ關シテハ全ク不明ニ屬スト云フモ可ナリ。且又家兎ハ人類ト異リ分娩後間モナクシテ交尾期來リ再ビ引キ續キテ妊娠スルヲ以テ此ノ如キ家兎ノ卵巢ニハ前回ノ妊娠ニヨリテ生ジタル黃體ト次回ノ妊娠ニ伴ヒテ生ジタル新黃體トノ二種ノ黃體ヲ認メ得ベク、斯クノ如キ生理的ノ機轉ガ前回ノ妊娠黃體ノ退行機轉ニ何等カノ影響ヲ及ボスコトアルベキハ想像ニ難カラズ、故ニ家兎ニ就テ妊性黃體ノ退行機轉ヲ闡明スルコトハ必ズシモ無用ノ業ニハ非ザルベク、一面ニ於テハ論爭解決ノ端緒ヲ得ベキ一方法タルヲ失ハザルベシト信ズ。

茲ニ於テ予ハ先ヅ試ミニ從來ノ文獻ヨリ家兎黃體ノ退行機轉ニ關シテ多少ナリトモ記述セラレタルモノヲ簡單ニ記述スル必要アリ。

Pflüger (1863) ハ黃體ハ其發生後三乃至四週ニシテ間質ニ融合シテ消滅スト云フ、Sobotta ハ Pflüger ノ説ヲ否定シ氏ガ檢シタル妊娠家兎ニ於テハ此妊性黃體以外ニ其レ以前ニ於ケル妊娠ノ際ニ形成セラレタル黃體ノ尙遺殘セルヲ認メ、此黃體ハ著シク退行シ萎縮スルヲ認メタリ、而シテ此際黃體細胞ハ多クハ脂肪變性ヲ來シテ消滅シ、結締組織基質ハ殘存シ萎縮シテ癭痕ヲ形成シ被膜結締組織ハ其ノ際尙殘存スルモノニシテ卵巢ノ基質ニ癒合スルモノニ非ズト云ヘリ。

Cohn ハ家兎卵巢黃體ハ極メテ徐々ニ吸收セラル、モノニシテ、氏ガ檢シタル妊娠家兎卵巢ニ於テハ Sobotta ノ見タルガ如ク以前ノ妊

娠ニヨリテ生ジタル黃體ノ遺殘ヲ認ムルモ茲ニ認ムル細胞ハ間質細胞ト其ノ大キサ略等シク、原形質明徹ニシテ細胞間ニ毛細血管ナク結締組織増殖ストナセリ。

足立ハ人工黃體ノ退行機轉ニ關シ、人胎盤乳劑注射停止後一週間ヲ經過セルモノニ於テ已ニ著シク其ノ大キサヲ減ジ、其ノ黃體細胞ハ變小シ間質細胞大乃至其ノ二分ノ一大ヲ示シ、原形質ハ一般ニ鮮明ニシテ類脂肪ヲ失ヒ核モ亦漸次變小萎縮シテ消失スルモノ多ク、細胞ノ境界ハ漸次不鮮明トナリ屢々數ケノ細胞融合シテ無構造物質ト化シ、或ハ空胞ニ變化シツ、アルヲ認メ又屢々粗大ナル油滴狀又ハ不正塊狀乃至殼狀ノ類脂肪ヲ有スル大細胞ヲ混ジスクノ如キ細胞ノ盛ニ變性破壞シツ、アルヲ見ル。二週ヲ經タルモノニ於テハ濾胞腔出血竈ノ周圍ニ稍厚キ機化層ヲ作り、之ト纖維性濾胞膜トノ間ニ殆ド消滅シツ、アル變小セル顆粒膜黃體細胞ノ痕跡ヲ見ル。又「ヘモジリン細胞ヲ有スルモノアリ。退行性黃體ハ最後ノ注射ヨリ一週ヲ經過セルモノト略同様ノ觀ヲ呈スルモ、更ニ細胞ノ變小セルモノアルト共ニ、退行性黃體ノ中心部ヨリ壞死電ヲ形成シ細胞ノ漸次顆粒狀物質ニ變化シツ、アルヲ見ル。更ニ三週ヲ經タルモノニ於テハ尙前述セル退行性黃體ヲ認ムルモノニシテ、上記ノ變小細胞ト其ノ融合ニヨリテ生ズル無構造部ノ斑狀ニ混在セル電ヲツクリ、茲ニ淋巴細胞ヲ伴フ結締組織ノ進入シツ、アルヲ見ル。上記ノ如ク注射停止後日ヲ經ルニ隨ヒ黃體顆粒膜細胞ハ漸次萎縮スルト共ニ種々ノ變性死滅像ヲ示シ濾胞腔機化組織ハ長ク存在シ癰痕樣體ニ化シ纖維性濾胞膜ハ漸次菲薄トナリ、遂ニ周圍組織ト分界不明瞭トナリ又ハ厚キ機化組織ニ變化セルモノアリト記述セリ。

戸町ハ家兔黃體ルテイン細胞ノ大多數ハ直接脂肪變性ニヨリテ消失シ、一部ハ色素細胞ニ移行シテ後吸收セラレ消滅ス、而シテ莢膜ルテイン細胞ハ基質結締組織細胞ニ變化セズシテ黃體ルテイン細胞ト同様變性吸收セラレ、黃體基質結締組織細胞及中心核ハ「ルテイン細胞ノ吸收後徐々ニ吸收セラレ一時纖維體ノ形態ヲ呈スルコトアルモ、硝子樣變性ニ陥リ白體ヲ形成スルコトナシト記シ、黃體ルテイン細胞ハ既ニ妊娠末期ニ於テ退行變化現レ、分娩後顯著ナル變性ヲ來スモノニシテ、或ルモノニアリテハ產褥二十二日ニ於テ黃體細胞ハ痕跡ナク消失スルモ、或ルモノニ於テハ分娩後四十五日ニ於テモ變性セル黃體ルテイン細胞ガ増殖セル結締組織中ニ殘存スルモノアリ、又或ル黃體ニアリテハ分娩後五十五日ニ於テ尙「ルテイン細胞ヨリ移行シタル色素細胞ガ認メラレ、モノアリト報ジ、退行變化ノ遲速ハ黃體個々ノ狀況並ニ家兔ノ個體の差異ニ基クモノナリト云ヘリ。

岩田(一九二五年)ハ「ラノリン」飼養ヲ施行セル家兔ノウチ三例ノ卵巢ニ於テ其ノ間質中ニ不正形不同大ノ細胞群ヲ認メ、他ノ間質ト不完全ナル結締組織ヲ以テ圍レ膨大透明ナル間質細胞酷似ノ細胞ト多少増殖セル結締組織ヨリナレル組織ヲ認メ之ヲ以テ黃體ノ退行セルモノナリヤ或ハ又閉鎖濾胞ヨリ來レルカ更ニ又間質細胞ノ肥大シテ殊ニ多量ノ脂肪ヲ攝取セルモノナリヤノ區別ハ至難ナリト記シタリシガ、其ノ後(一九二六年)氏ハ家兔ノ非妊娠性黃體ノ退行ニ就キテ述べ、家兔非妊娠性黃體ハ退行ニ際シ黃體周邊部ニ殘存セル莢膜ルテイ

ン細胞ノ増殖肥大ヲ來シ、黃體ルテイン細胞ノ變性消失後此ノ部ニ於テ間質細胞組織ヲ形成スルモノナリト報ジ、前回ニ於テ認メタル不明ノ細胞群ニ就キテハ言及スルトコロナカリキ。是等ノ外ニ家兎卵巢ニ白體細胞ナルモノヲ記載シ(白木)或ハ纖維體、硝子體ナルモノヲ記述スルモノ(中本)アルモ其ノ詳細ナル所見ノ記載ハセラレズ。

斯クノ如ク家兎黃體ノ退行機轉ニ關スル知見ハ甚ダ不統一ニシテ諸說紛々トシテ歸一スルトコロナキハ是畢竟スルニ其ノ不明ナルコト多キヲ立證スルモノナリト信ズ。

更ニ又黃體ハ諸多内分泌腺臟器中副腎ト共ニ最モ「リポイド」ニ富メル組織トシテ知ラルトコロナルガ、其ノ「リポイド」ノ性狀並ニ之ガ黃體機能トノ關係及「リポイド」出現ノ意義ハ現今尙論爭ノ裡ニアリ、而シテ是等ノ問題ニ就キ人類黃體並ニ諸動物黃體ニ就キテ行ハレタル多數ノ報告アリト雖モ、家兎黃體ニ就キテハ之ガ精細ナル系統的研究比較の稀ナリ。

更ニ又家兎卵巢ニハ甚ダ良ク發育セル間質細胞組織アリ、此ノ間質細胞組織ハ Limon ニヨリテ内分泌ヲ營ムモノナリト提唱セラレ「Glande interstielle du l'Ovaire」ト命名セラレ、Steinach, Sieve ニヨリテ「Pubortätsdruse」ト名ヅケラレタルモ本組織ノ機能及ビ内分泌的作用ノ有無ハ從來明カナラザリシガ最近再ビ本細胞及濾胞ノ内莖膜細胞ガ卵巢ホルモン「產生ニ關與スル重要ナル造構ナリト認メラル、ニ至リ(齋藤 Parkes)又諸家ノ興味ヲ喚起スルニ至レリ。

更ニ又本組織ハ其形態の所見ガ副腎皮質及ビ黃體ニ類似シ多量ノ「リポイド」ヲ含有スルモノナレドモ、其ノ「リポイド」ノ意義ニ關シテハ未ダ明カナラザルモノ多シ、而シテ此間質細胞ガ妊娠、產褥等ノ生理的現象ニ際シテ如何ナル態度ヲトルモノナルヤ、殊ニ其ノ際ニ於ケル「リポイド」ノ變化消長ニ關シ精細ナル研究ヲ缺ケリ。

予ハ前述セル幾多ノ疑點ヲ解決セント欲シ本研究ヲ企圖シタルニ漸ク得ルトコロアリタリト信ズルヲ以テ之ヲ報告シ諸家ノ高教ヲ乞ハント欲ス。

第二章 研究材料及研究方法

研究ニ供シタル雌性家兔ハ總數三十八頭ニシテ、細別スレバ生後四ヶ月前後ノ幼若家兔三頭、成熟處女家兔三頭(是等ハ余ノ飼養箱ニ於テ產出セラレタルモノヲ養育シタルモノ)、妊娠家兔十頭、產褥家兔十頭(是等ハ余ノ飼養箱内ニ於テ妊娠セシメ或ハ分娩セシメタルモノニシテ其ノ妊娠及ビ產褥時日ノ明カナルモノ)更ニ他ノ飼養者ヨリ購入シタル經產家兔十二頭(是等ハ分娩期日明カナラザルモノ最近ニ於テ分娩ヲ經過セルコト明カニシテ其ノ中ニハ授乳中ノモノ或ハ尙乳汁分泌ノ認メラルモノノミ)ヲ選定シタリ。

是等ノ家兔ハ余ノ飼養箱ニテ雄兔ヲ交フルコトナク生活セシメ、飼料ハ雪花菜ト芋或ハ大麥ヲ混ジタルモノヲ與ヘタリ。

妊娠セシムルニハ、產褥數日ニシテ交尾期ノ發來スルヲ待チテ雄兔ト交尾セシムルカ、或ハ購入後毎日觀察シ交尾期ノ發現スルヲ俟ヅテ雄兔ノ居ル箱ニ移シ、交尾ノ遂行セラレタルヲ目撃シ、然ル後之ヲ獨居セシメ交尾翌日ヲ以テ妊娠第一トナシタリ。

產褥直後ニ發來スル交尾期ニ於テ雄兔ヲ交配スルニ始メテ總テニ於テ妊娠成立シ失敗スルコトナシ。而シテカ、ル雌兔ノ卵巢ニ於テハ前回ノ妊娠ニヨリテ生ジタル陳舊黃體ト次回ノ交尾ニヨリテ生ジタル新シキ黃體ヲ認メ得ルヲ以テ研究上黃體發生ノ狀況ト其ノ退行ノ狀況ヲ檢シ得ル利便アレドモ、前回ノ陳舊黃體ノ退行變化ガ次回ノ妊娠ノタメニ其ノ影響ヲ多少蒙ルコトアルベキハ豫想ニ難カラザルヲ思ヒ、此等ノ點ヲ多數ノ產褥家兔ニ少キテ研索シタルナリ。即チ寺田ニヨレバ大黒鼠ニ於テハ黃體ノ退行變性又ハ消失ハ形成後ノ日數ニヨリテ左右セラルルコト少ク專ラ次イテ來ル性

週期ノ陽性期ノ如何ニ關スルモノニシテ、舊黃體ハ次回ノ濾胞破裂即チ新黃體ノ發生ト共ニ速クニ萎縮消失ニ傾クモノナルモ若シ休止期ノミ續クトキハ可成長時日ニ亘リテ黃體ハ退行變性ノ徵ナク持續シウルモノナリト云ヘリト雖モ、妊娠動物ニアリテハ妊娠期間ハ性週期ハ循環セズ、家兔ニアリテハ一度分娩スルヤ數日ニシテ性週期發現シ交尾期出現スルモノナリ。

(此ノ事實ハ後ニ述ブルガ如ク家兔ニ於テハ產後急激ニ黃體ガ退行變性スルノ事實ト良ク一致スルモノナルコトヲ余ハ確メ得タレドモ黃體ノ變性ニヨリテ性週期ノ回復スルモノナルヤ或ハ性週期ノ發現ニヨリテ黃體ガ退行スルモノナルヤニ關シテハ明カナラズ)然シテ上述ノ如ク新舊二様ノ黃體ヲ認ムル場合ニ於テ、產褥十日前後以後ノ陳舊黃體ハ、余ノ研究ニ依ルニ嚴密ニ云ヘバ最早組織學的ニハ黃體組織ニ非ズシテ一種ノ間質細胞組織ニ移行セルモノナルヲ以テ黃體ナル名稱ヲ冠スルハ妥當ナラザルモ、適當ノ名稱ナキヲ以テ記述ノ際ニハ陳舊黃體ト記載シタリ。

尙產褥家兔ノ少數ノモノハ初メ產褥一定時日ニ於テ其ノ一方ノ卵巢ヲ剔出し、其ノ後一定日數經過ノ後殘リノ卵巢ヲ剔出シ兩者ノ變化ヲ比較シタルモノモアリ。

動物屠殺ハ凡テ耳靜脈管ニ空氣ヲ送致シ空氣栓塞死ニ陥ラシメタリ。

斯クノ如クニシテ得タル卵巢ハ、其ノ黃體發生部位ヲ顯慮シテ縱軸ニ沿ヒテ切半シ、一半ハ一〇%「フガルマリン」水ニ投ジ一晝夜固定ノ後凍結切片トナシ、他ノ一半ハ同ジク一〇%「フガルマリン」水又ハ「ハルト」氏液ニ投ジテ固定シ、「ツエロイジン」又ハ「バラフィン」包埋チ行ヒ切片トナセリ。乃チ斯クノ如ク一卵巢全部ヲ切片トナシ多數ノ標本ヲ作製スルコトニヨリ

テ肉眼のニハ不明瞭ナル黃體ノ退化部位ヲモ檢出シ得ベク努メタリ。

染色標本ハ主トシテ「ヘマトキシリン、エオジン染色、ワンギーソン氏染色及ビ種々ノ脂肪檢査法ヲ用ヒ、更ニ一部ノモノニ於テハピルシヨウスキー氏ノ結締組織纖維染色法ヲ應用シタリ。

脂肪檢査法トシテハ、「ズダンIII染色」、「ズダンIIIヘマトキシリン染色」、「ニールブラウズルフアート」染色、「ノイトラルロー」染色法、スミスデ

ーリツヒ氏法、フイシユレル氏法、一部分ノモノニ於テチャチオ氏法ヲモ試ミタリ。更ニ偏光裝置ヲ用ヒテ重屈折性リボイド」ノ研索ニ注意シタルガ、コレニハ前述ノ凍結切片ヲ無染色ノマ、ニテ「グリセリンゲラチン」ニテ封鎖シテ檢シ、更ニ「ヘマトキシリン」單染色標本、「ニールブラウズルフ

第三章 自家實驗例

第一例 妊娠二日家兎卵巢(經産家兎體重二三五〇瓦)

黃體

黃體ハ卵巢表面ヨリ少シク膨隆シ左側卵巢ニ三個、右側ニ三個アリ、一、二個ノ黃體ノ表面ニ凝血ヲ以テ栓塞セラレタル排卵ノ痕跡ヲ認ムルコトヲ得。

鏡檢スルニ、黃體ハ未ダ小ニシテ濾胞外莖膜ヨリ形成セラレタル纖維性結締組織被膜ヲ以テ完全ニ包レ、中心ニ少許ノ凝血核ヲ有セリ。黃體ルテイ細胞ハ未ダ肥大著シカラズシテ細胞體ハ一般ニ圓錐狀ヲ呈シ原形質稍「ヘマトキシリン」ニ著色シテ濃濁シ中心ニ圓形ニシテ「クロマチン」ニ乏シキ胞狀ノ一核ヲ有シ、更ニ其ノ核内ニ一乃至二個ノ明瞭ナル核小體ヲ有セリ。其ノ「ミトーセ」ノ像ハ認メズ而シテ黃體細胞ハ黃體周邊部ヨリ中央ノ凝血核ニ向ヒテ求心狀ニ配列シ、血管ハ黃體被膜内側ノ部ヨリ黃體内部ニ

原著 水Ⅱ家兎卵巢黃體及間質細胞組織ニ就テ

アート染色標本、「ズダンIIIヘマトキシリン」染色標本ニ就テ檢シタルニ「ズダンIII染色標本ハ重屈折性ニ著シキ障礙ヲウケ、「ニールブラウ染色標本ハ其ノ障礙少キヲ見タルヲ以テ脂肪滴ト重屈折性物質トノ關係ハ此ノ染色標本ニテ定メタリ。更ニ前述ノ如キ狀況ニ於テ重屈折性ヲ檢スルニ、重屈折性リボイド」ハ殆ンド凡テニ於テ針狀結晶又ハ不定形結晶トシテ見得ラル、モノニシテ、加溫冷却後初メテ美麗ナル交叉像ヲ現出スルモノ多シ、故ニ必ズ一度檢シタル後燐寸ノ焰ニテ一寸標本ヲ加溫シ重屈折性ノ消失ノ狀態ヲ觀察シ冷却ニヨリテ次第ニ出現スル狀況ト交叉像ニ注意ヲ拂ヒテ觀察セリ。尙川村氏新法ヲモ試ミタリ。

向ヒテ求心性ニ進入シ甚ダ充盈セリ。黃體ノ周邊部即チ被膜ノ内側ニ於テ處々ニ黃體細胞ト稍形態ヲ異ニスル細胞ガ少數群ヲナシテ殘存スルヲ認メ得ベク、此細胞ハ此時期ニ於テハ大キササ黃體ルテイ細胞ト略等シキ力或ハヤ、小ニシテ、核ハ橢圓形或ハ類圓形ヲナシ稍「クロマチン」ニ富ミ核小體明カナラズ、原形質モ亦微細顆粒狀ヲ呈シ間質細胞及成熟濾胞ノ内莖膜細胞ニ類似セリ。而シテ該細胞ハ多量ノ「リボイド」ヲ有シ「ズダンIIIニテ黃赤色顆粒狀又ハ滴狀ニ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法陰性、「ニールブラウ」ニテ紫赤色ニ染色シ、少ナカラザル重屈折性リボイド」ヲ証スルモノアリ。黃體ルテイ細胞ニ於テモ一樣ニ極メテ少量小滴狀ノ「ズダンIIIニテ黃赤色ニ染色セララル單屈折性リボイド」ヲ含有スルモ、重屈折性ノモノハ認メラレズ。是等ノ所見ヨリシテ余ハ黃體周邊部ニ於ケル黃體細胞ト異レル細胞ハ内莖膜細胞ノ尙殘存スルモノナリト認メントス。

間質細胞組織

間質細胞組織ノ發育ハ良好ニシテ、細胞ハ二様ニ多量ノ「リボイド」ヲ含有シ「ズダンIII」ニテハ黃赤色顆粒狀ニ、「ニールブラウ」ニテハ紫紅色ニ染色シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法陰性ニシテ、偏光裝置下ニテ檢スルニ渺カラザル重屈折性リボイド」ヲ含有セリ。

第二例 妊娠四日家兎卵巢(初妊家兎體重二〇八〇瓦)

黃體

卵巢表面ヨリ輕ク突隆セル薄紅色ノ黃體ヲ左右卵巢ニ各三個宛認ム。最早排卵ノ痕跡ヲ認メ難ク此ノ部ニハ血管ノ分布セルヲ透見スルコトヲ得。

鏡檢スルニ黃體ハ前例ヨリモ稍大ニシテ、黃體ルテイン細胞ハ稍肥大シ圓形或ハ多角形ノ大ナル細胞トナリ、原形質ハ淡ク「エオジン」ニ染色セル微細顆粒狀ヲ呈シ核モ亦圓形胞狀ニシテ一二個ノ明カナル核小體ヲ有ス。黃體中心部ノ黃體細胞ハ未ダ肥大顯著ナラズシテ其ノ狀大體前例ニ類スルモノアリ。黃體内ニハ結締組織細胞進入シ、毛細血管網ハ形成セラレ、黃體中心ニハ幼弱ナル結締組織細胞ヨリ成レル鬆粗ナル結締組織中心核ヲ有セリ。

黃體ノ被膜内側ニ接シテ内莢膜細胞ノ少數群ガ尙殘存スルヲ明カニ認メ得ベシ。該細胞ハ前例ニ於テ認メタルト略同様ナルモ此ノ期ニ在リテハ黃體ルテイン細胞ヨリモ遙カニ小ニシテ、核ハ類圓形ヲ呈シ「クロマチン」ニ富ミ核小體明瞭ナラザルヲ以テ黃體ルテイン細胞ト區別シ得ルモノナリ。

「ズダンIII」染色ニヨルニ黃體ルテイン細胞ニハ黃赤色顆粒狀ノ「リボイド」ヲ少ナカラズ証明シ「ニールブラウ」ニテ深青色ニ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法殆ンド陰性、「ノイトラルロート」陽性ニシテ重屈折性リボイド」ハ極メテ少量散在性ニ認メウルモノアルニ過ギズ内莢膜細胞モ亦多量ノ單屈折性リボイド」ヲ有シ更ニ重屈折性ノモノヲモ少ナカラズ含有スルモノアリ。

間質細胞組織

間質細胞組織ハ皮質及ビ髓質ニ互リテ良ク發育スルモ、細胞個々ハ未ダ肥大著シカラズ。「ズダンIII」染色ニヨレバ一様ニ黃赤色「リボイド」顆粒ヲ含有シ、「ニールブラウ」ニテハ淡紫紅色ニ染色シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法殆ンド陰性、「ノイトラルロート」微弱陽性ニシテ、微細ナル重屈折性リボイド」ヲ一様ニ含有セリ。然シテ加溫冷却後稍大ナル滴狀ニ出現スルモノハ定型前交叉像ヲ認ムルコトヲ得。

第三例 妊娠六日家兎卵巢(二回經産體重二五二〇瓦)

黃體

黃體ハ著シク卵巢表面ヨリ突隆シ、左側卵巢ニ三個右側ニ四個發生セリ。鏡檢スルニ黃體ルテイン細胞ハ肥大顯著ニシテ原形質ハ微細顆粒狀ヲ呈シ、核モ亦大キク胞狀ニシテ一二個ノ明カナル核小體ヲ有シ甚ダ活氣アルノ狀ヲ示セリ。黃體ノ周邊部即チ被膜ノ内側ニ接シ依然トシテ内莢膜細胞ノ殘存スルヲ認ムルコトヲ得。該細胞ハ胞體小ニシテ數回相集リテ小群ヲナシ或ハ被膜ニ沿ヒテ一列ニ配列スルコトモアリ。

「ズダンIII」染色ニヨルニ黃體内ノ「リボイド」ハ前例ニ比シテ顯著ニ増加シ、黃體ルテイン細胞ニテハ一様ニ原形質内ニ堆積シ「ニールブラウ」ニテ深青色ニ染色シ、スミス氏法ニテハ青黑色ニ、フイシユレル氏法弱陽性、「ノイトラルロート」陽性ニシテ、散在性ニ少量ノ重屈折性リボイド」ヲ有スルモノアリテ是亦前例ニ比スレバ稍増加セルモ一般ニ尙甚ダ少量ナリ。

陳舊黃體

卵巢間質組織ノ二三個所ニ於テ間質細胞ト稍形態ヲ異ニセル細胞群ヨリ形成セラレタル組織アリ。此組織ハ貧弱ナル纖維性結締組織ニヨリテ包レ或ハ何等ノ被膜ナクシテ間質細胞組織内ニ存在セリ。該細胞ハ其ノ大キサ間質細胞ト略等シキモ、核ハ著シク萎縮シ、原形質ハ甚ダ明瞭ナリ。而シテ

此細胞ハ不規則ニ配列シ、此細胞ヨリ形成セラレタル組織ハ他ノ間質細胞組織ノ如ク血管ノ分布豊富ナラズ。「ズダンIII染色ニヨルニ該細胞ハ黃赤色ノ「リポイド」ヲ以テ充滿セラレ「リポイド」ハ間質細胞ヨリモ遙カニ多量ニシテ一見シテ其ノ所在ヲ認メ得ルモ、重屈折性リポイド」ハ極メテ少量ナルカ或ハ認メラザルモノアリ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法弱陽性、「ノイトラルロート」陽性ナリ。

間質細胞組織

間質細胞組織ノ發育極メテ良好ニシテ間質細胞組織ハ卵巢間質ノ大部分ヲ占ム。細胞個々ハ著シク肥大シ原形質ハ淡ク「エオジン」ニ染色シ微細顆粒狀ヲ呈シ、多量ノ「リポイド」ヲ以テ充滿セラレ、「ズダンIII染色ニテ黃赤色ニ、「ニールブラウ」ニテ淡紫紅色、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法ハ一般ニハ陰性ナルモ一部ニ於テ限局性ニ弱陽性ナルモノアリ。重屈折性リポイド」モ一樣ニ多量ニ存セリ。

皮質ニ於テ第二期ノ閉鎖濾胞ノ多數ニ存スルヲ認メ、其ノ内莢膜細胞ニモ少ナカラザル單屈折性及ビ重屈折性リポイド」ヲ認ムルコトヲ得ベシ。

第四例 妊娠七日家兎卵巢(經産家兎體重二四八〇瓦)

黃體

黃體ハ卵巢表面ヨリ小疣狀ニ突隆シ、左側卵巢ニ三個右側ニ四個發生ス。此外ニ尙二三個ノ濾胞血腫ノ如キモノ發生ス。

鏡檢スルニ各個ノ黃體ニ於テ其ノ发育ノ程度ニ多少ノ相違アルヲ見得ベク、其ノ一個ニアリテハ、黃體ノ中心ニハ尙凝血核ヲ存シ、黃體細胞ハ之ヲ取り圍ミテ十數層ノ細胞帶ヲ形成シ、其ノ間ヲ毛細血管ガ被膜ノ部ヨリ中心凝血核ニ向ヒテ求心性ニ行走ス。黃體細胞ト血液核ノ接觸スル部位ニ於テハ幼稚ナル結締組織細胞ガ多數ニ存シ凝血核ハ其ノ邊周ノ部ヨリ漸次機械セントスルノ狀況ヲ認メラル。斯クノ如キ黃體ニアリテハ黃體ルテイン

細胞モ他ノ成熟黃體ニ比シテ尙小ニシテ妊娠二日乃至四日目黃體ニ類似セリ。而シテ又黃體被膜ノ内側ニ於テ内莢膜細胞ノ尙多數ニ存在スルヲ認ムルコトヲ得。

他ノ黃體ニアリテハ其ノ发育ノ程度殆ンド一樣ニシテ黃體中心ニハ不正形或ハ星芒狀ノ中心結締組織核ヲ有シ黃體細胞ハ著シク肥大セリ。是等ノ黃體ニ於テモ其ノ周邊部ニハ壓迫縮小セラレタル内莢膜細胞ノ少數群ヲ尙明カニ認メシム。

「ズダンIII染色ニテハ黃體細胞ハ黃赤色顆粒狀或ハ滴狀ノ「リポイド」ヲ多量ニ含有シ、「ニールブラウ」ニテハ青色乃至黃色ニ染色シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法弱陽性、「ノイトラルロート」弱陽性ニシテ重屈折性リポイド」ハ一樣ニ極メテ微量ニ存スルニ過ギズ。然レドモ黃體ノ周邊部ニ處々限局性ニ稍多量ヲ証シ得ルコトアリ。コハ恐ラク莢膜ルテイン細胞ニ含有セララルモノナルベシ。

陳舊黃體

左右卵巢間質ノ二三ヶ所ニ於テ間質細胞ト稍形態ヲ異ニセル細胞ガ群集狀ニ存シ、極メテ貧弱ナル結締組織被膜ヲ以テ包レタル組織トシテ認メラル、該細胞ハ其ノ大キサ間質細胞ト略等シク核モ亦之ニ類似スルモ萎縮狀ヲ呈セルモノ極メテ多ク、且其ノ原形質ガ透明ナル點ニ於テ稍相違セリ。此細胞ヨリ形成セラレタル組織内ニハ少許ノ結締組織ガ交錯シ居ルモ血管ノ分布極メテ乏シク、細胞ハ不規則ニ配列セララルヲ以テ一見シテ其ノ存在ヲ知ルコトヲ得ベシ。

「ズダンIII染色ニヨレバ該細胞ハ黃赤色ノ「リポイド」ヲ其ノ原形質内ニ充滿シ其ノ量間質細胞ヨリモ遙カニ多量ニシテ、「ニールブラウ染色ニテハ或ル細胞群ハ淡紅色乃至紫赤色ニ、或ルモノハ深青色或ハ薑色ニ染色シ前者ハスミス氏法弱陽性、フイシユレル氏法陰性ナルモ鈔カラザル重屈折

性リポイド」ヲ含有シ、後者ノ染色ヲ示スモノハスミス氏法、フイシユレル氏法共ニ陽性ナルモ重屈折性リポイド」ハ極メテ少量ナルカ或ハ全く認めラレズ。

間質細胞組織

間質細胞ハ増殖肥大シ、甚ダ多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リポイド」ヲ含有セリ、皮質部ニ於ケルモノハ閉鎖濾胞ヨリ移行セル小型ナル間質細胞多キモ是亦一様ニ多量ノ「リポイド」ヲ有ス。

第五例 妊娠八日家兎卵巢(經産家兎體重二七〇〇瓦)

黃體

卵巢表面ニ半球狀ニ突隆セル黃體ヲ左側卵巢ニ四個右側ニ五個認めラレ、更ニ一二個ノ血性黃體アリ。

鏡檢スルニ黃體ノ組織的所見全く前例ト同様ニシテ殆ンド一樣ナル形態ヲ具フルモ、一二個ニアリテハ黃體中心ニ未ダ機化ノ完了セザル凝血核アリテ、該血液核ト黃體細胞ノ移行部ハ既ニ機化セル結締組織ヲ以テ連絡シ、此ノ部ニ「ヘモジテリン」ノ沈着セル單核ノ細胞多數ニ散在セリ。斯クノ如キ黃體及ビ既ニ成熟セル黃體ニ於テモ其ノ周邊部ニ壓迫縮小セラレタル内英膜細胞ノ小群ヲ認めウルモノニシテ其ノ狀態前諸例ニ於ケルモノト大差ナシ。

黃體細胞ハ前例ニ於ケルト同様ニ極メテ多量ノ「リポイド」ヲ含有シ、「ズダンIII」ニテ黃赤色滴狀或ハ顆粒狀、「ニールブラウ」ニテ青色乃至堇色ニ染色シ、「ノイトラルロート」弱陽性、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法弱陽性ニシテ、本例ハ前例ニ比スルニ黃體細胞ハ一樣ニ稍多量ノ重屈折性リポイド」ヲ含有セリ。

陳舊黃體(分娩後二十二日ヲ經過セルモノ)
間質組織内ノ處々ニ於テ、間質細胞ト稍形態ノ異レル細胞ヨリ形成セラ

ル、組織トシテ認めラル、該組織ハ纖細ナル結締組織ニ包シテ存シ此ノ組織ハ黃體或ハ閉鎖濾胞ノ如ク球形ヲ呈スルモノモナキニ非ザルモ多クハ黃體或ハ濾胞ノタメニ壓迫セラレテ不正形ヲ呈セリ。該細胞ハ間質細胞ト略等大ニシテ原形質透明、核ハ甚ダ高度ニ萎縮シ或ハ既ニ消失セルモノ多ク、細胞膜ハ破綻シテ近接ノモノト融合シ、此細胞ヨリ形成セラルル組織ハ血管ノ分布ニ乏シク且纖弱ナル結締組織ニヨリテ更ニ少數ノ細胞群ニ分タレ居ルモ細胞ノ配列不規則ニシテ組織全般ガ他ノ間質細胞組織ニ比シテ著シク淡明ニ見ユ。

脂肪染色ニヨルニ該細胞ハ甚ダ多量ノ「リポイド」ヲ以テ充滿セラレ、「ズダンIII」ニテハ黃赤色ニ、「ニールブラウ」ニテハ淡紅色乃至淡紫紅色ニ染色シ、スミス氏法弱陽性、フイシユレル氏法ハ大部分ニ於テ陰性ナルモ一部陽性ナルモノモ存シ、極メテ多量ノ重屈折性リポイド」ヲ含有シ他ノ間質細胞ヨリモ遙カニ多量ナリ。

更ニ髓質結締組織内及ビ間質細胞組織内ニハ淡黃褐色ノ色素ヲ含ム細胞ノ少數群ヲ散見ス。該細胞ハ上述ノ原形質ノ透明ナル細胞ト色素ヲ有スル點ヲ除キテハ其ノ形態全く異ルトコロナシ。色素ハ原形質内ニ瀰漫性ニ微細顆粒狀ニ存シ且此細胞ハ多量ノ「リポイド」ヲ含有セリ。其ノ「リポイド」ハズダンIIIニテ黃赤色、「ニールブラウ」ニテハ青色又ハ堇色、一部帶青綠色ニ染色スルモノアリ。スミス氏法フイシユレル氏法陽性ニシテ重屈折性リポイド」ハ之ヲ含有セズ。此細胞胞群ハ前者ヨリモ更ニ以前ニ發生シタル黃體ノ退化ニヨリテ生ジタルモノナルベシ。

間質細胞組織

前例ト著差ナシ。

第六例 妊娠十日家兎卵巢(經産家兎體重二五三〇瓦)

黃體

卵巢表面ヨリ半球狀ニ突隆セル黃體ヲ左側卵巢ニ三個、右側ニ四個認ムルコトヲ得。

鏡檢スルニ何レノ黃體モ殆ンド一樣ナル組織的所見ヲ呈シ、纖細ナル結構被膜ヲ以テ包レ、黃體ルテイン細胞ノ肥大ハ極度ニ達セリ。黃體周邊部即チ被膜ノ内側ニ接シテ内莖膜細胞ガ小群トナリ或ハ二三個殘存スルヲ認メ得ベク、該細胞ハ黃體細胞ヨリモ著シク小ニシテ其ノ三分ノ一乃至五分ノ一位ナリ。核ハ類圓形ニシテ稍「クロマチン」ニ富ミ、黃體細胞核ノ如ク明カナル核小體ヲ有セザルヲ以テ之ト區別スルコトヲ得ベシ。

「ズダンIII染色」ニ於テハ黃體細胞ハ黃赤色ニ染色セラルル「リポイド」ヲ以テ充滿セラレ、或ハ顆粒狀ニ原形質内ニ堆積セリ。「ニールブラウ染色」ニテハ一部青色ニ一部黃色ニ染ルモノヲ有シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法弱陽性、「ノイトラルロート染色」弱陽性ニシテ重屈折性「リポイド」ナリ。二種多量ニ含有スルモ間質細胞ニ比スレバ尙著シク少シ。

陳舊黃體

間質組織内ノ二三個所ニ間質細胞ト稍形態ヲ異ニスル多數ノ細胞群ガ纖弱ナル纖維結構ヲ以テ包レテ存スルヲ認ム。該細胞ノ形態ハ第四例ニ於テ述ベタル陳舊黃體ト全ク同一ニシテ、「ズダンIII染色」ニテ橙黃色ニ染ル「リポイド」ヲ充滿シ其ノ量間質細胞ノ量ヲ遙カニ凌駕スルヲ以テ一見シテ其ノ所在ヲ認メ得ルモノナリ。「ニールブラウ」ニテハ紫紅色ニ染色シ、スミス氏法弱陽性、フイシユレル氏法殆ンド陰性ニシテ、多量ノ重屈折性「リポイド」ヲ含有シ其ノ量間質細胞ニ劣ルコトナキ程ナリ。

間質細胞組織

間質細胞組織ノ發育ハ極メテ良好ニシテ細胞ハ良ク肥大セリ。而シテ前諸例ト同様ニ極メテ多量ノ單屈折性及ビ重屈折性「リポイド」ヲ含有シ、殊ニ重屈折性「リポイド」ハ前例ヨリモ更ニ多量ニシテ加温シ冷却後ニ大ナル

原 著 水Ⅱ家兎卵巢黃體及間質細胞組織ニ就テ

液狀結晶トシテ現レ美麗ナル交叉像ヲ現スモノ多數ナリ。皮質部ニハ稍小形ナル間質細胞ガ胞巢狀ヲナシテ存シ之又多量ノ「リポイド」ヲ含有ス。之即チ閉鎖濾胞ヨリ生ジタル比較的新シキ間質組織ナリ。

第七例 妊娠十三日家兎卵巢(經産家兎體重二八二〇瓦)

黃體

黃體體ハ卵巢表面ニ突隆シ此ノ部ニ血管ノ分布ヲ認ム。右側卵巢ニ六個左側ニ三個アリ。

鏡檢スルニ黃體ノ組織的所見前例ト異ルトコロナク、黃體周邊部ニハ黃體ルテイン細胞ニヨリテ壓迫セラレ甚ダ縮小セラレタル内莖膜細胞ノ少數群ヲ認ム。

「ズダンIII染色」ニテ黃體細胞ハ其ノ原形質内ニ黃赤色滴狀ニ染色セラルル「リポイド」ヲ多量ニ存シ、「ニールブラウ」ニテハ淡紫紅色ニ、「ノイトラルロート」殆ンド陰性、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法殆ンド陰性ニシテ、一樣ニ微細ナル重屈折性「リポイド」ヲ甚ダ多量ニ存シ間質細胞ニ比シテ著シキ遜色ナキ程ナリ。

陳舊黃體(分娩後二十日ヲ經過シタルモノ)

間質組織中ニ間質細胞ト稍形態ヲ異ニスル多數ノ細胞群ニヨリテ形成セラレタル組織トシテ數個所ニ存ス。該組織ハ纖細ナル纖維性結構ヲ以テ包レ、大キサ黃體ノ四分ノ一乃至五分ノ一大ノ略球形ノ組織ニシテ、此ノ組織ヲ形成セル細胞ハ其ノ大キサ略間質細胞ニ等シク核ハ高度ノ萎縮狀ヲ呈シ既ニ核ノ消失セルモノ多數ナリ、原形質ハ間質細胞ニ比シテ著シク透明ナルヲ以テ鏡下ニ於テ容易ニ本組織ノ所在ヲ認メ得ベシ。然而又該細胞ノ配列ハ甚ダ不規則ニシテ、黃體或ハ間質細胞組織ノ如ク毛細血管ノ分布ヲ有セズ。「ズダンIII染色」ニヨルニ本細胞ハ橙黃色ニ染色スル「リポイド」ヲ多量ニ含有シ、「ニールブラウ」ニ淡紅色ニ染リ、スミス氏法、フイシユ

レル氏法共ニ殆ンド陰性ニシテ極メテ多量ノ重屈折性リポイド」ヲ以テ充滿セラレ其ノ量他ノ間質細胞組織ニ比シテ遙カニ多量ナリ。

間質細胞組織

前諸例ト大差ナシ。

第八例 妊娠十七日家兎卵巢(初妊家兎體重二二七〇瓦)

黃體

卵巢表面ヨリ半球狀ニ突隆セル黃體ヲ左側卵巢ニ四個右側ニ五個認ム。

鏡檢スルニ黃體被膜結締組織ハ纖細非薄ナルモ尙良ク保有セラレ黃體組織ト間質組織トノ境界ヲナセリ。黃體細胞ハ前例ト大差ナク内莖膜細胞ハ黃體周邊部ニ小群ヲナシ或ハ被膜内側ニ接シテ少數殘存スルヲ明カニ認ムルコトヲ得。中心結締組織核ハ縮少シ或ハ一部吸收セラレテ裂隙トナレルモノアリ。

「ズダンIII染色ニヨルニ黃體細胞ハ黃赤色ニ染色スル「リポイド」ヲ多量ニ含有シ其ノ原形質内ニ滴狀或ハ顆粒狀ニ存ス。「ニールブラウ染色ニテハ青色、革色、紫赤色滴狀ニ存シ、スミス氏法陽性ニシテフイシユレル氏法陽性ナルモノモ一部存シ、重屈折性リポイド」ハ一樣ニ極メテ多量ニ含有セラレ加温ニヨリ消失シ冷却後再ビ現レ定型的交叉像ヲ示スモノ多シ。

間質細胞組織

間質細胞ハ増殖シ卵巢間質ノ大部分ヲ占メ體質部ノモノハ顯著ナル肥大ヲ來セリ。其ノ「リポイド」所見ハ前諸例ト大差ナク多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リポイド」ヲ含有セリ。

第九例 妊娠二十三日家兎卵巢(經産家兎體重二八二〇瓦)

黃體

卵巢表面ニ突隆セル黃體左右卵巢各ニ四個宛アリ。

黃體被膜結締組織ハ甚ダ纖細ニシテ部分的ニハ消失セル所モアルモ全般ト

シテハ尙良ク保存セラレ。

黃體細胞ハ前例ト異ルトコロナク、黃體周邊部ニ内莖膜細胞ノ殘存スルコトモ同様ナリ。中心結締組織核モ貧弱ナガラ尙存スルモノ多シ。

黃體ノ「リポイド」モ前例ト大差ナキモ、重屈折性ノモノハ前例ノ黃體ヨリモ更ニ多量ニシテ黃體細胞内ニ一樣ニ含有セラレ間質細胞ニ比シテ遜色ナキ程ナリ。

陳舊黃體(分娩後二十七日ヲ經過セルモノ)

間質組織内ノ二三個所ニ間質細胞ト稍形態ヲ異ニセル多數ノ細胞群ヨリ形成セラレル組織アリ。該組織ハ纖弱ニシテ部分的消滅ヲ來セル纖維性結締組織被膜ナ有シ、其ノ細胞ノ配列ハ極メテ不規則ニシテ且血管ノ分布ニ乏シ。然而其ノ細胞ハ間質細胞ト類似セル核ヲ有スルモ、原形質透明ニシテ極メテ多量ノ「リポイド」ヲ有シ「ズダンIII染色ニヨルニ橙黃色ニ染色シ、「ニールブラウ」ニテハ淡紅色乃至紫紅色ニ染ミ、スミス氏法弱陽性、フイシユレル氏法陰性ニシテ甚ダ多量ノ重屈折性リポイド」ヲ證明ス。

間質細胞組織

間質細胞組織ハ甚ダ多量ニ存シ細胞ハ凡テ一樣ニ著シク肥大セリ。何レモ一樣ニ多量ノ重屈折性リポイド」及ビ單屈折性リポイド」ヲ以テ充滿セラレ。重屈折性リポイド」ハ加温ニヨリテ消失シ冷却後再ビ現レ大部分ニ於テ定型的交叉像ヲ示ス液狀結晶ヲ認メシム。

第十例 妊娠二十八日家兎卵巢(經産家兎體重三一〇〇瓦)

黃體

左側卵巢ニ五個右側卵巢ニ三個ノ黃體アリテ巢卵表面ニ輕ク膨隆セリ。被膜結締組織ハ纖細ニシテ多少蛇行スルモ全般トシテハ尙ヨク保有セラレ黄體組織ト間質組織トノ境界ヲナセリ。

此ノ時期ニ於ケル黃體ハ大キサ前諸例ノモノト大差ナシト雖モ、其ノ二

三ノモノニアリテハ多少縮小シ附近ニ存スル濾胞ノ發育ニヨリテ壓迫セラレ其ノ部分凹陷シ、球形ヲ呈セザルモノモ存セリ。

黃體ルテイン細胞ハ其ノ少數ニ於テ、核染色不良トナリ原形質内ニ空泡ヲ現出シ、多少退行變性ノ像ヲ認メシムルモノアリ。黃體ノ周邊部ニ於テハ依然トシテ内莖膜細胞ノ少數群ガ殘存スルヲ認メラル。

黃體細胞ノ「リポイド」所見前例ト同様ナリ。

陳舊黃體

前例ノ陳舊黃體條下ニ記載シタルト略同様ノ組織ガ左右卵巢ノ間質組織ノ處々ニ於テ存シ、其ノ「リポイド」所見モ亦前例ニ類ス。

間質細胞組織

間質細胞ノ增殖肥大顯著ニシテ皮質部ニ於ケルモノト雖モ良ク肥大シ、多量ノ重屈折性及ビ單屈折性リポイド」ヲ充滿シ其ノ加温冷却後大ナル滴狀ニ現ハルモノハ美麗ナル定型的交叉像ヲ示スヲ認ム。

第十一例 分娩後十時間經過家兔卵巢(二回經產家兔體重二五三〇瓦)

黃體

黃體ハ卵巢表面ヨリ輕ク膨隆セリ。

鏡檢スルニ黃體組織ハ尙纖細ナル結締組織被膜ヲ以テ包マレ、中心ニハ少量ノ結締組織核ヲ存セリ。其ノ一二ノモノニアリテハ中心ノ結締組織核ハ吸收消失シ其ノ部裂隙狀トナレルモノモ存ス。

黃體細胞ノ退行變化ハ前例ヨリモ更ニ進捗シ、黃體周邊部ノモノニ於テハ核ノ染色力減退シ原形質内ニ空胞ヲ出現シ一般ニ妊娠中ノ黃體ノ如ク活氣アルノ狀ヲ呈スルモノナシ。黃體周邊部ニ於テハ黃體細胞ノ變性ガ顯著トナルニ反シテ内莖膜細胞ノ少シク増殖スルヲ認メラル。

黃體内ニ於ケル毛細血管網モ次第ニ其ノ管腔閉鎖セントスル傾向ヲ示シ、黃體基質結締組織細胞モ稍増殖セリ。

原著 水川家兔卵巢黃體及間質細胞組織ニ就テ

「ズダンIII染色ニヨルニ黃體細胞ハ黃赤色ニ染色スル」リポイド」ヲ滴狀ニ多量ヲ含有シ、「ニールブラウ」ニテハ革色、紫、紫紅色滴狀ニ現レ、スミス氏法、フイシユレル氏法共ニ陽性ニシテ、重屈折性リポイド」ハ妊娠後半期黃體ニ比較スレバ著シク少量ニシテ、黃體細胞内ニ一様ニ少許含有セラル。

陳舊黃體(分娩後三十六日ヲ經過セルモノ)

間質組織内ニ於テ處々ニ、間質細胞ニ比シテ原形質明ルク核ノ萎縮狀ヲ呈シ、間質細胞類似ノ細胞群ヨリ成ル組織ガ貧弱ナル纖維性結締組織被膜ニ包マレ或ハ被膜ナクシテ存在セリ。其ノ形態前諸例ノ陳舊黃體トシテ述ベタルモノト著差ナシ。該細胞ハ「ズダンIII染色ニヨルニ細胞内ヲ充滿セル多量ノ「リポイド」ヲ存シ、「ニールブラウ」ニテ淡紫紅色乃至淡革色、一小部ハ青色滴狀ニ染色シ、スミス氏法陽性ニシテ一部ニハフイシユレル氏法陽性ナルモノモ存シ、重屈折性リポイド」ハ之ヲ含有スルモノモ存スルモ亦全然認メラザルモノモアリ。

間質細胞組織

間質細胞組織ハ發育極メテ良好ニシテ細胞ハ一般ニヨク肥大シ、一樣ニ多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リポイド」ヲ以テ充滿セラレ、妊娠中ノ前諸例ニ比シテ劣ルコロナシ。重屈折性リポイド」ハ加温ニヨリテ重屈折性ヲ失ヒ冷却後再び出現シ美麗ナル交叉像ヲ示スモノ多數ニアリ。

第十二例 產褥二日家兔卵巢(二回以上經產家兔體重二七三〇瓦)

黃體

卵巢表面ヨリ少シク膨隆セル黃體左右卵巢ニ各四個宛存シ、黃體表面ニ血管ノ分布スルヲ透見シ得ベシ。

鏡檢スルニ黃體被膜結締組織ハ貧弱ナルモ尙良ク保有セラレ、中心結締組織核モ殘存スルモノ多キモ、二三ノ黃體ニアリテハ既ニ大部分吸收セラレ裂

障ヲ殘セルモノアリ。黃體ルテイン細胞ノ變性ハ顯著ニシテ核ノ融解シ消滅セルモノ或ハ辛フジテ染色シ得ベキ胞狀ノ核ヲ存セルモノ多數ニアリ。黃體周邊部ニ於テハ少數ナルモ黃體細胞核ノ「ビクノーゼ」ノ狀或ハ核融解ヲ認ムルコトヲ得ベシ。之ニ反シテ黃體被膜ノ内側ニ於テハ内英膜細胞ガ稍多數ニ存シ黃體周邊部ヨリ結締織ニ沿ヒテ黃體内部ニ向ヒテ進入シ稍増殖セントスルノ狀ヲ認メシム。斯クノ如キ變化ニ伴ヒ、黃體内ノ毛細血管ハ漸次其ノ管腔閉鎖シ、結締織細胞モ少シク増殖ヲ來セリ。

黃體細胞ノ「リボイド」ノ染色所見ハ前例ト異ルトコロナク、重屈折性リボイドハ前例ヨリモ稍多量ナルモ妊娠後半期黃體ニ比スレバ著シク少シ。

陳舊黃體

前例ニ於テ述ベタル陳舊黃體ト殆ンド同様ナル形態ヲ有スルモノ數個アリ。該細胞ハ又多量ノ「リボイド」ヲ以テ充サレ、「ズダンIII陽性」、「ニールブラウ」ニテ革色ニ染色シ、フイシユレル氏法陰性、スミス氏法弱陽性ニシテ重屈折性リボイド極メテ多量ニシテ間質細胞ヨリモ遙カニ多量ナルモノアルモ、一部ニ於テハ重屈折性リボイドヲ含有セズ、スミス氏法ノイシユレル氏法陽性ナル「リボイド」ヲ多量ニ存スルモノアリ。

間質細胞組織

前諸例ト大差ナシ。

第十三例 產褥三日家兎卵巢(二回以上經產家兎體重二七〇〇瓦)

黃體

黃體ハ最早卵巢表面ニ隆起セズ、卵巢表面ヨリ見ルニワヅカ膨隆セル黃白色ノ斑數個アリ。

鏡檢スルニ黃體被膜ハ纖細菲薄ナルモ尙殘存シ、結締織中心核モ少許殘存スルモノ多シ。黃體細胞ノ變性ハ更ニ進捗シ黃體全般ニ亘レリ。内英膜細胞ハ黃體周邊部ノミナラズ黃體内部ニ向ヒテ索狀又ハ群簇狀ヲナシテ著シ

ク増殖シ、黃體細胞ハ内英膜細胞索ニヨリテ少數群ニ分割セラレ或ハ散在性ニ内英膜細胞群中ニ大ナル空胞狀ヲナシテ殘存シ、核ノ消滅スルモノ極メテ多ク、辛フジテ認メウベキ胞狀ノ核ヲ存スルモノモ認メラル。斯クノ如ク黃體細胞ノ變性崩壞著シク内英膜細胞ノ増殖ヲ來セル部位ニ於テハ多數ノ假性エカジン嗜好白血球ノ浸潤著シキヲ見ル。

變性黃體細胞ハ「ズダンIII染色ニテ黃赤色ニ染色スル」「リボイド」ガ大ナル滴狀ニ細胞内ニ充滿シ「ニールブラウ」ニテハ青色滴狀、革色滴狀ニ存シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法陽性ナリ。内英膜細胞ノ黃體周邊部ノ稍肥大セルモノニハ稍多量ニ、其肥大著シカラザルモノニ於テハ少量ノ「リボイド」ヲ細滴狀ニ証明ス。變性黃體細胞内ニハ少カラザル重屈折性リボイドヲ証明シ、其ノ一部ハ加溫冷却後交叉像ヲ呈スルモ他ノ一部ノモノハ加溫冷却後ト雖モ尙交叉像ヲ示サザル針狀ノ結晶トシテ認メラル。内英膜細胞ノ肥大セルモノニハ少許ノ重屈折性リボイドヲ証明スルモノアルモ一般ニハ認メ難ク交叉像ヲ示スモノナシ。

陳舊黃體(分娩後三十九日ヲ經過セルモノ)

間質組織内ノ三四個所ニ於テ前諸例ノ陳舊黃體トシテ記述シタルモノト殆ンド同様ナル組織アリ。該細胞ハ其ノ原形質極メテ明徹ニシテ核ハ萎縮シ、細胞ノ大キサ間質細胞ト同大ナル細胞ニシテ、此ノ細胞ノ少數群ガ貧弱ナル纖維性結締織ニ包マレテ存シ、其ノ一個ニアリテハ中央ニ少許ノ結締織ヨリナレル中心核ヲ有シ、形態ハ小ナルモ、恰モ黃體ノ如キ觀ヲ呈ス。然レドモ細胞ノ配列ハ極メテ不規則ニシテ毛細血管ノ分布ナシ。此ノ細胞ハ何レモ一樣ニ「ズダンIIIニテ黃赤色ニ染色スル」「リボイド」ヲ充滿シ、「ニールブラウ」ニテ紫紅色ニ染色シ、スミス氏法フイシユレル氏法陽性ニシテ、少許ノ重屈折性リボイドヲ含有スルモノ多シ。

間質細胞組織

間質細胞ノ一般狀況前諸例ト大差ナク、何レモ多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リボイドヲ含有ス。重屈折性リボイドハ妊娠後半期例ニ比スレバ稍少量ナルガ如シ。

第十四例 産褥四日家兎卵巢(二回以上經産家兎體重二六二〇瓦)

黃體

肉眼的ニハ前例ト差異ナシ。右側卵巢ニ四個左側卵巢ニ三個アリ。

體組織の所見ニ於テモ、黃體ノ退化狀況前例ヨリモ稍進捗セル感アルモ大體ニ於テ顯著ナル差異ヲ認メ難シ。

「リボイド」染色所見モ亦殆ンド異ルトコロナキモ、本例ニ於テハ黃體組織ノ何レノ部位ニアリテモ重屈折性リボイドヲ認メズ。

陳舊黃體

左右ノ卵巢ニ各二三個ノ陳舊黃體アリ。其ノ所見前例ノモノト著差ナシ。其ノ「リボイド」染色所見モ大體ニ於テ同様ナリ。重屈折性リボイドハ一般ニ少量ナリ。

間質細胞組織

間質細胞ハ多量ノ單屈折性リボイドヲ含有スルモ、重屈折性リボイドハ前諸例ニ比較スルニ少量ナリ。

第十五例 産褥五日家兎卵巢(體重三〇一〇瓦)

黃體

卵巢表面ニ膨隆セル黃體ヲ認メザルモ黃白色ノ斑トシテ透見シ得ルモノ數個アリ。

鏡檢スルニ黃體ハ妊娠後半期黃體ニ比シテ著シク縮小セリ。黃體被膜ヲナス纖維性結締組織ハ纖維非薄ニシテ多少蛇行スルモ一般的ニハ尙良ク保存セラル。中心結締組織核モ貧弱ナガラ殘存スルモノ多シ。

内英膜細胞ハ黃體內ノ何レノ部分ニ於テモ著シク増殖ヲ來シ、黃體細胞

ハ増殖セル内英膜細胞群中ニ散在性ニ或ハ少數群ヲナシテ殘存シ、多クハ核消滅シ大ナル空胞トシテ認メラル。斯クノ如キ部位ニアリテハ多數ノ假性エオジン嗜好白血球ノ浸潤アリ。内英膜細胞ノ増殖ハ顯著ナルニ拘ラズ其ノ確實ナル核分裂像ヲ認メ難ク、細胞ハ黃體周邊ニ於ケル肥大セルモノハ間質細胞ニ類似スルモ、内部ニ於ケルモノハ一般ニ小形ニシテ濾胞ノ内英膜細胞ニ酷似ス。

「ズダンIII」染色ニヨルニ退化黃體細胞ハ尙多量ノ「リボイド」ヲ含有シ、内英膜細胞ハ其ノ肥大セルモノハ少カラザル「リボイド」ヲ証明スルモ、肥大著シカラザルモノニハ細滴狀ニ少許証明スルニ過ギズ。「ニールブラウ」染色、スミス氏法、フイシユレル氏法前例ト大差ナク、重屈折性リボイドハ變性セル黃體細胞ニ少カラズ証明シ得ルモ、交叉像ヲ示スモノ乏少ニシテ、輕度ノ加温ニヨリテ消失セザル針狀ノ結晶ヲ示スモノ多シ。

間質細胞組織

間質細胞ハ皮質及ビ髓質ニ亘リテヒロク存在スルモ、全般ニ互リテ間質細胞ノ變性ヲ來シ、核ノ染色不良トナリ原形質ハ潤濁シ、「エオジン」ニ稍濃染シ、重屈折性リボイドハ著シク減少シ、限局性ニ一部ニ於テ認メラルル外他ノ部ニハ全ク之ヲ認メズ。

第十六例 産褥七日家兎卵巢(二回經産家兎體重二五〇〇瓦)

黃體

卵巢表面ヨリ黃體ヲ認ムルコト能ハズ。

鏡檢スルニ黃體ハ前例ヨリモ更ニ縮小シ、貧弱ナル結締組織被膜ニ包レテ存セリ。而シテ多數ニ於テ球形ヲ呈スルモ、一個ニアリテハ近接セル大ナル濾胞ニ壓迫セラレテ不正形ニ變ジ、中心結締組織核ハ三個ニ於テ存シ一個ニ於テハ消滅セリ。

内英膜細胞ハ黃體內ニ余ストコロナク増殖シ、黃體周邊ノモノヨリ次第

ニ肥大セリ。黃體細胞ハ増殖セル内英膜細胞群中ニ少數散在性ニ殘存シ、最早ヤ核ヲ存スルモノ殆ンドナク大ナル空胞ト化セリ。假性エオジン」嗜好白血球ノ浸潤ハ依然トシテ認メラル。

黃體細胞ノ殘骸ハ多量ノ「リボイド」ヲ以テ充滿セラレ、「ズダンIII」ニテ黃赤色ニ、「ニールブラウ」ニテ青色乃至紫紅色ニ染色シ、スミス氏法、フイシユレル氏法陽性、且針狀或ハ不定形ノ結晶トシテ認メウル重屈折性リボイド」ヲ少許存ス。内英膜細胞ニモ細滴狀ニ「リボイド」ヲ証明シ得ルモ其ノ肥大セルモノニハ稍多ク小形ナル細胞ニハ極メテ少量ナリ。又微細ナル重屈折性リボイド」ヲ認メラルルモ其ノ量ハ甚ダ少量ナリ。

陳舊黃體(分娩後四十三日ヲ經過セルモノ)

間質組織内ノ二三個所ニ於テ、間質細胞ト稍形態ノ異レル細胞ノ少數群ガ微細ナル纖維性結締組織ニ包マレテ存セリ。該細胞ハ大キサ間質細胞ニ略等シク、核モ亦甚ダ類似スルモ、多クハ甚ダ萎縮シ或ハ消滅シ、其ノ原形質内ニ潮溼性ニ淡黃褐色ノ色素ヲ含有セリ。細胞内ニハ多量ノ「リボイド」ヲ含有シ「ズダンIII」ニテ黃赤色ニ染色スル「リボイド」ヲ以テ充滿シ、「ニールブラウ」ニテ大部分ハ青色乃至堇色ニ染色シ、スミス氏法、フイシユレル氏法陽性ニシテ、重屈折性リボイド」ヲ含有セズ。

間質細胞組織

一般の所見前第十四例ニ類シ、細胞ハ多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リボイド」ヲ含有セリ。

第十七例 産褥九日家兎卵巢(三回以上經産體重二九三〇瓦)

黃體

組織學的ニ産褥七日目ノ黃體ト顯著ナル差異ナキモ、内英膜細胞ハ肥大セルモノ多ク、黃體細胞ハ中心部ニ於テ少數散在性ニ空胞トナリテワヅカニ其ノ殘骸ヲ止ムルニ過ギズ。即チ此ノ時期ニ於テ黃體ハ黃體細胞ノ殆ン

ド全キ消滅ヲ來シ黃體内ニ殘存シ居タル内英膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ一種ノ新間質細胞樣組織ヲ形成セルモノニシテ、此ノ組織ハ尙未ダ黃體被膜タリシ纖細ナル纖維性結締組織ヲ以テ包マレ他ノ間質組織ト明カニ境界セラリ。而シテ此ノ組織内ニハ尙少數ノ假性エオジン嗜好白血球ノ浸潤アリ。

「リボイド」ノ染色ニ於テモ産褥七日目黃體ト著差ナク内英膜細胞ニ於テ「ズダンIII」ニテ黃赤色滴狀ニ染色セラレ、「リボイド」稍増加シ、「ニールブラウ」ニテ淡紅色、スミス氏法、フイシユレル氏法殆ンド陰性ニシテ、一樣ニ微細ノ重屈折性リボイド」ヲ含有スルモ其ノ少量ニシテ交叉像ヲ示スモノヲ認メズ。黃體細胞ノ殘骸ノ「リボイド」ハ前例ノモノト差異ナシ。

陳舊黃體(分娩後四十五日ヲ經過シタルモノ)

前例ノ陳舊黃體ト殆ンド同様ナル組織ガ間質組織内ニ數個存在セリ。本例ニ於テハ其ノ細胞内ニ色素ヲ欠如セリ。「リボイド」所見前例ト同様ナリ。

間質細胞組織

間質細胞ハ間質内ニヒロク存在シ細胞ハ肥大シ、多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リボイド」含有シ、妊娠中ノ例ト著差ナシ。

第十八例 産褥十三日家兎卵巢(二回以上經産家兎體重二八六〇瓦)

鏡檢スルニ前諸例ニ於テ認メタルガ如キ黃體或ハ黃體ノ退化變性像ヲ認メザルモ、間質組織内ノ三四個所ニ於テ貧弱ナル纖維性結締組織ヲ以テ包マ

レタル間質細胞酷似ノ細胞ノ多數群ヨリナレル略球形ヲ呈セル組織アリ。該細胞ハ大キサ間質細胞ト略等シク、核モ亦之ト大差ナキモ此ノ組織ノ中央部ニ於ケル細胞ハ大キサ間質細胞ヨリモ小型ニシテ内英膜細胞ニ類似セリ。而シテ此ノ細胞ハ一般ニ原形質ガ明微ニシテ、爲メニ組織全般ガ間質細胞組織ヨリモ著シク明ルク見ユ。更ニ間質細胞組織ト本組織ノ異ル點ハ本組織ニ於テハ細胞ノ配列ガ極メテ不規則ニシテ毛細血管ノ分布ナク、時

ニ本組織ノ中心ニハ少量ノ中心結締組織ヲ有スルコトアリ。即チ此ノ組織ハ黃體ノ退行後、黃體內ニ殘存シタル内莖膜細胞ノ増殖並ニ肥大ニヨリテ形成セラレタル一種ノ間質細胞様組織ニ外ナラズ。

此ノ細胞ハ既ニ少カラザル「リボイド」ヲ含有スルモノニシテ、「ズダンIII」ニテ橙黃色滴狀ニ、「ニールブラウ」ニテハ周邊ノ細胞ハ紫紅色滴狀ニ、内部ノモノハ淡紅色ニ染色シ、スミス氏法ハ周邊部ノモノハ弱陽性ナルモ、中央部ニ於ケルモノハ殆んど陰性ニシテ、「フィシユレル」氏法モ陰性ナリ。而シテ是等ノ細胞ハ一樣ニ微細ナル重屈折性リボイド」ヲ含有スルモ間質細胞ニ比スレバ著シク少量ニシテ、明力ナル交叉像ヲ呈スルモノナシ。

陳舊黃體(分娩後四十六日ヲ經過シタルモノ)

前述セルガ如キ黃體ノ退行ヨリ生ジタル組織以外ニ、間質組織内ニ於テ前述ノ如キ細胞ニ甚ダ類似スルモ、更ニ其レヨリモ原形質ノ明ルクシテ核ノ高度ニ萎縮シ間質細胞ト同大ナル細胞ノ少數群ガ貧弱ナル結締組織ニ包マレ或ハ被膜ヲ有セズシテ存スルヲ認ム。而シテ其ノ大多數ノ細胞ニ於テ其ノ原形質内ニ濃莖性ニ微細顆粒狀ノ淡黃褐色ノ色素ヲ含有セリ。

「リボイド」染色ニヨルニ該色素細胞ハ「ズダンIII」ニテ黃赤色ニ染色スル「リボイド」ヲ以テ充滿セラレ、「ニールブラウ」ニテ青色乃至紫紅色ニ染色シ、スミス氏法陽性、フィシユレル氏法モ大部分ニ於テ陽性ニシテ重屈折性リボイド」ヲ有スルモノナシ。

間質細胞組織

間質細胞ハ皮質、髓質ニ亘リヒロク存在スルモ、髓質部ニ於テハ限局性ニ間質細胞ノ變性ヲ來セルモノアリテ、其ノ核染色不良トナリ、或ハ核ノ消滅ヲ來シ、原形質潤濁シ細胞相互ノ境界不明トナリ近接ノモノト融合セルガ如キ狀ヲ示シ、其ノ「リボイド」ノ含有量減少シ、殊ニ重屈折性リボイド」ハ全ク消失セリ。然レドモ皮質部ニ於ケル間質細胞ニハ變性ノ認めムベ

原著 水川家兔卵巢黃體及間質細胞組織ニ就テ

キモノナク多量ノ單屈折性及ビ重屈折性リボイド」ヲ含有セリ。

第十九例 產褥十八日家兔卵巢(第十六例ト同ジ家兔)

間質組織内ニ前例ニ記述セルモノト略同様ナル組織三個アリ。此ノ組織ノ大キサハ略成熟濾胞ニ等シキ或ハ稍小ニシテ球形ヲ呈スルモノ二個、他ノ一個ハ不正形ヲ呈セリ。而シテ此ノ細胞ハ前例ノモノヨリモ更ニ肥大シ間質細胞ニ酷似セリ。此ノ組織内ニハ纖細ナル結締組織ガ交錯シ該細胞群ヲ更ニ少數群ニ分割シ居ルモ、細胞ノ配列極メテ不規則ニシテ毛細血管ノ分布ナシ。

之ヲ要スルニ黃體ノ退行後、其ノ内莖膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ形成セラレタル新生間質細胞様組織ハ在來ノ間質細胞組織ニ酷似スルモ、此ノ期ニ於テハ尙結締組織被膜ニヨリテ包マレ、細胞ノ配列ガ亂雜ニシテ、毛細血管ニ乏シキコト並ニ細胞原形質ガ明ルク且「リボイド」染色ニヨリテ多少異ルトコロアルヲ以テ在來ノ間質組織或ハ閉鎖濾胞ヨリ生ジタル間質組織ト區別スルコトヲ得ベシ。

即チ該細胞ハ「ズダンIII」ニテ橙黃色ノ「リボイド」ヲ多量ニ証明シ得ルコト在來ノ間質細胞ト異ルトコロナキモ、「ニールブラウ」ニテ淡紫紅色乃至淡紅色滴狀ニ染色シ、スミス氏法ハ弱陽性ナルモノモ存スルモ陰性ナル部分モアリ、フィシユレル氏法ハ陰性ニシテ、重屈折性リボイド」ノ微細ナルモノナ一樣ニ鈔カラズ含有スルモ交叉像ヲ認め得ルモノナク、且ツ其ノ量在來ノ間質細胞ニ比シテ少量ナリ。

間質細胞組織

間質細胞ハヒロク存シ一樣ニ單屈折性及ビ重屈折性リボイド」ヲ多量ニ存スルモ、重屈折性リボイド」ハ妊娠後半期例ニ比スレバ著明ニ減少セリ。

第二十例 產褥二十二日家兔卵巢(第十八例ト同ジ家兔)

間質組織内ニ前述ノ如キ組織數個存在セリ。其ノ大キサ前例ノモノヨリ

モ更ニ縮少シ、結締組織被膜モ部分的ニ消滅セリ。此ノ細胞ハ前述ノ如ク多量ノ「リポイド」ヲ含有シ「ズダンIII」ニテ橙黃色ニ染リ其ノ量在來ノ間質細胞ニ劣ラズ。「ニールブラウ」ニテハ淡紅色乃至淡紫紅色ニ染色シ、スミス氏法弱陽性、フイシユレル氏法ハ陰性ナリ。重屈折性リポイド」ノ微細ナルモノヲ一様ニ含有スルモ在來ノ間質細胞ニ比スレバ少量ニシテ明カナル交叉像ヲ呈スルモノヲ認め難シ。

陳舊黃體(分娩後五十五日ヲ經過シタルモノ)

間質細胞内ノ數個所ニ於テ淡黃褐色ノ微細顆粒狀ノ色素ヲ有スル細胞ノ少數群ヲ認ム。該色素細胞ハ其ノ大キサ間質細胞或ハ黃體ノ退行後ニ生ジタル一種ノ間質組織ヲ形成セル細胞ト略同大ニシテ、核ハ著シク萎縮シ或ハ消滅セルモノ多數アリ。是等ノ色素細胞ハ多量ノ「リポイド」ヲ含有シ、「ズダンIII」ニテ黃赤色ニ染色スルモノヲ以テ充滿セラレ、「ニールブラウ」ニテ深青色滴狀又ハ帶綠青色滴狀ニ染リ、スミス氏法、フイシユレル氏法共ニ陽性ニシテ重屈折性リポイド」ハ含有セズ。

間質細胞組織

産褥十三日目卵巢間質細胞ト同様髓質部ノ間質細胞組織ハ限局性ニ變性シ、「リポイド」ノ含有少量ニシテ重屈折性ノモノハナシ。皮質部ノモノハ健常ニシテ「リポイド」多シ。

第二十一例 産褥二十六日(家兎卵巢體重二七二〇瓦)

前例ト殆ンド同様ナル組織ガ間質内ニ數個アリ。其ノ大キサ縮少シ且結締組織増殖セリ。其ノ「リポイド」所見モ大差ナシ、細胞ハ「ズダンIII」ニテ黃赤色ニ染色スル多量ノ「リポイド」ヲ含有シ、「ニールブラウ」ニテ淡紅色ニ、一部分ニ於テ革色ニ染色シ、スミス氏法ハ殆ンド大部分ニ於テ陰性ナルモノ一部ニ於テ陽性ナルモノモ存シ、フイシユレル氏法モ亦同様ナリ。而シテ一様ニ微細ナル重屈折性リポイド」ヲ含有スルモ多量ナラズ、又交叉

像ヲ示スモノヲ認め難シ。

間質細胞組織

特別ニ記述スベキコトナシ。

第二十二例 産褥三十一日(家兎卵巢(三回以上經産家兎體重三二〇〇瓦)

間質組織内ノ三個所ニ於テ、間質細胞ニ比シテ稍原形質ノ明ルク、核ガ萎縮狀ヲ呈セル細胞ノ少數群ガ微細ナル結締組織ニ包マレ或ハ何等被膜ナクシテ存スルヲ認ム。該細胞群ハ第二十例及ビ第二十一例ニ記述シタル組織ノ更ニ縮小シタルガ如キモノニシテ、細胞ハ一般ニ變性傾向ヲ示シ、核ハ萎縮狀ヲ呈シ或ハ消滅セルモノ多ク、細胞膜ハ幽微ニシテ隣接ノモノト融合セルモノアリ。「ズダンIII」染色ニヨルニ是等ノ細胞ハ黃赤色ノ「リポイド」ヲ以テ充滿セラレ、「ニールブラウ」ニテ革色或ハ青色ニ染色シ、スミス氏法、フイシユレル氏法陽性ニシテ、重屈折性リポイド」ハ認めラレズ。

間質細胞組織

間質細胞ハ全般ニ互リテ變性セルモノ多ク「リポイド」ノ含有量乏少ニシテ、重屈折性リポイド」ハ散在性ニ極メテ微量ニ存セリ。

第二十三例 産褥四十日(家兎卵巢(第二十二例ト同ジ家兎))

間質細胞組織内ノ二個所ニ於テ少數ノ色素細胞群アリ。該色素細胞ハ前例ノ産褥三十一日家兎卵巢間質ニ認メタル一種ノ細胞ト只色素ヲ有スル點ニ於テ異ルノミナリ。該色素ハ淡黃褐色、微細顆粒狀ニ原形質内ニ含有セラル。「ズダンIII」染色ニテ該色素細胞ハ其ノ原形質黃赤染セラレ、「ニールブラウ」ニテ革色乃至青色ニ染リ、スミス氏法、フイシユレル氏法共ニ陽性ニシテ重屈折性リポイド」ハ全クナシ。

間質細胞組織

前例ト大差ナク、「リポイド」ハ更ニ乏少ニシテ重屈折性リポイド」ハ全ク含有セラレズ。

第四章 黃體ニ就テ

第一節 黃體ノ一般的所見及其ノ退行機轉

發生初期ノ黃體即チ交尾後短時間ノ黃體ニ關シテハ既ニ幾多先人ノ研究精細ヲ究メ、予ノ之ニ蛇足ヲ加フルノ要ヲ認メザルトコロナリ。

雌家兔ハ其ノ交尾期ニ於テ、交尾ニヨリテ兩側卵巢ニ各々成熟濾胞二三個ヨリ數個破裂シ、茲ニ黃體ガ形成セラ。一般ニ初妊家兔ハ經產家兔ヨリモ黃體ノ數尠ク仔ノ數モ隨ツテ少シ。而シテ老兔モ亦次第ニ其ノ產出スル仔數ヲ減少スルガ如シ。

交尾後、卵巢ニ黃體ガ完成セラル迄ニハ五六日ヲ要ス。同一家兔ニ於テモ發生初期ニハ黃體ノ發育ノ程度ニハ多少ノ遲速アルコトアリ。

黃體ルテイン細胞ガ濾胞ノ顆粒膜細胞ヨリ發生スルコトハ疑ヲ容レズ、(理由ハ後述スルトコロニヨリテ明カナリ)、然レドモ内莢膜細胞ハ黃體形成初期(交尾後二三日)ニハ尙著明ニ黃體周邊部ニ於テ殘存シ、黃體完成期(交尾後數日)ニ於テモ少數ナガラ黃體周邊部ニ殘存スルヲ認メ得ルモノニシテ、本細胞ガ黃體形成後速ニ變性消失シ或ハ黃體基質結締組織細胞ニ變化スルモノナリトナス諸家ノ所見トハ稍趣ヲ異ニセリ。(實驗例第一例條下參照)而シテ此ノ所見ノ差異ガ今後黃體ノ退行機轉上ニ重大ナル關係ヲ有ス。

予ハ茲ニ予ガ檢索シ得タル所見ニ隨ヒ黃體完成期以後ヲ次ノ如ク四期ニ分類シ、之ガ所見ヲ記述セントス。

一、成熟期黃體

二、退行期黃體

(イ) 黃體ルテイン細胞變性期

(ロ) 内莖膜細胞増殖期

三、間質細胞様組織移行期

四、間質細胞様組織變性期

コノ三及四時期ハ組織の所見上既ニ黃體組織ニ非ズシテ、黃體ノ退行ニヨリテ生ジタル一種ノ間質細胞様組織ナルモ、便宜上黃體退行機轉條下ニ論述スルコトトセリ。

一、成熟期黃體

交尾後黃體ガ完成セラルル迄ニハ前述ノ如ク五六日ヲ要スト雖モ、此ノ時期ノモノハ其ノ大キサ尙大ナラズシテ、其ノ後三四日後ニ於テ著シク増大シ、大凡交尾後一週乃至十日前後ニ於テ最モ大ナル。爾後黃體ハ肉眼的ニモ組織的ニモ著變ナク、妊娠二十三四日頃迄ハ退行ノ像ヲ認メザルモノナリ。此ノ間ノ黃體ヲ成熟期黃體トス。

肉眼の所見

黃體ハ小疣狀或ハ半球狀ニ卵巢表面ヨリ突隆シ、其ノ表面ニ於テ小血管ノ分布スルヲ認メ得ベシ。初期ノモノト雖モ排卵ノ痕跡ハ一般ニ認メ難ク、黃體ノ大キサハ日數ノ經過スルニ伴ヒテ増大ス。黃體ノ剖面ハ灰白黃色ニシテ初期ノモノハ中心ニ尙少許ノ凝血核ヲ有スルコトアリ。

組織の所見

黃體組織ハ纖維性結締組織ヨリナル被膜ヲ以テ包マレ、周圍ノ間質組織ト明カニ境界セラル。黃體ルテイン細胞ハ増殖肥大シ黃體中心ニ少許ノ結締組織ヲ保有ス。黃體細胞ノ核分裂像ハ此ノ時期ニハ全ク認メラレズ。黃體中心ノ少許ノ凝血核ハ大體ニ於テ交尾後數日以内ニ機化シ結締組織ニ變ズルモノナルモ、濾胞内ニ多量ノ凝血ヲ有スル場合ニハ其ノ機化モ遅延シ、且又多數ノ「ヘモジリン」ヲ攝取セル單核ノ細胞(組織球)ヲ結締組織核内ニ認ムベシ。

黃體ルテイン細胞ハ多角形或ハ圓形ノ大ナル細胞ニシテ原形質ハ淡ク「エオジン」ニ染色セル微細顆粒狀ヲ呈シ、其

ノ中央ニ「クロマチン」ニ乏シキ胞狀ノ一核ヲ有シ、更ニ此ノ核内ニ一乃至二個ノ明瞭ナル核小體ヲ認メ得ベシ。交尾後五六日ノ黃體ルテイン細胞ハ其ノ大キサ尙小ナルモ八乃至十日前後ニ於テハ其ノ肥大ハ極度ニ達ス。

黃體ルテイン細胞間ニハ結締細胞介在シ、黃體被膜部ヨリ内部ニ進入セル結締組織索ニ伴ヒテ血管モ進入シ、毛細血管ハ黃體ルテイン細胞ヲ圍繞シテ緻密ナル血管網ヲ形成セリ。

成熟期ノ黃體ノ何レノ例ニアリテモ黃體被膜結締組織ノ内側ニ接シ、黃體細胞ト形態ヲ稍異ニスル細胞ガ少數群ヲナシテ殘存スルヲ認メウルモノニシテ本細胞ハ黃體ルテイン細胞ニ比シテ其ノ大キサ著シク小サク、其ノ三分ノ一乃至五分ノ一大ヲ示シ、原形質ハ淡ク「エオジン」ニ染色シ微細顆粒狀ヲ呈シ核モ亦小ニシテ圓形乃至橢圓形ヲ呈シ稍「クロマチン」ニ富ミ明カナル核小體ヲ認メ難ク、成熟濾胞ノ内莢膜細胞及間質細胞ト酷似セリ。斯クノ如ク黃體細胞ハ該細胞ハ形態的ニ多少異ルトコロアルノミナラズ、初期ニハ「リポイド」染色ニ於テモ著シキ差異アリ、且又該細胞ハ常ニ黃體周邊部ニ存ス、是等ノ所見ヨリシテ予ハ該細胞ハ内莢膜細胞ノ殘存スルモノト認メ之ヨリ黃體細胞ニ變化スルノ像或ハ之ガ紡錘形結締細胞ニ移行スルノ像ヲ認メタルコトナシ。只黃體ルテイン細胞ノ増殖肥大著シキ場合ニハ是ガタメニ内莢膜細胞ハ壓迫セラレ萎小スルガ爲メニ稍見出シ難キコトアルヲ認ムルノミ。

二、退行期黃體

(イ)、黃體ルテイン細胞變性期

此ノ時期ニ屬スル黃體ハ妊娠二十五六日以後ヨリ分娩後一、二日間ニ於ケルモノナリ。

肉眼の所見

黃體ハ卵巢表面ニ輕ク膨隆シ其ノ大キサ及剖面ノ狀況ハ前ノ期ニ於ケルモノト畧同様ナリ。

組織の所見

黃體ノ一般の所見ハ前ノ期ニ於ケルモノト大差ナキモノ多キモ、黃體ノ大キサ稍縮小シ且球形ヲ呈セズシテ隣接セ

ル濾胞ノ既ニ發育セルガ爲メニ之ニ壓迫セラレテ凹陥セルモノモ存セリ。詳細ニ檢スルニ妊娠末期黃體ハ其ノ黃體ルテイン細胞ニ多少ノ退行變化ノ發現スルヲ認メ、時日ノ進捗ト共ニ著明トナリ、分娩後ニ於テハ一樣ニ顯著ナル變性像ヲ示セリ。

黃體被膜結締組織ハ纖細ニシテ菲薄ナルモ尙良ク保有セラレ、黃體組織ト間質組織トノ境界ヲ維持セリ。黃體中心ノ結締組織ハ吸收セラレテ消滅スルモノ或ハ少量ナルモ尙殘存スルモノ等アリテ之ガ吸收ハ黃體個々ニヨリテ一樣ナラズ。固ヨリ之ガ吸收消滅ハ其ノ結締組織ノ大小或ハ「ヘモジデリン」沈着等ノ狀態ニ應ジテ遲速アルモノナリ。

黃體ルテイン細胞ニ於テハ核ノ染色力減退シ、原形質濃濁シ或ハ大ナル空胞ヲ現出シ、分娩後ニ於テハ核ノ消失ヲ來スモノ多ク黃體ルテイン細胞ハ恰モ大ナル空胞狀ニ見ユルモノアリ。黃體ルテイン細胞核ハ一般ニ核融解ニヨリテ消滅スルガ如キモ、黃體周邊部ニ於テハ「ルテイン細胞核」ノ「ビクノーゼ」ニ陷レルモノヲ散見ス。黃體ルテイン細胞ニハ斯クノ如ク顯著ナル退行變化ヲ認メラルルニ反シ、黃體周邊部ニ少數ナガラ殘存スル内莖膜細胞ニハ何等ノ變化ヲ認ムルコトナク、前ノ期ニ於テ述ベタルト同様ノ形態ヲ有シテ存シ、黃體ルテイン細胞ノ變性顯著トナルニ隨ヒ、明瞭ニ之ガ所在ヲ認メ得ベク且又多少之ガ増殖スルヲ認メ得ルモノナリ。黃體内ノ毛細血管網ハ妊娠初期ノ如ク充盈スルコトナク、妊娠末期ヨリ分娩後ニ於テハ次第ニ其ノ管腔閉鎖シ、黃體内ノ結締組織細胞モ増殖ヲ開始ス。而シテ黃體周邊部ニ於テハ少數ノ假性エオジン嗜好白血球ノ浸潤ヲ認ムルニ至ル。(黃體リポイドノ條下參照)

(ロ、内莖膜細胞増殖期)

此ノ期ニ屬スル黃體ハ分娩後二、三日頃ヨリ産褥十日頃迄ニ於ケルモノナリ。

肉眼的所見

此ノ時期ニ於ケル黃體ハ初メハ尙卵巢表面ニ稍膨隆シ、其ノ大キサハ多少縮小セルガ如キモノモアレドモ一般ニ前期ノモノト大差ナシト雖モ、時日ノ經過ニ伴ヒ其ノ大キサ著シク縮小スルト共ニ卵巢表面ヨリ次第ニ沈降シ表面ヨ

リ見レバ只灰白黃色ノ斑ト化シテ其ノ部ニ血管ノ分布ヲ認メラルルニ至ル。

組織的所見

黃體被膜結締組織ハ纖細菲薄ナルモ全般ニ亘リテ尙良ク保有セラレ黃體組織ト周圍ノ間質組織ノ境界ヲ維持ス。黃體ガ次第ニ縮小スルニ及ビテハ被膜結締組織ハ其ノ走行迂曲スルモ、纖維ヲ増加シ之ガ消滅ヲ見ルコトナシ。中心結締組織ハ殘存スルモノ、消失スルモノ一様ナラザルコト前ニ述べタルガ如シト雖モ、黃體ノ變性ニ伴ヒ黃體內結締組織細胞ノ增殖ヲ來スヲ以テ、之ト癒合シ依然トシテ中心結締組織核ヲ保有スルモノ多シ。

黃體ルテイン細胞ノ變性崩壞ハ一層進捗シテ、核ノ消失シ空胞狀ニ化セルモノヲ多ク認メ、其ノ數モ次第ニ少數トナル。之ニ反シテ黃體周邊部ニ存シタル內莖膜細胞ハ俄然增殖ヲ開始シ、結締組織ニ伴ヒテ黃體中心部ニ向ヒテ索狀ニ進入增殖シ、黃體個々ニヨリテ多少ノ遲速アルモ分娩後五日乃至一週ニシテ內莖膜細胞ハ黃體內ニ沿ク增殖シ、黃體ルテイン細胞ハ此ノ增殖セル內莖膜細胞群中ニ散在性ニ少數認メラレ、細胞核ハ既ニ消失シテ大ナル空胞狀ヲ呈スルカ或ハ核ノ染色力減退シテ辛フジテ認メ得ベキ胞狀ノ核ヲ示シ、ワヅカニ其ノ「ルテイン細胞ノ殘骸ナルヲ認メシムルニ至ル。而シテ增殖セル內莖膜細胞ハ初メハ其ノ形態尙小ナルモ漸次周邊部ノモノヨリ肥大シ來リ間質細胞ト其ノ形態酷似スルニ至ル。(黃體細胞ノ變性ノ狀況ハ黃體リポイド」ノ條下參照ヲ要ス)

斯クノ如ク內莖膜細胞ハ顯著ナル增殖ヲ營ムニ拘ラズ恒ニ核分割像ヲ缺如シ、之ヲ明カニ認メ難シ。

カカル變化ニ伴ヒ黃體內ノ血管ハ其ノ稍大ナルモノヲ除キ內腔閉鎖シ、結締組織細胞ハ盛ナル增殖ヲ來シ、又黃體ルテイン細胞ノ變性崩壞顯著ニシテ內莖膜細胞ノ增殖盛ナル部位ニ於テハ夥シキ假性エオジン嗜好白血球ノ浸潤ヲ認ムルヲ以テ、黃體內ハ今ヤ極メテ混沌タル狀況ヲ呈スルニ至ル。

三、間質細胞樣組織移行期

此ノ時期ニ屬スルモノハ產褥十日頃ヨリ以後產褥二十五六日頃迄ノモノナリ。即チ此ノ期ニ於テハ黃體組織ハ既ニ

全ク消滅シ、其ノ部ニハ黃體內ニ殘存セル內莢膜細胞ノ增殖肥大ニヨリテ新生間質細胞樣組織ガ形成セラルルヲ以テ此ノ時期以後ノモノハ狹義ニ於テハ最早黃體ト稱シ得ザルモノナリ。

肉眼の所見

黃體ノ存在シタル部位ヲ認ムルコト能ハズ。剖面ニ於テモ亦同様ニシテ、間質組織ト新生間質組織トヲ區別スルコト能ハズ。

組織の所見

組織的ニモ黃體組織トシテ認メ得ラズト雖モ、間質組織ノ處々ニ一種ノ細胞群ヨリナル數個ノ組織アリテ、之ヲ形成セル細胞ハ間質細胞ト酷似スルモ詳細ニ檢スルニ多少普通ノ間質細胞ト形態ヲ異ニスルヲ認メ得ベシ、而シテ此ノ組織ハ球形或ハ不正形ヲ呈シ纖維ナル結締組織ヲ以テ被包セラレ、中心ニ少許ノ結締組織ヲ保有スルモノアリ、且ツ本組織ヲ形成スル細胞ハ前ノ期ニ於テ認メタル內莢膜細胞ト酷似シ、且ツ兩者ノ間ニ移行ノ像ヲ認メ得ルヲ以テ本組織ガ黃體發生部ニ發生セルモノナルコトヲ推シ知得ベシ。

此ノ細胞ヲ詳細ニ檢スルニ、其ノ大キサハ畧間質細胞ニ等シク、核モ亦之ニ酷似シ、稍「クロマチン」ニ富ミ、一般ニ核小體ハ明カナラズシテ、其ノ被膜内側ニ接シテ存スルモノハ全ク間質細胞ト區別シ難キモ、中心部ニ於ケルモノハ細胞ノ形狀內莢膜細胞ニ近似セル形態ヲ有ス。而シテ此ノ細胞ノ間質細胞ト異ルトコロハ其ノ原形質ノ間質細胞ニ比シ著シク明確ニシテ且其中ニ含有セラルル「リポイド」ノ性質及量ニ於テ少シク相異アルコトナリ。（「リポイド」ノ條下ニ詳述ス）

此ノ新間質細胞樣組織ハ錯綜セル纖弱ナル結締組織ニヨリテ多數ノ細胞群ニ分割セラルルモ、元來本組織ハ退行黃體ニ於テ內莢膜細胞ガ不規則ニ増殖シ肥大シテ生ジタルモノナルヲ以テ、其ノ細胞ノ配列ハ極メテ難然タルモノアリテ普通ノ間質細胞組織ニ於ケル間質細胞配列ノ比較的整然タルモノアルニ比シ大ナル相違アルト共ニ、細胞相互ノ間ニ

モ毛細血管ノ分布ナク、組織ハ一般ニ血管ノ分布極メテ乏シ。

此ノ組織ハ新生初期ニハ稍大ニシテ、黃體ノ二分ノ一乃至三分ノ一大ナレドモ產褥日數ノ經過ト共ニ次第ニ縮小シ、細胞モ亦次第ニ少數トナリ、周圍ノ發育濾胞ノ壓迫ニヨリテ不正形ヲ呈シ、卵巢皮質部ヨリ次第ニ髓質部ニ沈澱ス。

然ルニ茲ニ甚ダ興味アルハ家兎ガ再ビ妊娠セル場合ニ於テ本組織ノ細胞ガ更ニ多量ノ類脂肪殊ニ重屈折性リポイド」ヲ攝取シテ膨大シ、原形質透明トナルコトニシテ、其後妊娠日數ノ經過スルニ伴ヒ本細胞ニ退行變性現出シ核ハ強度ニ萎縮シ「ヘマトキシリン」ニ濃染スルニ至リ、細胞ノ數モ次第ニ減少スルモ、比較的長期間卵巢組織内ニ發見スルコトヲ得ベク、當該分娩後(本組織ノ形成セラレシ妊娠ノ)五十數日後即チ第二回目ノ分娩後ニ於テモ尙殘存スルヲ認メ得ルモノナリ。

四、間質細胞樣組織變性期

此ノ時期ニ屬スルモノハ產褥二十五六日頃ヨリ三十日乃至四十日頃迄ニ於テ認メ得ルモノナリ。而シテ若シ其ノ家兎ガ再ビ妊娠スルコトアレバ本組織ハ形態的ニ多少變化スルト共ニ、其ノ變性消滅モ亦遷延スルモノニシテ、時ニ產褥五十數日後ノ卵巢ニ於テモ之ヲ認メ得ルモノナルコト前述ノ如シ。

肉眼の所見

本組織ハ、肉眼的ニ之ヲ卵巢表面ニ於テ區別シ得ザルノミナラズ剖面ニ於テモ不明ナルヲ常トス。

組織的所見

前ノ期ニ於テ述ベタル如キ間質樣組織ノ細胞ニ於ケル退行變性像ハ益々著明ニ現レ、核ハ強ク萎縮狀ヲ呈シ「ヘマトキシリン」ニ濃染シ、或ハ消失シ、輕度ノ淋巴球ノ浸潤ヲモ認メシム。細胞ノ消失ト共ニ本組織ハ全體ニ次第ニ縮小シ、結締組織増殖シ、遂ニ本細胞ハ全ク消滅スルニ至ルモノニシテ、結締組織被膜モ亦之ニ伴ヒテ部分的ニ消滅シ、一部

ハ本細胞消失後卵巢基質ニ癒合スルモノナリ。又時トシテ本間質様細胞ノ消失後、結締織ノミ少時殘存シ纖維體ノ形狀ヲ示スコトアルモ、此ノ結締織ノ硝子様變性ヲ來スコトナク、又白體ヲ形成スルコトナシ。此ノ間質様細胞ハ此ノ時期ニ於テ其ノ原形質内ニ瀰蔓性ニ淡黃褐色微細顆粒狀ノ色素ヲ現出スルモノアリ。本色素ハ脂肪含有性消耗性色素ニ屬ス。而シテ家兔黃體ニアリテハ其ノ痕跡ナク消滅スルニ至ル迄ニ「コロイド」及石灰ヲ證明スルコトナシ。

上述セル如ク予ガ研索シ得タル家兔黃體ノ退行機轉ハ更ニ之ヲ約言スレバ、黃體形成後内莖膜細胞ハ變性シ又ハ基質結締織細胞ニ變化スルコトナク常ニ必ズ黃體周邊部ニ殘存シ妊娠末期ヨリ產褥初期ニ於テ、黃體顆粒膜ルテイン細胞ガ變性消失スルニ及ンデ、本細胞ガ俄然増殖ヲ開始シ、黃體ルテイン細胞ガ全ク消失スルヤ、產褥十日頃ニ於テ其ノ部ニ新シキ間質細胞様組織ヲ形成ス。而シテ此ノ新生間質細胞様組織ハ元來ノ間質細胞組織ト多少形態的ニ異レルモノニシテ、產褥二十五六日以後ニ於テ變性消滅スルニ至ルモノナリ。而シテ本細胞ノ存在スル間ニ其ノ家兔ガ再ビ妊娠スルヤ本細胞組織ハ比較的長ク殘存シ得ルモノニシテ當該分娩(前ノ分娩)後五十數日ニ於テモ尙存スルコトアリ。而シテ此ノ間質細胞様組織ノ變性時期ニ本細胞ニ脂肪含有性消耗性色素出現スルコトアリ。

次ニ黃體形成ニ關與スル細胞ノ個々ニ就キテ之ガ消滅ニ至ルマデノ經過ヲ簡單ニ記述セントス。

一、黃體ルテイン細胞

黃體ルテイン細胞ガ濾胞ノ顆粒膜細胞ノ肥大ニヨリテ生ズルモノナルコトハ疑ナキトコロナリ。黃體發生當初ノ本細胞ハ未ダ小型ニシテ圓壙狀乃至束狀ヲ呈スルモ、排卵後三、四日ニシテ多角形乃至圓形ノ大ナル細胞トナリ、一乃至二個ノ明瞭ナル核小體ヲ有スル「クロマチン」ニ乏シキ圓形胞狀ノ一核ヲ有シ、妊娠一週乃至十日前後ニ細胞ハ肥大ノ極度ニ達ス。本細胞ハ妊娠二日頃ニ於ケルモノヨリ既ニ其ノ原形質内ニ微小滴ノ「リポイド」顆粒ヲ證明シ得ルモノナルガ妊娠經過ニ伴ヒ著明ナル「リポイド」ノ増加ヲ來シ、妊娠一週以後ニハ原形質内ニ顆粒狀ニ堆積シ或ハ滴狀ニ存ス。黃體發生當初ハ重屈折性リポイド」ヲ缺如スルモ、後ニ至リテ次第ニ出現シ漸次増加シ妊娠一週以後ニハ殆んど

例外ナク少カラズ存在スルヲ證明シ得ベク、妊娠十三日乃至妊娠後半期ニ至リテハ甚ダ多量トナリ原形質内ニ充滿スルニ至ル。

本細胞ハ妊娠末期ヨリ既ニ多少ノ退行變性ノ徵ヲ示シ產褥ニ入ルト共ニ顯著トナリ、產褥數日ヨリ脂肪變性ニ陥リテ次第ニ消失スルモノニシテ、一般ニ產褥十日前後ニ於テハ全ク痕跡ナク消滅ス。而シテ本細胞ニハ全經過ヲ通ジテ色素或ハ「コロイド」ヲ證明スルコトナシ。

二、内莢膜細胞

濾胞ニ於テ内莢膜細胞ヲ認メウルハ中等大以上ノ含水濾胞ナリ。本細胞ハ常態ニ於テ狹義ノ類脂肪及少量ノ重屈折性リポイド」ヲ有ス。成熟濾胞ガ破裂シ黃體ガ形成セラルルトキ其ノ極メテ初期ニハ明瞭ニ之ヲ認メ得ルモ、黃體ルテイン細胞ノ増殖肥大顯著トナレバ本細胞ハ壓迫セラレ萎小シ黃體周邊部ニ極メテ少數殘存ス。然レドモ決シテ之ガ全キ消滅ヲ見ルコトナシ。黃體ガ産褥ニ於テ顯著ナル退行性變化ヲ來スヤ、本細胞ハ俄然増殖シ產褥十日前後ニ於テ新聞質細胞様組織ヲ形成スルモノニシテ、此ノ間質細胞様組織ハ其ノ後一定時日ノ間存在スルモヤガテ是又變性ニ陥リ消滅スルモノナリ。本細胞ハ其ノ變性經過ノ終末ニ於テ原形質内ニ淡黃褐色顆粒狀ノ色素ヲ瀾蔓性ニ出現スルコトアリ。而シテ本細胞ハ其ノ全經過ヲ通ジテ「リポイド」ヲ含有ス。而シテ細胞内ニ色素ヲ含有スル際ニハ脂肪染色ニ對シ、「ズダンIII」ニテ黃赤色、「ニールブラウ」ニテハ堇色、帶青紫色、青色、帶綠青色等ニ染色シ、スミス氏法陽性、フイシユレル氏法モ大部分ニ於テ陽性ニシテ、重屈折性リポイド」ヲ認メズ。而シテ本色素ハ大部分脂肪溶解劑ニ溶解セザルガ如シ、即チ本色素ハ「リポイド」ト一定ノ關係ヲ有スルモノニシテ所謂脂肪含有性消耗性色素ニ屬セシムベキモノナリ。「リポイド」ト色素出現トノ關係ヲ見ルニ「リポイド」ハ色素出現ヨリモ遙カニ先キニ證明シ得ラルルモノナリ。

三、黃體被膜

黃體被膜結締組織ハ濾胞外莢膜ヨリ形成セラルモノナリ、而シテ濾胞外莢膜ハ渡銀法ニテ檢スルニ甚ダ鬆粗ナル纖維ヲ證明スルニ止ルモ、黃體被膜ハ著シク纖維性ヲ帶ビ、核ニ乏シク、其ノ纖維ハ甚ダ緻密ナリ。

被膜結締組織ハ黃體ノ全經過ヲ通ジテ其ノ消滅ヲ見ルコトナク、黃體組織退行シテ間質細胞様組織ニ移行スルモ尙其ノ被膜ヲ形成シ、間質細胞様組織ガ變性スルト共ニ次第ニ吸收セラレ一部ハ殘存シテ卵巢基質結締組織ニ移行ス。

四、黃體中心核

排卵後間モナキ黃體ノ中心ハ少許ノ凝血ヲ以テ充サレ、之ヲ取りカコミテ黃體ルテイン細胞ガ存ス。時ニ排卵後ノ濾胞腔ニハ多量ノ出血ヲ見ルコトアリ。少許ノ凝血ハ二三日ニシテ機化シ結締組織核ニ變化ス、此ノ結締組織ハ初メハ鬆粗ナルモ次第ニ鞏固ナル結締組織トナル、而シテ結締組織核中ニハ時ニ「ヘモジデリン」ヲ攝取セル單核ノ細胞(組織球)ヲ認ムルコトアリ。又中心結締組織核ニハ他ノ黃體ルテイン細胞群ト連續ナキ少數ノ黃體ルテイン細胞ヲ包ムコトアリ。中心結締組織核ノ吸收消滅ハ黃體個々ニヨリテ遲速アリ、早キモノハ妊娠中ニ消滅ヲ見ルモノアルモ、遅キハ黃體ガ退行シ間質細胞様組織ニ移行スルモ尙殘存シ、之ガ變性消失後一部ハ黃體基質結締組織ノ増殖スルト共ニ纖維體ヲ形成シ或ハ卵巢基質結締組織中ニ移行スルモノアリ。

五、黃體ノ血管黃體被膜或ハ其ノ内側ニハ黃體ノ營養血管ノ大ナルモノアリ。黃體發生後二三日ニシテ黃體ルテイン細胞間ニ毛細血管網ガ形成セラル、此ノ血管網ハ黃體ノ退行時ニ於テ内腔閉鎖シ、間質細胞様組織移行期ニ於テハ結締組織ヲ以テ置換セラル。

六、假性エオジン嗜好白血球

黃體ノ退行期殊ニ黃體ルテイン細胞ノ變性崩壞著シク内莢膜細胞ノ増殖盛ナル時期ニ於テ黃體組織内ニ多數ノ假性エオジン嗜好白血球ノ浸潤ヲ認ムルコトハ前ニ述べタルガ如シ、然レドモ黃體ガ退行シ、間質細胞様組織ニ移行スルニ及ンデハ最早ヤ本細胞ノ浸潤ヲ認メズ。本細胞ハ其ノ出現ノ時期的關係ヨリ見レバ、岩田氏ノ云ヘルガ如ク黃體ル

テイン細胞ノ變性ニヨル老廢物質ヲ運搬清淨ナラシムルモノナルベシ。

第二節 第一節ノ考察

予ガ研索シ得タル家兎黃體所見ト諸家ノ研究所見ヲ照合シ之レヲ考察セントス。

黃體發生後ニ於ケル濾胞内莢膜細胞ノ運命ニ關シテハ緒論ニ於テ說述シタルガ如ク種々ナル見解アリ。

Sobotta ハ交尾後三十二時間乃至四十二時間後ノ黃體ニ於テハ之レヲ認メズトシ、Honore ハ六日乃至十一日後ニ於ケル黃體ニ於テモ尙認メ得トナス。井岡ハ六日ヲ經過セル黃體ニ在リテモ尙認メラルルモ黃體ルテイン細胞トハ原形質内ノ生體可染顆粒ヨニリテワヅカニ區別シ得ルモノナリトシ、Cohn ハ交尾後二日以後ノ黃體ニ在リテハ認メ得ズトナシ、足立モ黃體ノ血管分布以後ハ認メズト云フモ、戸蒔ニヨレバ成熟期ノ黃體ニアリテモ少數殘存スルモノナリト說ケリ、岩田ハ内莢膜細胞ハ黃體全經過ヲ通ジテ消滅スルコトナシト稱ス。而シテ之ヲ認メズトナス者モ或ハ之ガ變性消滅スト云ヒ或ハ黃體基質結締組織細胞ニ變化スト稱ス。予ハ本細胞ハ黃體ノ全經過ヲ通ジテ黃體周邊部ニ少數ナガラ殘存スルモノニシテ、之レガ黃體基質結締組織細胞ニ變化シ或ハ黃體細胞ニ移行シ或ハ全ク消滅スルヲ認メタルコトナシ、此ノ所見ハ岩田氏ノ非妊性黃體ノ場合ト一致ス。而シテ本細胞ノ黃體內ニ殘存スルコトガ爾後ノ黃體ノ退行機轉ニ重大ナル關係ヲ有スルコトハ前ニ縷述シタルガ如シ。

人黃體ニ於テモ内莢膜細胞ノ運命ニ關シテハ一定セル見解ヲ見出スコト能ハズ然レドモWallart (1914) ハ本細胞ガ黃體周邊部ニ於テ一定時期マデ殘存スルモノニシテ黃體基質ノ紡錘形細胞ニ變化スルモノニ非ズトシ、Schröder (1914) モ亦妊娠末期ノ黃體ニ於テ時ニ本細胞ノ殘存スルヲ認ムルコトアリトシ、R. Mikulicz, Seitz, Rabl, Walz, Macrotty, Ballin, Ludwig, R. Meyer 等モ妊娠五ヶ月ノ黃體ニ明カニ本細胞ノ殘存スルヲ認ムト說ケリ、之レニヨツテ之レヲ見ルニ人黃體ニ在リテモ亦黃體發生後可成長日月ニ亘リテ本細胞ノ認メ得ラルルモノナルコト明カニシテ、本細胞ガ黃體基質ノ紡錘形結締組織細胞ニ變化ストノ說ハ否定シ得ルガ如シSobotta, Cohn 兩氏ハ經産家兎ヲ再ビ引キツヅ

キテ妊娠セシメタル場合ノ卵巢ヲ檢シタルニ、新鮮ナル黃體ト先キノ妊娠ニヨリテ發生シタル黃體ノ退行セルモノトヲ認メ得ルモノナルコトヲ記載シ、Cohnハ此ノ退行性黃體ノ細胞ハ間質細胞ト略同大ニシテ細胞原形質ガ明徹ニシテ、細胞相互ノ間ニハ最早毛細血管ヲ認メズシテ結締組織ヲ以テ置換セラレ居ルモノナリト述べ、其ノ退行機轉ニ關シテハ詳細ナル研索ヲナサズ極メテ簡單ナル記載ヲナセリ、而シテ氏ノ記載ニ一致セル組織ハ予モ亦認メ得タルトコロニシテ、此ノ組織ハ黃體ガ退行後ニ形成セラレタル前述ノ新生間質細胞様組織ニ外ナラズ。故ニCohnノ記載セル細胞ハ黃體ノ退行後内莢膜細胞ヨリ形成セラレタル間質様細胞ノ妊娠ノタメニ多量ノ「リポイド」ヲ攝取シテ著シク膨大シ原形質ガ明徹トナレルモノニシテ、直接ニ黃體ルテイン細胞ヨリ移行シタルモノニ非ザルナリ。

戸莉氏ハ黃體ルテイン細胞ハ大部分直接脂肪變性ニヨリテ消滅シ一部ハ色素細胞ニ移行シテ後消滅スト記述シタルモ、予ハ黃體ルテイン細胞ハ產褥數日ニシテ悉ク變性シ消滅シ其ノ何レノ時期ニ在リテモ色素ヲ認ムルコト能ハザリキ。村尾氏モ亦家兔黃體ルテイン細胞ハ注意シテ檢シタルモ色素ヲ證明セザリシト報告セリ、故ニ戸莉氏ノ所謂色素細胞ナルモノハ詳細ノ記述ナキヲ以テ斷定スルヲ得ザルモ、恐ラク予ガ前述シタルガ如ク黃體ノ退行後其ノ部ニ形成セラレタル間質細胞様組織ノ退行期ニ於テ認メタル淡黃褐色微細顆粒狀ノ色素ヲ含有スル細胞ト同一ノモノニ非ザルナキカ。

岩田氏ガ「ラノリン含有食餌ニテ飼養シタル家兔ノ三例ニ於テ認メタル一種不明ノ細胞群ト記述シタルモノハ予ノ所見ヲ以テスレバ恐ラクハ黃體ノ退行後ニ生ジタル一種ノ間質細胞様組織ナルベク、其ノ「リポイド」所見ハ後ニ述ブルガ如ク岩田氏ノ記載ニ極メテ良ク一致セリ、更ニ岩田氏ガ家兔非妊娠性黃體ノ退行機轉研索所見ト予ノ妊娠性黃體ノ退行機轉トヲ比較スルニ、非妊ト妊娠トニヨリテ成熟黃體ノ存續期間ニ著シキ差異アルモ退行ノ形式ニハ差異ヲ認メズ、然レドモ岩田氏ハ黃體ガ退行シ内莢膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ間質細胞様組織ヲ形成スル時期迄ヲ檢シタルニ止レドモ予ノ研究ニヨレバ此ノ間質細胞様組織ノ妊娠黃體ヨリ發生スルモノハ一定時日ノ後ニ變性消滅スルモノナリ。

而シテ予ハ斯クノ如ク黃體形成ニ關與セル細胞ノ變化ヲ全經過ニ亘リテ觀察シ其全ク消滅スルニ至ル迄ヲ追及研索シタルモ、家兔卵巢ニ於テハ二三ノ諸家ノ偶々記載セルガ如キ白體或ハ硝子體ヲバ認メ得ザリキ。

即チ予ノ檢索ニヨレバ家兔ノ妊娠性黃體組織ハ產褥一週前後ニ於テ變性消滅シ内莖膜細胞ヨリ形成セラルル一種ノ間質細胞様組織ニ移行スルモノニシテ黃體組織ガ分娩後長ク殘存シ或ハ其ノ變性組織ヲ長時日卵巢内ニ認メラルモノニ非ズ、此ノ事實ハ家兔ニ於テ分娩後直ニ交尾期發現シ其ノ際卵巢ニハ既ニ成熟セル大ナル含水濾胞數個ガ發生シ居ルコトト對照シテ、黃體ト濾胞成熟隨ツテ交尾期出現トノ間ニハ密接ナル關係アルコトヲ立證スルモノナリ。

第三節 黃體ノ「リポイド」ニ就テ

黃體ハ諸多内分泌腺中副腎ト共ニ最も多量ノ「リポイド」ヲ含有スル組織ニシテ、是ガ「リポイド」ハ人類黃體ヲ初メトシテ其ノ他二三動物黃體ニ就キテ多數ノ學者ニヨリテ顯微化學的ニ或ハ化學的ニ研索セラレタルトコロナリ。然ルニ其ノ成績ハ今日尙一致スルニ至ラザルノミナラズ、「リポイド」發現ノ意義並ニ「リポイド」ト黃體細胞機能トノ關係ニ就キテモ古クヨリ論爭セラルルトコロニシテ今日尙充分ナル解決ヲ得ザルトコロナリ。而シテ家兔黃體ニ就キテ其ノ「リポイド」ヲ研索セルモノハ比較的少ク只 Weishaup, 村尾、川村、太田、岩田ノ諸氏ヲ舉グルコトヲ得ルノミニシテ、家兔ノ黃體ノ「リポイド」ニ就テ精細ニ系統的ニ檢シタルモノ未ダナシト云フモ過言ニ非ザルコト岩田氏ノ既ニ云ヘルガ如シ。故ニ予ハ予ガ檢索シ得タル所見ヲ綜括シ考察ヲ加ヘ、家兔黃體「リポイド」ト人黃體「リポイド」トヲ比較セント欲ス。

一、家兔妊娠性黃體「リポイド」所見

妊娠二日目黃體ニハ既ニ黃體ルテイン細胞内ニ極メテ少量ノ單屈折性類脂肪ガ小滴狀ヲナシテ存スレドモ重屈折性「リポイド」ハ之ヲ認メ難シ、然レドモ黃體周邊部ニ存スル内莖膜細胞ハ多量ノ單屈折性類脂肪ヲ含有シ、尙重屈折ヲ呈スルモノヲモ存スルモノアリ。而シテ妊娠日數ノ進捗ニ伴ヒ黃體ルテイン細胞内ノ類脂肪ハ著シク増加シ、妊娠四

日目例ニアリテハ細胞内ニ微細滴狀或ハ顆粒狀ニ稍多量ニ證明シ、重屈折性ノモノモ散在性ニ極メテ微量ニ證明スルコトヲ得ベシト雖モ定型的ノ十字像ヲ示スモノナク「ヒヨレステリンエステル」ト認ムベキモノヲ見ズ、内葉膜細胞ニ於ケル所見ニハ大差ヲ來サズ。

妊娠一週頃ニ於テハ黃體ルテイン細胞著シク肥大スルト共ニ其ノ「リポイド」モ急激ニ増加シ、一樣ニ「ズダンIII」ニテ顆粒狀乃至滴狀ニ原形質内ニ堆積セルヲ證明シ、「ニールブラウ染色」ニテ深青色ニ、スミス氏法ニテハ青黑色ニ原形質ノ周邊部ニ存シ、フイシユレル氏法弱陽性ナルモノモ出現シ、之レニ加フルニ微細ナル重屈折性リポイド」ヲ混ジ、加温冷却後明カナル交叉像ヲ認メシムルモノアリテ「ヒヨレステリンエステル」ノ出現ヲ認ム、殊ニ予ノ妊娠八日目例ニアリテハ稍多量ニ之レヲ認メタリ。

更ニ妊娠十日頃ニ至レバ黃體ルテイン細胞ノ成育ハ極度ニ達シ其ノ「リポイド」モ亦極メテ多量トナリ細胞内ヲ充滿シ或ハ顆粒狀ニ原形質内ニ堆積シ、重屈折ヲ呈スルモノモ著シク増加シ妊娠第十三日以後ニ於テハ黃體ルテイン細胞内ハ微細ナル重屈折性リポイド」ヲ以テ充サルルニ至リ間質細胞ニ比シテ遜色ナキ程トナル。爾後ノ黃體ハ妊娠經過ニヨリテ其ノ「リポイド」ニ著シキ變動ヲ認メズ常ニ多量ノ單屈折性類脂肪及ビ重屈折性リポイド」(加温ニヨリテ重屈折性ヲ失ヒ冷却後再ビ出現シ定型的交叉像ヲ示ス「ヒヨレステリンエステル」ナリ)ヲ存シ、斯クノ如キ狀態ハ妊娠末期マデ認メラルルモノナリ。

即チ全經過ヲ約言スルニ家兎妊娠性黃體ニハ妊娠初期ヨリ「リポイド」ノ出現ヲ認メ妊娠第一週ノ終リニハ甚ダ多量トナル、而シテ其ノ「リポイド」ハ主トシテ單屈折性類脂肪ニシテ其ノ染色所見ノ示ストコロニ依レバ「フオスハチーデ」ト思惟セラルルモノニシテ之レニ微少許ノ重屈折性ノモノ混在スルモ、明カナル「ヒヨレステリンエステル」ヲ認メ得ルハ妊娠一週以後ノ黃體ナリ。妊娠日數ノ進捗ニ伴ヒ其レ等ノ「リポイド」ハ漸次増加スルモ、「ヒヨレステリンエステル」ノ増加最モ顯著ニシテ妊娠後半期ニ於テハ「ヒヨレステリンエステル」最モ多量ニシテ狹義ノ類脂肪ヲ之レ

ニ混ズ、而シテ狹義ノ類脂肪中脂肪酸ノ出現ヲ認ム、妊娠中ノ黃體ニハ中性脂肪ヲ認メタルコトナシ。

二、產褥ニ於ケル黃體ノ退行ト其ノ「リポイド」

前述シタルガ如ク黃體ルテイン細胞ニ於テハ妊娠末期ヨリ其ノ退行變化ヲ認メ產褥ニ於テ一層顯著トナル。

產褥第一日及ビ第二日目ノ黃體ハ尙多量ノ類脂肪ヲ含有スルモ、重屈折ヲ呈スルモノハ妊娠後半期ノ黃體ニ比シテ著シク少量トナルヲ見タリ、然レドモ尙加温冷却後交叉像ヲ認メシムルモノヲ尠カラズ存セリ。產褥四日目例以後ニ於テハ黃體ルテイン細胞ノ變性崩壞ハ愈々進行シ、核ヲ失ヒ空胞狀トナリ、増殖セル内莢膜細胞群中ニ殘存シ居ルモノナルガ、斯クノ如キモノニ在リテモ多量ノ單屈折性類脂肪ヲ滴狀或ハ殼狀ニ存シ之レニ少カラザル重屈折性リポイド」ヲ認メシムルモノニシテ、増殖肥大セル内莢膜細胞内ニモ亦少量ノ類脂肪及ビ極微量ノ重屈折性リポイド」ヲ含有セリ。然レドモ此ノ時期ニ於ケル黃體内ニ、尙交叉像ヲ示セル重屈折性リポイド」ヲ少量存スル外ニ輕度ノ加温ニヨリテ重屈折性ヲ失ハズ針狀ノ結晶トシテ現ハレ交叉像ヲ認メシメザルモノ多ク、狹義ノ類脂肪中脂肪酸ノ出現顯著ナリ。但一例ニ於テハ產褥四日目黃體ニ於テ單屈折性類脂肪ハ尙多量ナリシモ重屈折性ヲ呈スルモノハ皆無ナルヲ認メタリ。

產褥一週前後ヨリ黃體ルテイン細胞ハ殆ンド消滅シ、内莢膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ一種ノ間質細胞樣組織ニ移行スルモノナルガ、此ノ際極メテ少數ニ殘存セル空胞狀ノ黃體ルテイン細胞ノ殘骸ニハ尙多量ノ類脂肪ヲ含有スルモノ内莢膜細胞ニ於テハ其ノ量少キガ爲メニ黃體全般トシテハ其ノ「リポイド」量ハ著シク減少ス。カクテ產褥十日前後ニ於テ黃體ハ一種ノ間質細胞樣組織ニ移行シ終ルモノナルガ、其ノ新生セラレタル一種ノ間質細胞樣組織ノ「リポイド」ニ關シテハ更ニ後章ニ述ベン。

先キニ岩田氏ガ家兔ノ非妊性黃體ノ「リポイド」ニ關シ「ズダンIII染色及ビ偏光裝置ニヨリテ檢索セラレタル成績ト子ガ檢シタル妊娠性黃體ノ「リポイド」ヲ比較スルニ、黃體發生後一週以內ニ於ケル黃體ノ一般的狀態及ビ其ノ「リポ

イド」ノ所見ニ於テ殆ンド差異ヲ認メザルニ、一週以後ノ所見ニ於テハ顯著ナル差違ヲ認ムルコトヲ得ルナリ。即チ非妊性黃體ニアリテハ其ノ排卵後十日乃至十一日頃ヨリ黃體細胞ニ多少退行變化ノ發現ヲ認メ、十五六日頃ニ於テハ既ニ大部分ノ黃體細胞ハ退行スルニ反シ、妊娠性黃體ニアリテハ此ノ時期ニ於テハ尙未ダ退行變化ノ發現明カナラズ而シテ前者ニアリテハ黃體ノ全經過ヲ通ジテ重屈折性リポイド」(「ヒヨレステリンエステル」)ハ極メテ少量出現スルガ如シト雖モ、後者ニアリテハ妊娠後半期ニ甚ダ多量ニ認メラレ兩者著シキ差異アルガ如シ、予ガ偶々第二十七回日本婦人科學會總會席上ニ於テ本研究ヲ報告スルヤ岩田博士ハ氏ガ嘗テ行ヘル非妊性黃體ノ發生並ニ退行ノ狀況ト予ノ妊娠性黃體ニ於ケル成績ト一致セルコトヲ追加シ、其ノ「リポイド」ノ所見ニ於テ上述ノ如キ差異ノ存スルハ恐ラク妊娠現象ノ存否如何ニ關スルモノナルベシト述ベラレタルガ、予モ亦此ノ「リポイド」所見ノ一定期以後ニ於ケル差異ハ妊娠ニヨル家兔體內ニ於ケル「リポイド」代謝殊ニ「ヒヨレステリン物質代謝」ノ變動ニ起因スルモノナルベシト思惟スルモノナリ、何トナレバ非妊娠性黃體ノ「リポイド」ト妊娠性黃體ノ「リポイド」ノ差異ノ著明トナルハ主トシテ一週日以後ニシテ此ノ時期ハ家兔ノ受精卵ハ子宮内ニ着床シ内外胚葉ヲ形成シ妊娠確實トナル時期ニ相當スルヲ以テナリ。

家兔黃體ノ脂肪物質ヲ化學的ニ研索セルモノヲ文獻ニ於テ探查シ得ザリシガ、妊娠時ノ家兔卵巢ノ脂肪ヲ化學的ニ研索セル報告ハ鈴木氏ニ於テ之ヲ見ル、氏ハ家兔卵巢ニ於テハ中性脂肪量ハ妊娠時ハ非妊時ヨリ一般ニ大ニシテ妊娠日數ノ進ムト共ニ増加シ產褥ニ至リテ減少シ、「ヒヨレステリン」量ハ妊娠時ハ非妊時ヨリモ大、妊娠日數ノ進ムト共ニ著明ナル増加ヲ來シ、妊娠末期ハ非妊時ノ約十三倍ニ達シ、分娩開始スルヤ既ニ其ノ初期ニ於テ著シキ減少ヲ見、產褥時ハ妊娠末期ニ比スレバ著シク少量ナルモ產褥日數ノ進行ニ伴フ變化ハ認メラズト云フ、氏ノ化學的檢査成績ト予ノ組織化學的檢査成績ト比較スルニハ予ノ後章ニ述ベントスル卵巢間質細胞ノ「リポイド」ヲ考慮ニ入ルル必要アリ、而シテ之レヲ見ルニ其ノ甚ダヨク一致スルヲ認ムルコトヲ得、即チ妊娠時ニ最モ卵巢ニ多量トナルハ「ヒヨレス

テリン物質ニシテ黃體並ニ間質細胞ニ多量ニ存シ、其ノ増加ハ妊娠一週以後ニ著明ニシテ鈴木氏ノ成績ニ見ル増加ノ時期並ニ減少ノ時期甚ダヨク合致スルヲ見ル。

次ニ人類黃體ト家兔黃體ノ「リポイド」ノ所見ヲ比較セント欲ス。

人黃體ニ關シテハ甫メ Miller (1910) ハ月經性黃體ノ初期ニハ脂肪ナク、退行期ニ於テ出現シ妊娠性黃體ハ一般ニ脂肪ニ乏シク、產褥又ハ妊娠ノ早期中絶以後ニ出現シ此脂肪ハ中性脂肪ナリト云ヘリ。

R. Myer ハ黃體形成初期ニ既ニ脂肪出現シ成熟期以後ニ多量ニ存スト云ヒ是又中性脂肪ナリトセリ。

Adachi (1912) ハ妊娠末期ニ於ケル黃體ルテイン細胞並ニ黃體內ニ増殖セル結締組織内ニ多少ノ脂肪滴ヲ證明シ、產褥初期ニト尙少量ナルモ、產褥ノ終リニ於テ増加シ、「ルテイン細胞」ノ變性ノ進捗ト共ニ結締組織及白血球内ニモ證明セラレ、是等ノ脂肪ハ產褥初期ノモノハ重屈折性ナラザルモ產褥ノ終リニ於テ黃體ノ退行セルモノニ於テハ大ナル脂肪滴ヲ含有スル細胞内ニハ重屈折性ノモノガ出現スト云フ。Marcoty (1914) ハ諸種ノ脂肪證明法ヲ行ヒテ多數ノ黃體ニ就キテ檢シタルガ氏ノ所見ニヨレバ、月經性黃體ニアリテハ其ノ發生初期ニ於テモ「リポイド」ヲ含有シ主トシテ「ターカ細胞」中ニアリテ顆粒膜ルテイン細胞ニ於テハ月經後期ニ於テ著明トナリ、其ノ「リポイド」ハ中性脂肪、「ヒヨレステリン」混合物、「ヒヨレステリン」結合物、「フォスハチーデ」ナリト云ヒ、妊娠性黃體ニ就キテハ二十六個ノ妊娠黃體、二個ノ產褥期黃體ヲ檢シタルガ妊娠初期ノモノニ在リテハ「ターカ細胞」ニ稍多量、顆粒膜ルテイン細胞ニハ少ク其ノ後稍増加スルモ妊娠三ヶ月乃至七ヶ月ノモノニハ極メテ少量、八ヶ月ノモノニテハ多量ニ「ルテイン」細胞内ニ證明シ、更ニ產褥ニ至リテ急激ニ増加シ「リポイド」ノ性質ハ月經性黃體ノモノト差異ナシト稱ス。

Wiczynski (1921) ハ黃體形成初期ニ既ニ「リポイド」ヲ認ムルモノニシテ「フォスハチーデ」「ヒヨレステリン」混合物ニシテ、成熟期ニ於テ「ヒヨレステリン」エステル「ノ出現ヲ認メ退行期ニハ更ニ脂肪酸ノ出現顯著トナル。妊娠性黃體ニテハ妊娠前半期ノモノハ「リポイド」ヲ含有セザルカ或ハ極メテ少量ニ、妊娠後半期或ハ產褥ニ於テ多ク出現シ中性脂肪ハ認メズシテ「フォスハチーデ」、「ヒヨレステリン」ケ「フアリン」混合物、重屈折性「リポイド」ナリト云フ。

Weisschapt (1921) ハ黃體形成初期ニハ「フォスハチーデ」、「ツエレブロシーデ」ヲ主トシ次ニ「グリセリン」、ヒヨレステリン混合物、退行期ニ更ニ脂肪酸、石鹼ヲ認メ、更ニ退行進ミテハ「レチチン」ヲ見ルモノニシテ、妊娠性黃體ハ一般ニ脂肪ニ乏シト稱ス。

Mikulicz-Radecki (1922) ハ黃體形成初期及血管新生期ニハ顆粒膜ルテイン細胞内ニハ「フォスハチーデ」及「ツエレブロシーデ」ヲ、成熟期ニハ「ヒヨレステリン」及其ノ混合物（「ヒヨレステリン」、ケ「フアリン」混合物）、少量ノ中性脂肪ヲ出現シ、月經後ノ黃體ニ於テ中性脂

肪、更ニ其ノ後ニ脂肪酸、石鹼ヲ認ムトナシ、妊娠性黃體ニ於テハ其ノ初期ノモノニ上述ノ初期黃體ニ於ケルガ如キ複雑ナル「リポイド」ヲ少量含有スルモ、妊娠後半期ニ至リテ減少シ或ハ消失シ、産褥ニ於テ黃體ノ退行ト共ニ再ビ「リポイド」ノ出現ヲ見ルモノナリト云フ。

村尾(1922)氏ハ妊娠性及月經性黃體ヲ檢シタルガ重屈折性リポイドハ多カラズ、主トシテ「フォスハチーデ」、脂肪酸、極メテ少量ノ中性脂肪ニシテ、月經直後ノモノ一例ニアリテハ多量ノ「ヒヨレステリン」及「レチチン」様ノ結晶ヲ認メタリト云フ。

荻野(1923)ニ依レバ黃體脂肪ハ「ヒヨレステリンエステル」、類脂肪、及脂肪酸ニシテ中性脂肪ハ認メラレズ。類脂肪ハ川村氏ノ群屬反應ノ示ストコロニヨレバ「フォスハチーデ」即チ「チエフアリン」ニ相當シ、而シテ是等ノ「リポイド」ノ量及性質ハ黃體ノ時期ニヨリテ變動アルモノニシテ、増殖期ノ顆粒膜ルテイン細胞内ニハ既ニ狹義ノ類脂肪(脂肪酸ヲ除ク)ヲ含有シ、「ヒヨレステリンエステル」ハ不定ニシテ、血管新生期ニ於テ「リポイド」量ハ増加スルモ「ヒヨレステリンエステル」ハ同ジク不定ナリ、而シテ退行期ニ於テハ狹義ノ「リポイド」ハ減少シ「ヒヨレステリンエステル」ガ多量トナリ、少量ノ脂肪酸モ出現スルニ至ル、「テーカー細胞」ニハ黃體ノ増殖期ニ稍多量ノ「ヒヨレステリンエステル」及類脂肪存シ、各期ニ於テ大ナル變動ナシ、而シテ妊娠性黃體ハ其ノ全經過ヲ通ジテ月經性黃體ヨリモ「リポイド」ニ乏シク産褥ニ於テモ亦少量ノ「リポイド」ヲ出現ヲ認ムト云ヘリ。

Beriberich u. Jaffe (1924)ハ手術ニヨリテ得タル多數ノ材料ニ就キテ月經性黃體並ニ少數ノ妊娠性黃體ノ「リポイド」ヲ檢索シ從來諸家ノ得タル成績ニ反シ、人黃體ニ出現スル「リポイド」ハ「ヒヨレステリンエステル」ト「ヒヨレステリン脂肪酸混合物」ニシテ「フォスハチーデ」ハ全く認メラザルカ又ハ例外ニ屬シ、「リポイド」ガ最も多量ニ出現スルハ月經間期ニ於ケル黃體ニシテ退行期黃體ニ於テハ脂肪酸並ニ石鹼ヲ認メ、妊娠性黃體ハ一般ニ「リポイド」ヲ證明スルコトナシト云ヒ、黃體ノ「リポイド」出現ヲ以テ其ノ機能元進ノ兆ト認メ、此「リポイド」ハ黃體細胞ガ血中ノ夫レヲ貯藏スルコトニ起因スルモノナリトナセリ。茲ニ於テ氏ノ新説ハ從來ノ研究者就中 R. Meyer, Miculicz-Radecki, Wiczynski, Weisshaupt 等ノ意見ト衝突ヲ來シ R. Meyer 一派ハ黃體ニ於テ「リポイド」ノ顯著ニ出現スルハ主トシテ其ノ退行期ニシテ黃體ノ機能減退ヲ示スモノナリトシ、其ノ「リポイド」中「ヒヨレステリン化合物及混合物ハ黃體內ニ於ケル「リポイド」ヨリ轉化シテ生ズルモノニシテ黃體細胞ガ血中ヨリ之ヲ貯藏スルモノニ非ズト主張シ、一九二五年以來兩者ノ間ニ活氣アル論爭ヲ見ルニ至レリ。故ニ其後再ビ黃體ノ「リポイド」ニ就キテ研究スルモノ簇出スルニ至レリ。

Heinrich Eufinger u. C. W. Bader (1925)ハ三十四例ノ妊娠性黃體並ニ三例ノ産褥期黃體ヲ檢シ、妊娠二個月頃迄ノ黃體ニアリテハ月經性黃體ニ比シテハ少量ナルモ尙證明シ得ベキ「リポイド」ヲ認メ、妊娠三個月頃ヨリ減少シ、妊娠後半期ヨリ末期ニ於テ消失シ、産褥ニ入ルト共ニ急激ニ増加ヲ來スモノナリトシ、「リポイド」ノ性質ハ全期ヲ通ジテ「ヒヨレステリン脂肪酸混合物、少量ノ「ヒヨレステ

リンエステル」ナリト云ヘリ。

Hernstein (1925) ハ黄體「リポイド」ヲ化學的方面ヨリ研索シタルガ、黄體成熟期ニハ「ヒヨレステリン」及夫ノ「エステル」並ニ「フォスハチーデ」ヲ認メ、月經出現以後ノ退行期黄體ニハ是等ノ複雜ナル「リポイド」ハ減少シ脂肪酸、石鹼ガ出現シ、「フォスハチーデ」ハ各期ニ於テ存スレドモ黄體ノ成熟期ノモノニ最も多量ニ存スト云ヒ、其ノ所見大體ニ於テ R. Meyer, Wiczynski Weishaupt, Mikulicz-Radecki 等ノ顯微化學的檢査成績ニ一致シ Berthrich u. Jaffe 等ノ成績ニ反スルノ結果ヲ得タリ。

Kaufmann u. Raeth (1927) ノ組織化學的檢査成績ニヨレバ人黄體ノ成熟期並ニ妊娠中ニ於テハ「リポイド」ハ組織化學的ニハナキ又ハ極メテ些少ナルガ如ク見ユルモ、化學的檢査ニ於テハ多量ノ「リポイド」ヲ證明スルモノナリト云ヒ、是等ノ「リポイド」ガ組織化學的ニ染色シ得ザルハ此ノ「リポイド」ガ膠態ニアリテ「ホルモン」ト共存スルガ爲メナリトシ、「ホルモン」ノ消失ト共ニ「リポイド」ハ可染狀態トナルモノニシテコノ可染性ナル「リポイド」ハ最早ヤ生物學的作用ヲ失ヘルモノナリトナセリ。

T. Chydenius (1927) ハ妊娠前半期ニ於テハ黄體ハ普通ノ「リポイド」染色法ニテハ之ヲ證明セザルカ極メテ少量ナルモ、Salzathre-pepsin-digestion nach Noll ニヨル「リポイド」染色ヲ行フトキハ多量ノ「リポイド」ヲ證明スルコトヲ得且ツ重屈折性リポイド」ハ「テーカー層」ニ限局スト云ヒ、此「リポイド」ハ「フォスハチーデ」「ヒヨレステリンエステル」「ヒヨレステリン」含有ノ「リポイド」ニシテ黄體ノ退行期ニ於テハ脂肪酸、「グリセリンエステル」ガ出現スルモノナリト云フ。

上述ノ如ク人黄體ノ「リポイド」所見ハ研索者ニヨリテ未ダ全ク一致スルニ至ラザレドモ、之ヲ概括スルニ、月經性黄體ニアリテハ其ノ初期ニ主トシテ狹義ノ類脂肪就中「フォスハチーデ」「ツエレブロシーデ」ヲ認メ、「ヒヨレステリンエステル」ハ不定ニシテ、成熟期以後ニ於テ「ヒヨレステリン」結合物、混合物ヲ、退行期ニ於テ脂肪酸及石鹼ヲ出現シ、中性脂肪ノ出現ハ之ヲ認ムルモノアリ又之ヲ否定スルモノアリ、而シテ妊娠性黄體ニアリテハ普通ノ「リポイド」染色法ニヨリテハ一般ニ「リポイド」ヲ認メザルカ又ハ極メテ少量ナル點ニ就テハ何レノ研究者モ一致スルトコロニシテ産褥期ニ於テ黄體ノ退行ト共ニ多量ノ「リポイド」ヲ出現シ、其ノ「リポイド」ノ性質ハ月經性黄體ト差異ナキガ如シ。

家兔ノ妊娠性黄體ニアリテハ黄體形成初期ヨリ「リポイド」ノ出現ヲ認メ次第ニ増加ヲ來シ成熟期以後ニアリテハ恒

ニ多量ノ「リポイド」ヲ普通ノ「リポイド」染色法ニヨリテ證明シ得ベシ、即チ「リポイド」ノ出現ノ時期並ニ其ノ量ニ於テ人黃體トハ著シク差異ノ存スルトコロナルモ、「リポイド」ノ性質ニハ大差ナキガ如シ、斯クノ如ク人黃體ノ「リポイド」ト家兔黃體ノ「リポイド」ノ出現時期及量の差異ハ恐ラク動物ノ種族ニヨリテ異ルモノナルカ又ハ黃體ノ機能ニ多少ノ差異ノ存スルタメナルベシ、而シテ動物ノ黃體ト人黃體ノ機能トノ間ニハ多少ノ差異アルベシトハ諸家ニヨリテ考察セラレツツアルトコロナリ。

次ニ予ガ研索シタル家兔妊娠性黃體ノ「リポイド」ノ意義ニ關シテ考察スルニ、黃體ノ發生初期ニ認メラレタル「リポイド」ヲ以テ黃體細胞ノ機能減退即チ其ノ變性ニ因ルモノト思考シ得ズ、而シテ爾後黃體細胞ノ漸次肥大スルト共ニ其ノ「リポイド」モ増加ヲ來シ、黃體ノ成育極度ニ達スル妊娠一週頃ニ於テ其ノ「リポイド」モ亦極メテ多量ナルヲ以テ見レバ此ノ期ニ於ケル「リポイド」ハ黃體細胞ノ機能亢進ノ徵ト觀ルコトヲ得ベク、此ノ「リポイド」ト一面黃體細胞ノ内分泌機能トノ間ニハ密接ナル關係ノ存スルモノアルベキコトハ容易ニ思考シ得ラルルトコロニシテ敢テ牽強附會ノ想像ニハ非ザルベシト信ズ。即チ斯クノ如キ「リポイド」ヲ以テ直チニ黃體細胞ノ内分泌物質ナリトスルヲ得ズト雖モ、之ガ形成ニ關與スル必須ノ物質ナルカ或ハ其ノ際ニ於ケル物質代謝ノ產物タルベシト信ズ。

Jacovisco (1912) ガ卵巢並ニ黃體ノ「リポイド」ノ「エキストラクト」ガ雌性動物ノ生殖器官ニ一定ノ影響ヲ與フルコトヲ説キ、Fellner (1913) モ黃體ヲ有スル卵巢ノ「リポイド」ノ「エキストラクト」ガ幼若動物ノ子宮ニ充血及肥大ヲ招來シ乳腺ニ影響ヲ及ボスコトヲ唱ヘ、Hermann (1915) ガ黃體ヨリ一種ノ「リポイド」有効物質 (Pentamindiphosphatid) ヲ抽出シ之ヲ雌性動物ニ注射シタルニ子宮ノ肥大及充血ヲ來セリト報告シ、更ニ次イデ氏ハ黃體ヨリ「ヒヨレステリン」反應陽性ナル一物質ヲ抽出シ、之ガ注射ニヨリテ幼若動物ノ生殖器官ノ發育ノ促進シ得タリト稱ス、又 Seitz, Winz, Fungelruth (1920) ハ牝牛ノ黃體ヨリ Lipamin 及 Luteolipoid ナル物質ヲ抽出シ後者ハ一種ノ「リポイド」ニシテ月經制止作用ヲ有シ前者ハ月經促進作用ヲ有スト云ヒ是等ノ製劑ハ汎ク婦人科領域ニ於テ試ミラレ一部ニ於テ相當ノ効果ヲ認メラレツ、アルガ如キ事實ハ益々上述ノ如キ想像ニ對シ有力ナル根據ヲ附與スルモノナリ。然レドモ黃體ホルモン」ト黃體「リポイド」トノ關係ニ就キテハ近來其ノ解釋ハ著シク改變セラレザルベカラザルノ狀態ニ到達シタリ、即チ Zondek (1925) ノ指摘シタル

ガ如ク黃體リポイド」ノ「エキストラクト」ガ子宮乃至生殖系統ノ發育ヲ促進シタルノ理由ヲ以テ、之ヲ以テ直ニ「リポイド」ガ黃體ホルモン」ヲ含有スルモノナリトハ斷定シ得ザルモノニシテ、子宮ノ肥大ヲ招來スル物質ハ獨リ黃體リポイドエキストラクト」ノミナラズ睾丸、松葉腺等ノ如キ臟器ヨリモ得ラレ又一定ノ蛋白質ヲ以テシテモ尙子宮ノ一定度ノ肥大ヲ招來シ得ルヲ以テ氏ハ此「リポイド」ヲ以テ特殊性ヲ有スルモノニ非ズトナシ、黃體リポイド」ハ單ニ「ホルモン」ヲ溶解シ居ルモノニシテ、生殖系統ノ發育ヲ支配スル根元タル「ホルモン」ハ獨リ腦下垂體前葉ニ存スルモノニシテ、子宮、腔ノ周期的變化ハ卵巢ホルモン」ヲ作用ニヨルモノナリト云ヘリ。

Kaufmann u. Raech ニヨルバ月經性黃體ニ於テ月經後ニ出現スル「リポイド」ハ寧ろ黃體ホルモン」ノ消失ヲ意味スルモノニシテ此ノ「リポイド」ハ最早ヤ生物學的作用ヲ有セズト云フ、即チ黃體ノ内分泌作用或ハ其「ホルモン」ト黃體リポイド」ハ密接ナル關係ノ存スルモノナルコトハ一般ニ想像セラレ居ルコロナルモ兩者間ノ明瞭ナル關係ハ今後ノ研究ニ俟ツベキモノ多キガ如シ。

而シテ從來最モ興味ヲ惹メタルモノハ黃體ニ出現スル「ヒヨレステリン」及其ノ結合物ナリ。其ノ生體內合成ヲ説クChaufard, La'rosch, Grigaut 等ハ副腎皮質及黃體ノ「ヒヨレステリン物質」ヲ以テ黃體細胞ノ分泌ニ由來スルモノトシ、Aschaff」派ハ之ヲ以テ血液中ヨリ浸潤沈着セルモノトナシ、副腎皮質及黃體ノ「ヒヨレステリン」ノ量ハ血中「ヒヨレステリン」量ノ標識トナルトナセリ。此ノ兩說ノ解決ハ今日尙未ダ決定シ能ハザルトコロナルガ村尾(一九一九)氏ハ鶏卵或ハ「ラノリン」加食飼ヲ以テ家兎ヲ飼養シ、之ヲ妊娠セシメタルニ此ノ家兎ノ黃體ハ斯クノ如キ特種食餌ヲ與ヘザリシ對照ノ妊娠家兎黃體ニ比シテ恒ニ顯著ナル「リポイド」ノ沈着ヲ見タリト云ヒ、黃體ノ「リポイド」ハ其ノ細胞ノ分泌ニノミ起因スルモノニ非ズシテ一部ハ血中ノ「リポイド」ガ浸潤沈着スルモノナルコトヲ指摘シ、黃體ヲ以テ妊娠中ノ過類脂肪血症ノ調節機關ナリトナセリ、然ルニ其後岩田氏ハ其ノ研究ノ結果「ラノリン飼食家兎黃體ト然ラザル對照家兎黃體トヲ比較スルニ、黃體ノ退行以前ニ於テハ其ノ重屈折性リポイド」ノ量ハ兩者ノ間ニ著差ナク、退行變化ノ發現ト共ニ「ラノリン飼食例ニ於ケル黃體ノ重屈折性リポイド」量ハ正常家兎黃體ヨリモ多量トナルヲ以テ輸入「リポイド」ハ黃體細胞ノ生活力減弱乃至消失ト共ニ黃體內ニ沈着スルモノナリト述ベタリ、而シテ前陳ノ如ク Jaffe ハ黃體內ノ「ヒヨレステリンエステル」ノ出現ハ黃體細胞ガ夫ヲ血中ヨリ攝取貯藏スルモノナリト唱フルニ反シテ

Meyer一派ニ於テハ黃體內ノ「リポイド」ヨリ轉化シテ生ズルモノナリトシ此ノ兩說ノ解決ハ甚ダ困難ナル狀態ニアリ。妊娠婦人或ハ妊娠動物ニ於テ過ヒヨレステリン血症ノ出現ヲ見ルトハ Neumann, Hermann (1912)ノ報告以來多數ノ研究者ニヨリテ立證セラレタルトコロナリ、然レドモ妊娠家兔ニアリテハ Baumann and Holly (1924)ハ血液ヒヨレステリン「ガ妊娠時ニ却テ減少スト報告シ、鈴木氏モ之ガ特種ノ變化ヲ見出サザルコトヲ報告セリ。予ハ家兔ノ妊娠性黃體ノ「ヒヨレステリンエステル」ハ主トシテ其ノ成熟期以後ニ出現シ、妊娠後半期ニ最も多量ニシテ産褥ニ於テ黃體ノ退行變性顯著トナレバ減少スルヲ認メタルコト前述セルガ如シ、而シテ予ハ血中ノ「ヒヨレステリン」ノ測定ヲ行ハザリシヲ以テ妊娠家兔ニ於ケル過ヒヨレステリン血症ノ有無及之ト黃體內ヒヨレステリン「トノ關係ニ就テ論ズルコトヲ得ズト雖モ、予ハ本研究ヲ行フ際之ト同時ニ妊娠時ニ於ケル副腎皮質及卵巢間質細胞ニ於ケル「リポイド」ヲ檢シタルニ妊娠時ニ於テハ常ニ非妊時ニ比シテ是等ノ組織ニ於テ「リポイド」殊ニ「ヒヨレステリンエステル」ノ著シク多量ナルヲ認メ得タリ。斯クノ如キ所見ヲ參照スルニ非妊時ト妊娠時トニ於テハ家兔ニ於テモ「ヒヨレステリン物質代謝ニ著明ナル變動ノアルコトヲ推測スルニ難カラズ、而シテ其ノ變動ノ原因ニ關シテハ從來幾多ノ説明ノ存スルトコロナレドモ妊娠時ノ「ヒヨレステリン物質代謝ニ於テ黃體及間質細胞ガ何等カノ役割ヲ演ズルモノナルコトヲ信ズルヲ得ベク、又他面黃體ホルモン」或ハ卵巢ホルモン」ヲ含有スト思惟セラルル物質ガ血中ノ「ヒヨレステリン量ニ一定ノ作用ヲ及ボスコトハ諸家ノ研究ニ於テ立證セラレタル事實ナリ。故ニ予ハ上述ノ如キ所見ヨリ考察シテ家兔ノ妊娠性黃體ニ於テハ「ヒヨレステリンエステル」ガ黃體內ニ存セル「リポイド」ヨリ轉化シテノミ生ズルトナシ且又之ガ黃體ノ變性ヲ意味スルモノナリトナス說ニハ左袒シ得ザルトコロナリ、然レドモ之ガ黃體ノ内分泌作用ニ關係アルモノカ否カハ不明ナリ。又産褥ニ於テ退行黃體ニ出現スル「リポイド」ハ其ノ黃體ノ變性ニヨリテ出現スルモノナルコト明白ナリ。斯クノ如ク黃體ノ「リポイド」ガ變化スル狀況ヨリ推測スルニ、黃體ノ機能モ恐ラク其ノ時期ニヨリテ次第ニ變化スルモノナルベク、殊ニ妊娠性黃體ト非妊性黃體ノ「リポイド」ガ受胎卵ノ子宮內着床ノ期ヲ以テ次第ニ差異ヲ示

スコトハ興味アル所見ナリト思惟ス。

第五章 卵巢間質細胞組織ニ就テ

第一節 序 説

家兎卵巢間質ニハ上皮様ノ多角形ナル細胞ヨリ形成セラレタル組織アリ、小葉狀、胞葉狀或ハ索狀ヲナシ、其狀況恰モ副腎皮質或ハ黃體ニ類似セリ、此細胞ハ獨リ家兎ノミナラズ種々ノ動物卵巢ニモ亦存スルトコロナルモ (Limon, Frankel, Schäffer, Aschener) 啮齒類殊ニ家兎ニ於テ其ノ發育最モ顯著ニシテ成熟家兎ニ於テハ本組織ハ卵巢間質ノ殆ンド大部分ヲ占ムルモノナリ。

該細胞ハ古クヨリ Kornzellen, Plasmazellen, Wanderszellen, Fettzellen, ナル名稱ノ下ニ記載セラレタルトコロニシテ、此細胞ガ特ニ諸家ノ興味ヲ喚起シテ盛ニ研究セラル、ニ至リシハ比較的近時ノコトニシテ最近二十年來ナリ。

一九〇二年 Limon ハ種々ノ動物ノ卵巢ヲ檢シ、多數ノ濾胞ガ其ノ發育ノ中途ニ於テ自然ニ變性シ、其ノ内莢膜細胞ガ増殖シ、黃體ニ酷似セル組織ガ形成セラレ、此組織ハ血管ノ供給豐富ニシテ細胞内ニ多量ノ「リポイド」ヲ含有シ内分泌腺ノ形態ヲ具フルコトヨリシテ該組織ハ内分泌機能ヲ有スルモノナルベシト思考シ、之ヲ卵巢間質腺ト命名シ、其ノ師 Buoin (1901) ノ推定ニ對シ組織學的ニ根據ヲ與フルトコロアリタリ。

更ニ一九〇三年 Cohn ハ家兎ニ就キテ之ヲ檢シ其ノ間質細胞組織ハ Limon ノ云ヘルガ如ク閉鎖濾胞ノ内莢膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ形成セラル、モノナルコトヲ確メタリ。一九〇五年 Frankel ハ多數ノ動物ヲ材料トシテ卵巢間質腺ニ就キテ比較解剖學的研究ヲ遂ゲ、間質腺ハ動物種類ニヨリテ其ノ發育ヲ異ニシ、動物中ニハ全ク之ヲ欠セルモノモ存スルコトヲ發見シ、此組織ハ Limon ノ云フガ如ク重要ナル内分泌的作用ヲ營ムモノニ非ズトナセシガ、更ニ一九一一年氏ノ門下ノ Schäffer ハ更ニ多數ノ動物ニ就キテ研索シ Frankel ノ研究ニ補遺スルトコロアリキ。

人卵巢ニ於テ此組織ガ存スルヤ否ヤニ就キテハ存ストナスモノト之ヲ否認スルモノトアリシガ Wallart (1907), Seitz (1906), Aschener (1914, 1918) 其他ノ諸家ノ研究ニヨリテ人ニ於テモ其ノ一定時期ニ存在スルモノナルコトヲ確認セラレタリ。即チ Wallart 反 Seitz ハ此組織ハ生後一年ヨリ春期發動期迄ハ最モヨク發達シ、其ノ後ニ於テハ妊娠時、月經期、閉經期ニ多少増殖ヲ來スモノナリトシ、Aschener ハ春期發動期ニハ既ニ減少シ月經時或閉經期ニハ之ガ増殖ヲ認メザリシト云フ。而シテ卵巢間質腺ハ子宮筋腫、卵巢性子宮出血症、骨

軟化症、葡萄狀鬼胎、惡性脈絡膜上皮腫、「クロローゼ」等ノ疾病ニ際シ増殖スルコトアリトセラル。

Frankel, Schäffer, Aschner 等ノ研究ニヨリテ確メラレタルガ如ク本組織ハ動物ノ種類ニ依リテ存否一定セズ、同一動物或ハ人ニアリテモ、種々ナル條件ニヨリテ増殖シ或ハ消失スルガ如シ。Buoinet 及 Ancel ハ周期的ニ黃體ノ發生スルモノ、換言スレバ假黃體ヲ發生スルモノハ本組織ノ發育ハ微弱ニシテ、假黃體ヲ生ゼザルモノハ其ノ發育良好ナリト云フモ、Aschner ハ之ニ反シテ、間質腺ノ發育ハ其ノ動物ノ一時ニ産出スル仔數ト平行スルモノニシテ喫齒類ノ如ク一時ニ多數ノ胎仔ヲ産出スルモノハ其ノ發育旺盛ニシテ、人或ハ猿ノ如キモノニアリテハ其ノ發育弱シト説ケリ。

卵巢間質腺ノ機能ニ關シテハ前述ノ如ク Limon, Buoinet ハ内分泌的機能ヲ有スト主張シ、Biedl, Seitz, Frankel 等ハ特ニ重要ナル内分泌機能ヲ有セザルモ、間質腺ハ黃體機能ヲ代償スルモノナリト云ヒ Steinach 等ハ間質腺ハ第二性徴及性慾ニ關スル内分泌ヲ司ルモノナリトシ之ニ Pubertätsdrüse ナル名稱ヲ附シタリ。

Marshall, Jolig, Louise, Mc. Ilroy ハ卵巢移植ノ實驗ノ結果、移植卵巢ニ於テ濾胞ハ消滅シ黃體ノ形成モナキニ拘ラズ獨リ間質腺細胞ノ殘存スル場合ニハ子宮ハ萎縮ヲ來サルヲ認メ、卵巢間質腺ハ子宮ノ榮養ニ關與スルモノナラント想像シタリ。之ヲ要スルニ卵巢間質腺ノ機能ニ關シテハ今日未ダ明カナラザルトコロ多ク、最近卵巢間質細胞ハ性ホルモン「生成ニ關與スル重要ナル造構ナリト稱セラ、(齊藤 Pakes)ニ至リタルモ、果シテ内分泌ヲ營ムモノナリヤ否ヤ尙未定ノコトニ屬ス。

第二節 自家實驗總括

予ハ妊娠時、產褥時、平常時家兔及幼若家兔ノ多數材料ニ就キテ卵巢間質腺ヲ檢シ Limon, Cohn ノ云ヘルガ如ク、其ノ大部分ハ閉鎖濾胞ノ内莢膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ形成セラルルモノナルコトヲ認メタルガ、之ニ關シ予ノ知り得タル事實ヲ簡單ニ記述セントス。間質腺ノ大部分ハ閉鎖濾胞ヨリ形成セラルルガ故ニ記述ノ都合上先ズ濾胞及閉鎖濾胞ニ就キテ述ベントス。

第一項 濾胞

家兔卵巢濾胞ハ一二ノ點ヲ除キテハ人卵巢ノ濾胞ト差異ナシ、即チ家兔卵巢濾胞ニアリテハ其ノ一定度ノ發育ヲナセル含水濾胞ノ顆粒膜層ニ於テ所謂カール・エクスネル氏小體ト稱セラルル多數ノ圓形ナル小腔ヲ有セリ、此ノ小腔

ハ顆粒膜細胞ノ整然タル菊花狀或ハ放線狀ノ配列ヲ以テ形成セラレ濾胞腔ト同ジク液體ヲ充セリ。

顆粒膜細胞ハ原始濾胞或ハ未ダ小ナル濾胞ニ於テハ扁平或ハ骰子形ノ細胞ニシテ一層乃至二三層ヲナシテ卵細胞ヲ圍繞セリト雖モ、中等大以上ノ含水濾胞ニ於テハ數層乃至十數層ヲナシ細胞圓形ニシテ「クロマチン」ニ富メル圓形又ハ卵圓形ノ核ヲ有シ、原形質ニ乏シ、顆粒膜細胞ハ常態ニ於テハ「リポイド」ヲ證明セズ。顆粒膜細胞ノ濾胞膜ト接スル部分ニ於テハ纖維性造構ヲ有スル纖細ナル限界膜ニ接着ス、予ノ所見ニヨルニ此ノ顆粒膜細胞ノ限界膜ニ接スル部位ニ於テハ多數ノ圓形ナル顆粒膜細胞ニ混ジテ少數ノ桿狀又ハ柱狀ノ細胞ガ存シ該細胞ノ核ハ小桿狀又ハ紡錘狀ニシテ稍「ヘマトキシリン」ニ濃染シ、細胞ノ一端ハ限界膜ニ接着シ、其ノ狀況恰モ辜丸細精管ニ於ケルセルトリー氏細胞ニ類スルモノアリ、此ノ細胞ハ恐ラク濾胞ノ發育ト共ニ顆粒膜細胞ノ變形セルモノニシテ顆粒膜細胞ノ支持ヲナスモノナラン。

濾胞膜ハ中等大以下ノ濾胞ニアリテハ總テ紡錘形ノ結締組織細胞ヨリナルト雖モ、中等大以上ノ含水濾胞ニ於テハ內層(內莢膜)ト外層(外莢膜)ニ分チ得ベシ。內莢膜ハ所謂內莢膜細胞ト稱スル稍原形質ニ富ミ、圓形乃至卵圓形ノ核ヲ有スル多角形ノ大ナル細胞ト、紡錘形ノ結締組織細胞及血管ヨリナル。內莢膜細胞ハ成熟濾胞ニ於テ其ノ分化最モ進ミ間質細胞ニ酷似シ常態ニ於テ多量ノ類脂肪及多少ノ重屈折性リポイドヲ含有スルモノナリ。

濾胞ハ成熟シテ排卵機能ヲ營ムト共ニ他面大多數ノ發育濾胞ハ其ノ發育ノ中途ニ於テ自然ニ變性シ所謂濾胞ノ閉鎖ナル現象ヲ示スモノニシテ、之ニヨリテ間質腺ヲ形成スルコトハ既ニ Limon, Cohn, Aschner, Seitz 等ノ攻究セルトコロナリ。予ノ觀察セルトコロニヨルニ妊娠時ハ平常時ニ比シ更ニ多數ノ濾胞ガ閉鎖ニ陥ルモノニシテ妊娠末期ヨリ產褥ニ於テ此ノ閉鎖濾胞ノ內莢膜細胞ガ増殖肥大シテ間質細胞組織(間質腺)ヲ形成スルヲ確認シ得ベク、又家兎ニアリテハ黃體ノ退行スルト共ニ黃體內ニ殘存セル內莢膜細胞ガ増殖肥大シテ是ヨリモ亦間質細胞樣組織ヲ形成スルコトヲ認メ之ト閉鎖濾胞ヨリ形成セラレタル間質組織ト甚ダ類似スルモ一定ノ形態的特徵ニヨリテ鑑別シウルモノナルコト

ト黃體條下ニ述ベタルガ如シ。

第二項 濾胞閉鎖

濾胞ノ閉鎖ナル現象ハ只中等大以上ノ濾胞ニ最モ顯著ニ認メラルモノニシテ、小ナル濾胞ニアリテハ其ノ卵細胞ノ變性スルヤ、此ノ變性セル卵細胞ハ「エオジン」ニ平等ニ染色セラルル不正形ノ塊狀物トシテ暫ク其ノ存在ヲ認メシムルモ此ノ如キ小ナル濾胞ニテハ内莢膜細胞ハ未ダ分化セザルヲ以テ之ヨリ間質細胞組織ヲ形成スルコトナク、濾胞ハ吸收セラレ消滅ス。

之ニ反シ中等大以上ノ含水濾胞ノ變性セントスルヤ、顆粒膜細胞ニ顯著ナル變化ヲ認ムルモノニシテ、其ノ核ノ染色力減退、次イデ其ノ融解或ハ「ビクノーゼ」ニ陥ルヲ認メ、細胞ノ配列ハ亂レ、カール・エキスネル氏小體不正トナリ遂ニ消失ス、カカル變性細胞核ノ附近ニハ少許ノ單屈折性類脂肪ガ微細滴狀ニ出現スルヲ認メ得ベシ。顆粒膜細胞ノ變性ニ伴ヒ、卵細胞ノ胚點不明トナリ胚斑胚胞融解シ原形質ハ汚穢ナル染色ヲ營ミ不正形ヲ呈シ、透瑩帶少シク肥厚シ平等ニ「エオジン」ニ稍濃染シ、此ノ際卵細胞ニハ多クノ場合「リポイド」ノ出現ヲ認メザルモ、稀ニ單屈折性類脂肪ヲ認メタルモノアリ。進性ノ進捗ト共ニ遂ニ卵細胞ハ消滅シ或ハ不正形ノ塊狀物トシテ殘存シ透瑩帶モ不正形ヲ呈シ或ハ破綻シ其ノ内部ニ組織球及結締組織細胞進入シ顆粒膜細胞消失シ、限界膜ハ稍肥厚シ内莢膜細胞ハ數個宛一團トナリ結締組織細胞及血管ヲ伴ヒテ求心性ニ増殖シ限界膜ヲ壓迫シ或ハ之ヲ越ヘテ内部ニ進入シ遂ニ濾胞腔ヲ充填スルニ至ル、然レドモ内莢膜細胞ノ明カナル核分割像ハ認メ難シ。斯クノ如クニシテ濾胞ノ中心部ノ變性物ハ遂ニ吸收セラレ或ハ少時殘存シ殊ニ透瑩帶ハ屢々「エオジン」ニ染色セル不正形ノ硝子樣物トシテ長ク殘存スルコト多ク、増殖セル内莢膜細胞ハ肥大シ多量ノ單屈折性類脂肪及重屈折性リポイド（妊娠時ハ殊ニ多量）ヲ含有シ間質細胞組織ヲ形成スルモノナルガ、其ノ初期ノ細胞ハ尙定形的間質細胞ニ比シテ小型ニシテ、内莢膜細胞ト間質細胞トノ移行形ノモノモ存セリ。

濾胞外莢膜ハ初メハ上述ノ如キ閉鎖濾胞ヲ包ミテ著變ヲ認メザルモ閉鎖濾胞ガ間質細胞組織ニ移行スルニ及ンデ次第ニ消滅シ或ハ一部ハ卵巢基質結締織ニ移行シ、新生セラレタル間質細胞組織ハ遂ニ被膜ヲ失ヒ球形ヲ呈セザルニ至ルモノナリ。

斯クノ如キ濾胞ノ閉鎖ハGün.ノ所謂充填性閉鎖濾胞ニ一致スルモノナルガ、濾胞ハ其ノ閉鎖ノ中途ニ於テ種々ノ變狀ヲ來スモノアリ、即チ限界膜ノ肥厚著シクシテ之ト外莢膜ハ結締織ヲ以テ連絡シ内莢膜細胞ノ顯著ナル増殖ヲ來サズシテ、卵細胞及顆粒膜細胞ノ變性消失スルヤ其ノ部ハ遂ニ小囊胞ト化スルコトアリ、之ヲ囊狀閉鎖濾胞トナス。

第三項 間質細胞組織及其ノ「リポイド」所見

生後四ヶ月前後ノ成熟前ノ家兔卵巢ニ於ケル間質細胞組織ノ發育ハ極メテ弱ク、主トシテ閉鎖濾胞ノ周圍及卵巢髓質部ニ胞巢狀、群簇狀ヲナシテ存シ、其ノ細胞未ダ小ニシテ「クロマチン」ニ富メル圓形、卵圓形或ハ多少紡錘形ヲナセル核ヲ有シ、原形質ニ乏シ。「ズダンIII染色」ニヨルニ是等ノ間質細胞ハ少許ノ「リポイド」ヲ微滴狀ニ證明シウルモノニシテ、是等ノ「リポイド」ハ主トシテ單屈折性類脂肪ニシテ重屈折性リポイド」ハ認メラザルカ極メテ微量ニ存スルモノアリ。

體重二疋内外ノ成熟處女家兔卵巢ニ於テハ間質細胞組織ハ卵巢間質全般ニ亘リテ良ク發育シ、細胞モ亦稍肥大シ、多角形ノ上皮様細胞トナリ稍「クロマチン」ニ富メル圓形又ハ卵圓形ノ核ヲ有ス。此ノ細胞ハ「リポイド」モ増加シ、其ノ染色所見ヨリ見レバ狹義ノ類脂肪、中性脂肪ニ屬シ、重屈折性リポイド」ヲ含有スルモノ散在性或ハ限局性ニ存スルモ其ノ量ハ尙一般ニ多カラズ。

妊娠家兔卵巢ニ於テハ間質細胞組織ハ其ノ發育皆極メテ旺盛ニシテ卵巢間質ノ大部分ヲ占ム。細胞ハ妊娠ノ比較的初期ヨリ既ニ肥大シテ多角形ノ大ナル細胞トナリ、原形質ハ淡ク「エオジン」ニ染色シ微細顆粒狀ヲ呈シ、核モ亦大キク圓形ヲ呈シ、細胞個々ノ境界ハ極メテ明瞭ナリ。

妊娠中ニ於ケル間質細胞ハ極メテ多量ノ「リポイド」ヲ有シ主トシテ重屈折性リポイド」(「ヒヨレステリンエステル」)、類脂肪、中性脂肪ニシテ特ニ「ヒヨレステリンエステル」ノ量ハ平常時ノモノニ比シテ著シク多量ニシテ其ノ量ハ妊娠中期以後ニ最モ多量ナリ。而シテ重屈折性リポイド」ハ特ニ黃體ニ近キ間質細胞ニ多量ナルガ如シ。

産褥期ノ家兔卵巢ニ於テハ間質細胞ハ、其ノ初期ニ於ケルモノハ妊娠時ノ卵巢ニ於ケルモノト大差ナク、其ノ「リポイド」ニ於テモ大ナル變動ナキモ、産褥日數ノ進捗ニ伴ヒ一般ニ「リポイド」ノ含有量減少ヲ來シ、殊ニ産褥ニ於テハ一部ノ間質細胞ニ變性現象出現シ、間質細胞ハ原形質濃濁シ細胞ノ境界不鮮明トナリ、核ノ染色ガ減退シ、殊ニ中ニハ散在性或ハ限局性ニ壞死ニ陥ラントスル細胞ヲ認ム。

間質細胞ノ變性ハ一般ニ體質部ノ細胞ニ多ク、又家兔個々ニ於テモ二個乃至三個引キツヅキテ妊娠ヲ經過セル經産家兔ニ多ク見ラルルモノナリ。

前述セルガ如ク間質細胞ノ「リポイド」ハ産褥日數ノ進捗ニ伴ヒテ一般ニ減少スルモノナルガ、コノコトハ殊ニ間質細胞ノ變性セルモノニ於テハ顯著ナリ、而シテ「リポイド」中ニ於テモ重屈折性リポイド」ガ先ヅ初メニ減少シ他ノ「リポイド」ノ減少ハ重屈折性リポイド」ノ如ク顯著ナラズ。又「リポイド」ノ量ハ必ズシモ産褥日數ト平行シテ減少スルモノニ非ズシテ間質細胞ノ一般狀態及家兔個々ニヨリテ差異アリ。

予ハ分娩期日明カナラザル十二頭ノ經産家兔卵巢ヲ檢シタルガ(其ノ體重ニ「 23.30 ± 0.10 」瓦ニ至ル)、其ノ中十頭ノ家兔卵巢ニ於テ、間質細胞組織ハ良ク發育シ、細胞個々モ良ク肥大セリ。其ノ「リポイド」ヲ檢スルニ八例ニ於テハ何レモ多量ノ單屈折性類脂肪及中性脂肪ヲ有シ、其ノ八例ノ内一例ニハ間質細胞組織全般ニ亘リテ甚ダ多量ノ重屈折性リポイド」ヲ證明シ、五例ニ於テハ其ノ量稍少ク、二例ニ於テハ重屈折性リポイド」ノ量ハ著シク少量ニシテ散在性ニ認メララルルニ過ギズ。残り二例ニ於テハ間質細胞ニ變性ヲ認メ「リポイド」ノ量モ少量ニシテ、重屈折性リポイド」ハ認メラレザリキ。即チ予ハ是等十二頭ノ家兔ノ内二頭ノ家兔ニ於テ其ノ卵巢間質細胞組織ノ他ノモノト稍異レル狀

況ノ呈セルヲ發見シタリ。

此ノ二頭ノ家兎卵巢ハ肉眼的ニハ變化ナク多數ノ種々ナル發育階級ニアル濾胞ヲ認ムルコトヲ得。鏡檢スルニ白膜、基質結締織ニハ著變ナク、濾胞ニ於テモ少數ノ中等大ノ濾胞ニ閉鎖現象ヲ認ムル外著變ナシ。間質細胞組織ハ卵巢間質ノ大部分ニ亘リ廣ク存在スルモ、全般ニ亘リテ變性シ、間質細胞群中處々ニ空胞狀ニ化セル細胞ノ多數出現シテ恰モ蜂窩狀觀ヲ呈セルヲ認メ、更ニ脂肪染色ヲ行フニ皮質部ニ於ケル間質細胞ヲ除キテハ「リポイド」極メテ少ク、重屈折性リポイド」ハ殆ンド認メラズ。其ノ一般狀況副腎皮質ニ於ケル wabige Degeneration ニ類似セリ。

斯クノ如キ間質細胞ノ顯著ナル變性並ニ「リポイド」ノ減少ハ如何ナル原因ニヨルモノナルヤ予ハ之ヲ審ニシ得ザリシモ、卵巢ノ間質細胞以外ニ於テハ常態ト異ルトコロナキニ拘ラズ、間質細胞ノミニ著シキ變化ヲ認ムルガ如キハ恐ラクハ其ノ卵巢局所ニ於ケル原因ニ依ルモノニ非ラザルベシト思考ス。

第四項 予ノ所謂間質細胞樣組織ノ「リポイド」

家兎妊娠性黃體ハ產褥初期ニ於テ退行シ黃體ルテイン細胞ガ消滅シタル後、黃體內ニ殘存シキタル内莖膜細胞ガ増殖シ一種ノ間質細胞樣組織ヲ形成スルモノナルコトハ前述シタルガ如シ。此ノ新生セラレタル間質細胞樣組織ハ初メ其ノ「リポイド」ハ少量ナルモ次第ニ増加シテ他ノ間質細胞組織ト大差ナキニ至ル。此ノ「リポイド」ハ微細ナル重屈折性リポイド」及狹義ノ類脂肪(初メハ脂肪酸ヲ除ク)及少許ノ中性脂肪ニシテ、重屈折性リポイド」ノ量ハ一般ニ少量ナリ、而シテ產褥日數ノ進捗ニ伴ヒテ類脂肪ハ益々増加シ產褥十七八日頃以後ニ於テハ他ノ間質細胞ニ比シテ遜色ナキニ至ルモ重屈折性ヲ呈スルモノハ其ノ増加ハ著シカラズ依然トシテ少量ニ過ギズ。而シテ此ノ間質細胞樣組織ニ於テ退行變化ノ發現スルヤ重屈折性リポイド」ハ全ク消失シ少量ノ類脂肪就中脂肪酸ノ存在ヲ認ムルニ至ル。然ルニ茲ニ興味ヲ惹ク事實ハ此ノ間質細胞樣組織ハ上述ノ如ク多量ノ「リポイド」ヲ有スルモノナルモ重屈折性ヲ有スルモノハ其ノ全經過ヲ通ジテ概シテ少量ナルニ、此ノ組織ガ未ダ退行變化ニ陥ラザルニ先キダチテ其ノ家兎ヲ再ビ妊娠セシム

ル時ハ此ノ間質細胞様組織ニ極メテ多量ノ「リポイド」殊ニ重屈折性リポイド」出現シ其ノ量他ノ間質細胞ニ於ケル「リポイド」量ヲ遙カニ凌駕スルニ至ルコトナリ(實驗例第五例、第七例、第九例)。即チ此ノ間質細胞様組織モ元來ノ間質細胞組織ト同様ニ妊娠ニヨリテ其ノ「リポイド」ノ量ニ著シキ差異ヲ來スモノナリ。

前ニ述ベタル分娩時日ノ明カナラザル經産家兔卵巢ニ就キテ、退行黃體ヨリ移行セル此ノ間質細胞様組織ノ有無ヲ檢シタルニ十二頭中七例ニ於テ之ヲ發見スルヲ得タリ。其ノ狀態ハ形成後ノ日數ニ應ジテ多少差異アリ、而シテ此ノ間質細胞様組織ハ何レモ多量ノ類脂肪ヲ有シ、重屈折性リポイド」ハ其ノ二例ニ於テ多量他ハ何レモ少量ナルカ全ク認メラレザリキ、而シテ其ノ中二例ニ於テハ其ノ間質様細胞中ニ淡黃褐色ノ色素ヲ有スルモノアリ。

斯クノ如ク經産家兔ニ於テハ其ノ分娩後一定時日迄ハ退行黃體ヨリ一種ノ間質細胞様組織ヲ形成スルニ至ルモノニシテ、決シテ白體或ハ硝子體ト名ヅクベキモノヲ生ズルコトナシ。

第三節 間質細胞ノ「リポイド」ニ關スル考察

卵巢ニ於ケル間質細胞及濾胞内莖膜細胞ノ含有スル「リポイド」ノ意義ニ關シテハ種々ナル說アリ、古クハ單ニ細胞ノ變性ニヨリテ出現セルモノトナシ、或ハ濾胞ニ對シ之ガ榮養ヲ與フルモノトナシタルモ是等ノ說ハ今日ニ於テハ論ズル價值ナキモノナリ。

間質細胞組織ハ一般形態的ニ副腎皮質ニ類似スルノミナラズ其ノ「リポイド」所見ニ於テモ亦一致スルトコロ頗ル多シ、即チ兩者共ニ常態ニ於テ多量ノ類脂肪及「ヒヨレステリンエステル」ヲ含有シ、動物ニ於テ「ヒヨレステリン」或ハ「ヒヨレステリン」ヲ多量ニ含有スル物質ヲ以テ飼養ヲ行フトキハ副腎ニ顯著ナル「ヒヨレステリンエステル」ノ沈着ヲ來ス(Krylow, Landau, Mc Nee, Wacker, Hueck, chlatow, Kawamura, Zinserling-nach Kawamura, 森、和田)ト共ニ卵巢間質細胞ニ於テモ亦同様ノ事實ヲ認ム(Weltmann u. Biach, 今、林、川村、村尾、岩田、村岡)ルモノニシテ村尾氏ハ實驗的研究ヨリシテ卵巢間質細胞ハ平常時及妊娠時ニ於ケル全身ノ「リポイド」代謝ニ關與スルモノナリトナシタリ。

更ニ又妊娠時副腎皮質ノ肥大シ、其ノ「リポイド」ノ増加ヲ來スコトハ既ニ多數ノ人ニヨリテ證明セラレタルトコロニシテ (Störk u. Haberer, Kolmer, Aschner, Kolde, Aschoff, Wiesel-nach Aschner)* Albrecht, Weilmann, Neumann, Hermann ノ如キハ妊娠過類脂肪血症ノ原因ヲ茲ニ求メントシ、又妊娠時ニ卵巢間質細胞ノ増殖肥大ヲ來シ多量ノ類脂肪及「ヒヨレステリンエステル」ヲ含有スルコトハ村尾及予ノ研究ニ於テ確證スルコトヲ得タリ。而シテ予ハ其ノ際卵巢間質細胞ノ重屈折性リポイド」ト副腎皮質ノ夫レガ殆ンド平行スルヲ認メタリ。更ニ副腎皮質及卵巢間質腺ハ共ニ何等カノ内分泌機能ヲ有スルモノナラントハ想像セラレ居ルモ、其ノ内分泌機能ノ未ダ明カナラザル點モ甚ダ類似シ、副腎抽出物質ガ血中ノ「リポイド」ニ一定ノ影響ヲ與ヘ副腎ガ「リポイド」殊ニ「ヒヨレステリン」ノ代謝ニ關與スル「ホルモン」ヲ分泌スルトノ說並ニ實驗アリ (Baumann and Holly, 河野、堀江)、而シテ近時ノ研究ニヨルニ卵巢ヨリ抽出セル所謂「ホルモン製劑並ニ黃體ヲ除去セル卵巢ノ抽出製劑或ハ濾胞ヨリ得タル「ホルモン製劑モ亦血中ノ「リポイド」量ニ一定ノ影響ヲ及ボシ (岡田、奥、小池、Mori, u. Reiss) 去勢ニヨリテ血中「リポイド」量ノ上昇ヲ來スガ如キ事實ヨリ考察スルニ間質腺及濾胞ハ「リポイド」代謝ニ關與スル「ホルモン」ヲ分泌スルモノナルガ如キ觀アリ、更ニ又去勢後副腎皮質ノ肥大シ其ノ「リポイド」ノ増加ヲ來スガ如キ事實 (Kolmer, Aschner, Kolde, Gnieysse-nach Aschner) ヲ見レバ副腎皮質ト卵巢トノ間ニハ「リポイド」代謝上密接ナル關係ノ存スルコトヲ首肯セシム。

而シテ副腎皮質ノ「リポイド」就中「ヒヨレステリン」ニ關シ古クヨリ其ノ分泌說及貯藏說ノ存スルガ如ク、卵巢間質細胞組織ノ「リポイド」ニ就キテモ同様ノ見解アリ。血中ノ「リポイド」量ノ間質細胞ノ「リポイド」ノ關係ニ就キテハ之ヲ研索セルモノナシ、予モ亦此ノ實驗ニ於テ血中「リポイド」ノ量ヲ研索ヲ行ヒ得ザリシヲ以テ之ヲ論ズルコト能ハザルモ、副腎皮質ノ「リポイド」ガ血中「リポイド」ト一定ノ關係ヲ有スルガ如ク卵巢間質細胞ノ「リポイド」モ亦血中「リポイド」ト一定ノ關係ヲ有シ之ガ増減ニ應ジテ消長スルモノナルベキハ想像シ得ベシ。而シテ家兎卵巢間質細胞ハ全身ノ「リポイド」代謝ト密接ナル關係ヲ有シ殊ニ妊娠時機能亢進セル狀態ニ在ルトキハ妊娠時ニ於ケル「リポイド」代謝殊

ニ「ヒヨレステリン物質」ノ代謝ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナルベシトハ予ノ研究ヨリシテ之ヲ推定スルヲ得ベシ。

更ニ又近時卵巢ホルモンノ研究ノ隆興スルニ及ビ卵巢ヨリ分泌セラルル性ホルモンノ生成ニハ間質細胞及濾胞内
 莢膜細胞ガ重要ナル地位ヲ占ムルコトガ提唱セラルルト雖モ(Pates 齋藤)其ノ性ホルモント間質細胞及内莢膜細胞
 ノ「リポイド」トノ關係ニ關スル知見ハ今日未ダ充分ナラズ皆今後ノ啓發ニ待ツベキモノナリ。黃體ガ退行シ「ルテイン
 細胞」ノ消滅スルト共ニ黃體內ニ殘存シ居タル内莢膜細胞ガ増殖肥大シテ其ノ部ニ一種ノ間質細胞樣組織ヲ形成シ、此
 ノ組織ガ又多量ノ「リポイド」ヲ含有スルモノナルコトハ前述シタルトコロナリ。此ノ間質細胞樣組織ノ次回妊娠時ニ
 於ケル態度ハ元來ノ間質細胞組織ト全ク同様ニシテ、妊娠時ニハ極メテ多量ノ類脂肪及重屈折性リポイドヲ含有ス、
 更ニ此ノ一種ノ間質細胞樣組織ガ人工的ニ「リポイド」ニ富ム食餌ヲ與ヘタルトキニ於ケル態度ニ就キテハ予ハ未ダ研
 究ヲ進メザルモ、岩田氏ガ「ラノリン」加食餌飼養家兔ノ卵巢ヲ檢シタルニ、其ノ一例ニ於テ卵巢間質ニ甚シク膨大シ
 透明トナリタル細胞群ガ不正形ヲナシテ一群トナリ、之ト間質ノ境界ヲナス纖維束ハ部分的ニ消失シ、加フルニ細胞
 群内ニ明カナル結締組織ノ増殖ヲ見ルモノニシテ、斯クノ如キ細胞内ニ殆ンド之ヲ充ス重屈折性リポイド」ヲ含有シ、
 其ノ量間質ニ比シテ遙カニ多量ニシテ此ノ細胞ハ退行ノ甚シク進捗セル黃體ナリト記載セラレタル(日本病理學會誌
 第十五号)ハ予ノ所見ヨリ考察スルニ恐ラク黃體ノ退行ニヨリテ生ジタル間質細胞樣組織ニ外ナラザルベク、斯クノ
 如キ事實ヨリ觀察スルニ此ノ間質細胞樣組織ノ人工的過類脂肪血症及「ヒールヒヨレステリネミー」ニ際シテトル態
 度モ亦元來ノ間質細胞ト異ルトコロナキガ如シ。是等ノ諸點ヨリ考察スルニ兩者ノ機能ハ同一ナルモノニシテ、產褥
 時ニ於テ元來ノ間質細胞ノ多數變性スルヲ以テ、退行黃體ヨリ生ジタル間質細胞樣組織ガ之ヲ補償スルモノナルベシ
 ト思考シ得ベシ、蓋シ家兔ニ於テハ分娩後直ニ交尾期發來シ交尾ニヨリテ再ビ妊娠成立スルヲ以テ斯クノ如キ補償間
 質細胞組織ノ必要ヲ生ズルモノナルベシ。此レ等ノ點ヨリ考察スルトキハ予ノ實驗例第五例、第七例及第九例ニ於テ
 此ノ間質細胞樣組織(陳舊黃體ト記シアリ)ガ元來ノ間質細胞ニ比シテ遙ニ多量ノ「リポイド」就中重屈折性リポイド

ヲ含有シタルハ又理由アルモノト云フヲ得ベシ。

第六章 結 論

家兔妊娠性黃體ニ就テ

一、予ハ黃體ルテイン細胞ハ濾胞顆粒膜細胞ノ肥大ニヨリテ形成セラル、モノナリトスル上皮細胞說ニ賛成スルモノナルモ、黃體形成ニ際シテ內莖膜細胞ハ黃體周邊部ニ於テ少數ナガラ殘存スルモノニシテ、黃體形成ノ初期ヨリ其ノ退行期ニ至ルマデ此ノ細胞ガ全ク消滅スルコトナシ、而シテ產褥ニ於テ黃體ルテイン細胞ガ變性シ消滅スルヤ、此ノ內莖膜細胞ハ次第ニ増殖肥大シ產褥十日頃迄ニ於テ一種ノ間質細胞樣組織ヲ形成ス。

二、此ノ一種ノ間質細胞樣組織ハ本來ノ間質細胞組織ニ類似セル形態ヲ有スルモ多少特異ナル點アリテ兩者ヲ區別シ得ベシ、而シテ此ノ間質細胞樣ノ組織ハ其形成後二十日乃至三十日頃ニ於テ次第ニ變性シ消滅スルヲ普通トスルモ、若シ該間質細胞樣組織ガ尙退行セズシテ殘存スル時期ニ於テ其ノ家兔ガ再ビ妊娠スルコトアレバ該間質細胞樣組織ハ更ニ長時日ニ亘リテ存在スルモノナリ。此ノ一種ノ間質細胞樣組織ハ本來ノ間質細胞組織ト同ジク濾胞ノ內莖膜細胞ニ起因スルモノナレドモ、此ノ一種ノ間質細胞樣ノ細胞ハ其ノ變性期ニ於テ其ノ原形質内ニ淡黃褐色微細顆粒狀ノ色素ヲ含有スルコトアリ、該色素ハ脂肪含有性消耗性色素ニ屬ス。

三、黃體ノ中心結締組織核ノ吸收消滅ハ其ノ結締組織核ノ大小、「ヘモジリン」ノ沈着狀態ニヨリテ遲速アリ、早キ場合ハ妊娠後半期、遅キ場合ハ黃體ガ退行シ此ノ部ニ一種ノ間質細胞樣組織ガ形成セラレタル時ニ於テモ尙殘存シ、或更ニ此ノ間質細胞樣組織ガ變性消滅スル迄モ尙殘存スルコトアリ、然レドモ決シテ硝子樣變性ニ陥ルコトナシ。

四、黃體被膜結締組織ハ黃體ノ全經過ヲ通ジテ殘存スルモノニシテ、黃體ノ退行スルニ至リ多少部分的ニ消滅ヲ來シ甚ダ纖細菲薄トナルモ全體トシテハ良ク保存セラレ、黃體ノ退行後其ノ部ニ間質細胞樣組織ガ形成セラレレバ其ノ被

膜トナリ、此ノ間質細胞樣組織ガ次ニ變性スルニ及ンデ大部分消滅スルモ、一部ハ卵巢基質結締組織ニ移行スルモノアリ、而シテ此ノ者モ亦決シテ硝子樣變性ニ陷ルコトナシ。

五、黃體組織内ノ毛細血管網ハ黃體ノ退行期ニ於テ其ノ管腔閉鎖シテ消失スルモノニシテ、黃體ノ退行後其ノ部ニ形成セラルル間質細胞樣組織ハ毛細血管網ヲ有セズ。

六、黃體基質結締細胞ハ黃體ノ退行期ニ於テ増殖シ、黃體組織ノ退行後其ノ部ニ形成セラルル間質細胞樣組織内ノ結締組織ニ移行ス。

七、家兔黃體ハ其ノ全經過ヲ通ジテ「コロイド」或ハ石灰ヲ證明スルコトナク、黃體ルテイン細胞ニハ色素ヲ證明セズ、而シテ家兔黃體ハ其ノ退行ニヨリテ硝子樣化スルコトナク白體ニ移行スルコトナシ。

八、妊娠性黃體ハ其ノ形成初期ヨリ「リポイド」ヲ認ムルモノニシテ、妊娠日數ノ經過ト共ニ速カニ増加シ、成熟期ニ達シタル黃體ニハ多量ノ狹義ノ類脂肪及少量ノ重屈折性リポイド」ヲ含有ス、狹義ノ類脂肪ハ其染色所見ノ示ストコロニヨルニ「フオスハチーデ」ニ一致ス。其後次第ニ重屈折性リポイド」ノ増加ヲ來シ妊娠中期以後ニハ甚ダ多量ノ重屈折性リポイド」ヲ含有シ、多量ノ定型的交叉像ヲ示ス「ヒヨレストリンエステル」ヲ認メシメ、之ニ狹義ノ類脂肪ヲ混ズ、斯クノ如キ所見ハ妊娠末期迄持續ス。産褥初期ニ於テ黃體ルテイン細胞ノ變性顯著トナルニ至リテ重屈折性リポイド」ハ一般ニ減少シ、黃體ルテイン細胞ノ變性崩壊シ内莖膜細胞ノ増殖スルニ及ンデハ黃體細胞ノ重屈折性リポイド」中明カナル交叉像ヲ呈スルモノ乏ストナリ針狀又ハ不定形ノ結晶ヲ有スルモノヲ認メ、妊娠末期ヨリ産褥ニ於テハ類脂肪中脂肪酸ノ出現顯著トナル、黃體ノ全經過ヲ通ジテ中性脂肪ハ之ヲ認メズ。

九、黃體ノ退行後其ノ部ニ形成セラルル一種ノ間質細胞樣組織ハ少許ノ重屈折性リポイド」及狹義ノ類脂肪ヲ含有スルモ、形成後日數ノ經過ニ伴ヒ次第ニ増加ス、然レドモ重屈折性リポイド」ハ著シキ増加ヲ來サズ。該間質細胞樣組織ガ存スル時ニ其ノ家兔ガ再ビ妊娠スル場合ニハ其ノ一定時期ニ於テ該間質細胞樣組織ニ極メテ多量ノ重屈折性リ

ポイド」(「ヒヨレステリンエステル」)ヲ出現シ、其ノ量元來ノ間質細胞組織ヨリモ遙カニ多量ナルコトアリ。此ノ間質細胞樣組織ノ變性期ニハ重屈折性リポイド」ハ全ク認メラズシテ狹義ノ類脂肪就中脂肪酸最モ多量ニ出現ス。

間質細胞組織ニ就テ

一、生後四ヶ月前後ノ幼若ナル家兔ノ卵巢間質細胞組織ハ其ノ發育極メテ微弱ニシテ、其ノ細胞モ小型ニシテ未ダ肥大スルモノナシ、而シテ少量ノ狹義ノ類脂肪及中性脂肪ヲ含有ス、成長スルニ隨ヒテ間質細胞組織ハ次第ニ發育シ成熟期ノ非妊家兔ニ於テハ其ノ細胞稍肥大シ「リポイド」モ増加シ前述ノ「リポイド」ニ加フルニ重屈折性リポイド」モ認メラル。妊娠家兔及經產家兔ノ卵巢間質細胞組織ハ其ノ發育最モ旺盛ニシテ卵巢間質ノ大部分ヲ占メ細胞個々ハ良ク肥大シ甚ダ多量「リポイド」ヲ含有シ、殊ニ妊娠中ノモノニ於テハ多量ノ類脂肪、中性脂肪、「ヒヨレステリンエステル」ヲ含有シ就中「ヒヨレステリンエステル」ノ量ハ平常時ニ比シテ著シク多量ナリ。產褥家兔ニ於テハ間質細胞ノ變性ニ陥ルモノヲ多數認メラレ、斯カルモノニアリテハ其ノ「リポイド」ハ少量トナル、一般ニ產褥ニ於テハ其ノ「ヒヨレステリンエステル」ノ量ハ減少ス。

二、間質細胞組織ノ大部分ハ閉鎖濾胞ノ內莖膜細胞ガ增殖肥大シテ之ヲ形成スルモノニシテ、妊娠中ハ濾胞ノ閉鎖ニ陥ルモノ多ク隨ツテ妊娠末期及產褥ニ於テハ間質細胞組織ノ著シキ發育ヲ認ム。

三、組織學的觀察上卵巢間質細胞組織ハ妊娠時ハ非妊時ニ比シテ其ノ機能亢進ノ狀態ニアルモノナリ。

四、黃體ノ退行後其ノ部ニ形成セラレタル一種ノ間質細胞樣組織ノ「リポイド」ハ本來ノ間質細胞組織ト畧同様ナルモノヲ含有スルモノナルモ時期ニヨリテ其ノ量ニ大差アリ、而シテ其ノ意義モ之ト同様ニシテ此ノ細胞ハ間質細胞ノ機能ノ一部ヲ補償スルモノナルベシ。

五、家兔ニ於テハ間質細胞組織及黃體ハ妊娠中ニ於ケル「リポイド」代謝ニモ關與スル組織ナラント推定ス。

六、妊娠時ニ於テ黃體ニ未ダ退行ノ像ヲ認メザルトキハ卵巢ニ健常ナル大濾胞ヲ認メズ、妊娠末期及產褥初期ニ於

テ黄體ニ退行ノ像ヲ認メ得ルニ至レバ一側卵巣ニ數個宛ノ大ナル含水濾胞ノ出現ヲ認メ、交尾期發現ス、是等ノ點ヨリ黄體ノ退行ト濾胞ノ發育及交尾期出現ハ一定ノ關係ヲ有スルモノナルコトヲ推知シ得。

終リニ臨ミ不斷ノ御鞭撻ト本稿ノ御校閲ヲ賜リタル前教授久慈先生ニ深キ感謝ノ意ヲ表ス。

文 献

- 1) **Aschner**, Über die interstitielle Eierstockdrüse der Säugetiere und des Menschen. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 79.
- 2) **Derselbe**, Blutdrüsenkrankungen des Weibes U. S. W. 1918.
- 3) **Derselbe**, Über Morphologie und Funktion d. Ovarium unter normalen und pathologischen Verhältnissen. Archiv f. Gyn. Bd. 102.
- 4) **Derselbe**, Über brunstartige Erscheinungen nach subcutane Injectionen von ovarial und Placentarextrakt. Anhv f. Gyn. Bd. IC. 1913.
- 5) **Adachi**, Über das Vorkommen doppelbrechender Lipoid in menschlichen Ovarium und Uterus. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 76.
- 6) **足立實**: 人胎盤注射ニヨル人工黄體發生ニ就テ、大阪醫學會雜誌、第二十二卷、第一號、第二十三卷、第八號、第二十四卷、第九號。
- 7) **Borell**, Untersuchungen über die Bildung des Corpus luteum und die Follikelatrese bei Tier mit Hilfe der vitalen Färbungen. Ziegler Beilag. Bd. 65.
- 8) **Benthin**, Follikelatrese in Säugerovarium. Archiv f. Gyn. Bd. 94.
- 9) **Derselbe**, Follikelatrese in Kindlichen Ovarien. Archiv f. Gyn. Bd. 93. 1910.
- 10) **Bashagen**, Über die Verschiedenen Formen d. Rückbildungsprodukt der Eierstocks. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 53.
- 11) **Baumann and Holly**, Variations in the Blood Cholesterol and Phosphatides of Rabbits due to Pregnancy. Journal Biol. Chem. 59. No. 1.
- 12) **Ballin, Ludwig**, Untersuchungen über die Rückbildung des gelben Schwangerschaftkörpers und zur Frage des interstitiellen Drüse. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 94, II. 2.
- 13) **Cohn**, Zur Histologie und Histogenese d. Corpus luteum u. des interstitiellen Ovarialgewebes. Archiv f. microscop. Anatom. u. Entwickl. Bd. 62. 1903.
- 14) **Derselbe**, Über die Funktion des Corpus luteum. Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 20.
- 15) **Derselbe**, Über das Corpus luteum u. den atretischen Follikel des Menschen u. deren cystischen Derivate. Anchin f. Gyn. Bd. 87.
- 16) **Chalатов**, Anisotrope Verteilung in Lichte der pathologie des Stoffwechsels. 1922.
- 17) **Chiydenius**, Zentralbl. f. Gyn. 1927.
- 18) **Eufinger u. Bader**, Archiv f. Gyn. Bd. 124. 1925.
- 19) **Fränkel**, Zusammenfassender Blick über innere Sekretion d. Ovariums. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 64.
- 20) **Derselbe**, Vergleichend histologische Untersuchungen über das Vorkommen drüsiger Formation in interstitiellen Eierstocksgewebe. Archiv f. Gyn. Bd. 75. 1905.
- 21) **Derselbe**, Die interstitielle Eierstockdrüse. Berl. Klin. Wochenschr. 1911.
- 22) **Derselbe**, Zur Funktion des Corpus

- Intemus Archiv f. Gyn. Bd. 186. 23) **Derselbe**, weitere Experiment über Funktion des Corpus luteums. Archiv f. Gyn. Bd. 91. 24)
- Fellner**, Experimentelle erzeugte Wachstums-Veränderungen an Weiblichen Genitale der Kaninchen. Zentrabl. f. Path. Bd. 23. 25)
- Derselbe**, Über die Tätigkeit des Ovariums in der Schwangerschaft. Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 54. 26) **Gudlund**, Stützt unsere jetzige Kenntnis über den Bau u. die Funktion des Ovariums, die Theorie der inneren Sekretion des Corpus luteums und die interstitiellen Drüse?
- Zentrabl. f. Gyn. 1918. Nr. 38. 27) **Halban u. Seitz**, Biologie u. Pathologie des Weibes. Bd. I. 28) **Harz**, Beiträge zur Histologie des Ovarium der Säugtiere. Archiv f. mikroskop. Anat. Bd. 22. 29) **Hegar**, Studien zur Histogenese d. Corpus luteums u. seine Rückbildungsprodukte. Archiv f. Gyn. Bd. 91. 30) **Herrmann u. Neumann**, Über den Lipidgehalt des Blutes normaler u. Schwangerer Frauen sowie Neugeborener Kinder. Bioch. Zeitschr. Bd. 43. 1921. 31) **Herrmann u. Neumann**, Wien. Klin. Wochenschr 1912. Nr. 42. 32) **Herrmann**, Über eine wirksame Substanz in Eierstock u. in der Placenta. Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 41. 33) **Hermstein**, Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 69. 34) **廣瀨**: 家兔卵巣黄體ノ人工的發生ニ就テ、日本婦人科學會雜誌、第十六卷、第十一號及第十二號。
- 35) **林**: 雌性生殖器系統組織ニ於ケル脂肪及類脂肪體ノ沈着ニ關スル動物實驗、岡山醫學會雜誌、大正六年。 36) **岩田**: 非妊娠家兔實驗的「リボイデー」ニ於ケル雌性生殖器、殊ニ乳腺所見ニ就テ、北海道醫學會雜誌、第二卷。 37) **岩田**: 日本病理學會雜誌、第十五号。 38) **岩田**: 家兔非妊娠性黄體ノ退行機轉並ベニ之ヲ發生ニヨル子宮粘膜炎及乳腺ノ組織學的變化、日本婦人科學會雜誌、第十九卷、第十一號。 39) **井岡**: 雌性生殖器ノ生體染色、京都醫學會雜誌、大正六年。 40) **池口**: 「ヒヨレステリ」ノ生理的意義ニ就テ、實驗治療、第八十八號、八十九號、九十號。 41) **Jaße**, Bau und Funktion des Corpus luteum Zentrabl. f. Gyn. 1924. 42) **Derselbe**, Lipidstoffwechsel u. Ovarium Zentrabl. f. Gyn. 1924. Nr. 44. 43) **Kaufmann u. Raeth**, Der Fettstoffwechsel des Corpus luteum und seine Zusammenhänge mit Funktion. Archiv f. Gyn. Bd. 130, 1927. 44) **Kaufmann u. Muhlbock**, Ovarialfunktion u. Lipidstoffwechsel. Archiv f. Gyn. Bd. 134. 1928. 45) **Kawamura**, Die Cholesterinester-verfettung. 1911. 46) **Derselbe**, Neue Beiträge zur Morphologie und Physiologie der Cholesterinsteatose. 1927. 47) **川村田中**: 病理學會誌、第六号。 48) **川村**: 人體及動物體ニ於ケル脂肪問題ニ就テ、日新醫學、第七年、第一號。 49)
- Keller**, Vergleichende Physiologie der Weiblichen Sexualorgane bei den Säugtiere. in Halban u. Seitz "Biologie u. Pathologie des Weibes" 50) **吉川**: 乳汁及乳腺ノ女性生殖器ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究、日本婦人科學會雜誌、第十九卷。 51) **小池**: 内分泌腺器間相互關係ニ關スル實驗的研究、十全會雜誌、第三十三卷、第八號。 52) **小山**: 妊娠及產褥期人血液内脂肪體ノ消長ニ關スル定量的研究、北越醫學會雜誌、第二十四年、第二號。 53) **今**: 病理學會雜誌、第四号。 54) **小林**: 去勢家兔ニ於ケル一、二、血液成分ノ變動ニ就テ、日本婦人科學會雜誌、第二十三卷、第九號。 55) **久保**: 原始濾胞ノ形成及其關係細胞ニ就テ、日本婦人科學會雜誌、第二十二卷、第十號。 56) **西岡**: 甲状腺摘出ノ雌性生殖器ニ及ボス影響ニ就テ、近畿婦人科學會雜誌、第六卷、第一號。 57) **中本**: 黃疸ニ因スル雌性生殖器ノ變化ニ關ス

- の實驗的研究、近畿婦人科學會雜誌、第六卷、第一號。
- 59) Derselbe, Zentralbl. f. Gyn. 1924. Nr. 29. Zentralbl. Gyn. 1925. Nr. 2. Zentralbl. f. Gyn. 1927. Nr. 27. 60) Morigliano, über die Lipide des Corpus luteum Zentralbl. f. Gyn. 1925. Nr. 13. 61) Miculicz-Radecki, über die Bedeutung der Ovarial Lipoid. Münch. med. Wochschr. 1922. 62) Derselbe, Zentralbl. f. Gyn. 1925. Nr. 2. 63) Derselbe, Archiv f. Gyn. Bd. 103. 64) Miller, Rückbildung des Corpus luteum, Münch. med. Wochenschr. 1910. Nr. 10. 65) Derselbe, über Corpus luteumbildung beim Menschen, Zentralbl. f. Gyn. 1911. Nr. 30. 66) Marcotty, über das Corpus luteum menstruationis und das Corpus luteum gravidatis, Archiv f. Gyn. Bd. 103. 67) 村尾：卵巣は子宮に於ける脂肪問題、第一回報告、京都醫學會雜誌、大正十年、第二回報告、近畿婦人科學會雜誌、第五卷。68) 村尾：悪性脈絡膜上皮腫に於ける卵巣變化に就て、京都醫學會雜誌、第十八卷、第十一號。69) 村尾：卵巣損傷治療に關する組織學的研究、近畿婦人科學會雜誌、第五卷。70) 村岡：近畿婦人科學會雜誌、第八卷。71) 増本：日本婦人科學會雜誌、第二十卷、第六號。72) 森：中性脂肪可染色素ノ檢案及研究、京都醫學會雜誌、第十九卷、第十二號。73) 森：類脂肪體可染色素ノ檢案及研究、京都醫學會雜誌、第十九卷、第十二號。74) 萩野：日本婦人科學會雜誌。75) 萩野：人類廣體ノ研究、北越醫學會雜誌、第三十八年、第一號。76) 太田作次郎：妊娠現象に關する婦人血液ノ生化學的研究、日本婦人科學會雜誌、第二十二卷、第五、六號。77) 太田：「テラテルミー」ノ雌性生殖腺「リボイ」ニ及ぼス影響、日本微生物學會雜誌、第十七卷。78) 岡田：醫學中央雜誌、第十九卷、第二號。79) 奥：内分泌學雜誌、第一卷。80) Reusch, Frühstadien der Corpus luteum-bildung beim Menschen, Archiv f. Gyn. Bd. 105. 81) Schaeffer, Vergleichende histologische Untersuchungen über die interstitielle Eierstockdrüse Archiv f. Gyn. Bd. 94. 1911. 82) Seitz, Die follikelartige während der Schwangerschaft insbesondere die Hypertrophie und Hyperplasie den Theca-internazellen zur Corpus luteumbildung, Archiv f. Gyn. Bd. 77. 83) Derselbe, über Follikelatriesie in der Schwangerschaft, Verhandl. d. Deut. Gessellsch. f. Gyn. Bd. 11. 84) Sobotta, Archiv f. mikroskop. Anat. Bd. 47. 85) Derselbe, Anat. Hefte, Bd. 8. 96) Schröder, Archiv. f. Gyn. Bd. 107. 87) Schottländer, Archiv f. mikroskop. Anat. Bd. 37. 88) Stieve, Entwicklung Bau u. Bedeutung der Keimdrüsen-zwischenzellen. 89) Steinmach, Zentralbl. f. Physiol. Bd. 24. 90) Derselbe, Zentralbl. f. Physiol. Bd. 25. 91) 齋藤：實驗醫學雜誌、第十一卷。92) 白木：日本婦人科學會雜誌、第十六卷。93) 鈴木：醫學中央雜誌、二十三卷。94) 鈴木：臨床醫學、第十三年、第十三號。95) Torgari, On the Retrogression of the Corpus luteum of the Mouse, The Archi Journ. of exp. Med. Vol. 1. Nr. 4. 96) Derselbe, Folia anat. Japonica Bd. 5. 1927. 97) Derselbe, The Aichi Journ. of exp. Med. Vol. 1. No. 2. 1923. 98) Derselbe, On the Corpus luteum of the Rabbit, Folia. anat. Japonica Bd. IV. 1926. 99) 寺田：實驗醫學雜誌、第十一卷。100) Wallart, Archiv f. Gyn. Bd. 81. 101) Derselbe, Zeitschr. f. Gb. u. Gyn. Bd. 63. 102) Derselbe, Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 53. 103) Walz, Archiv f. Gyn. Bd.

圖 一 第

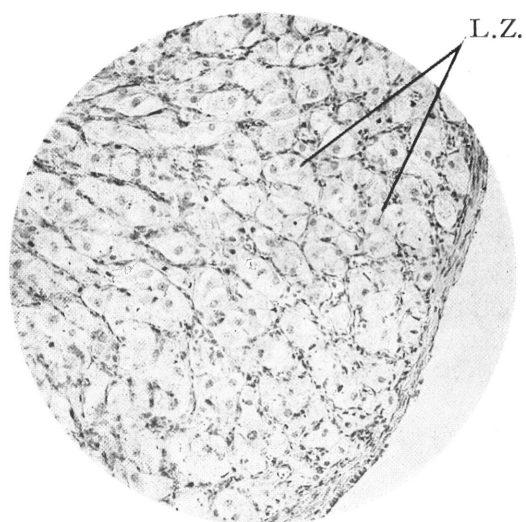


圖 三 第

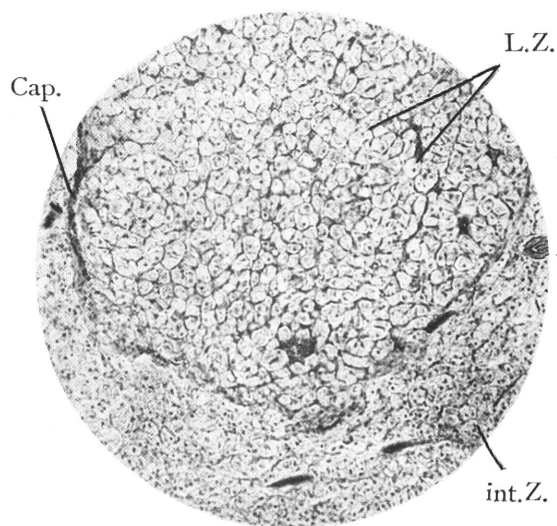


圖 五 第

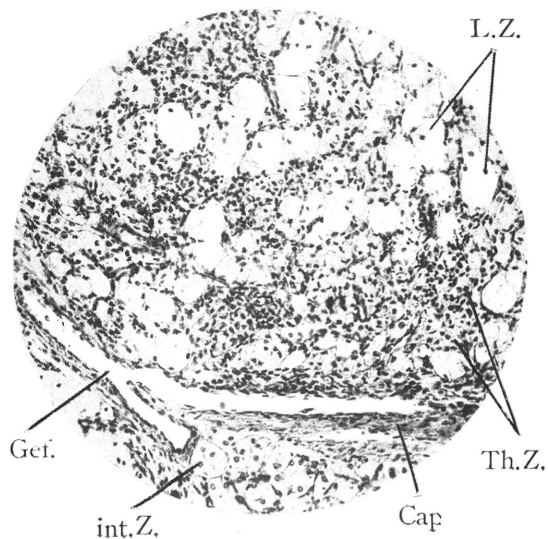


圖 二 第

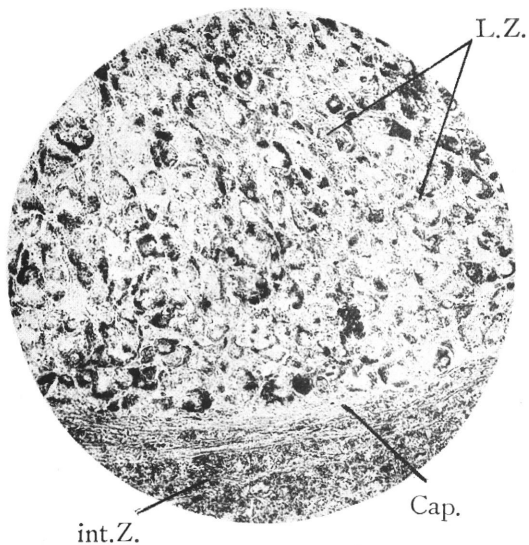


圖 四 第

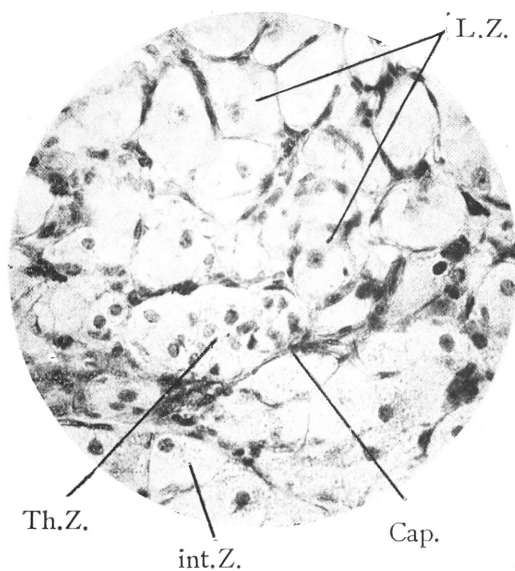


圖 六 第

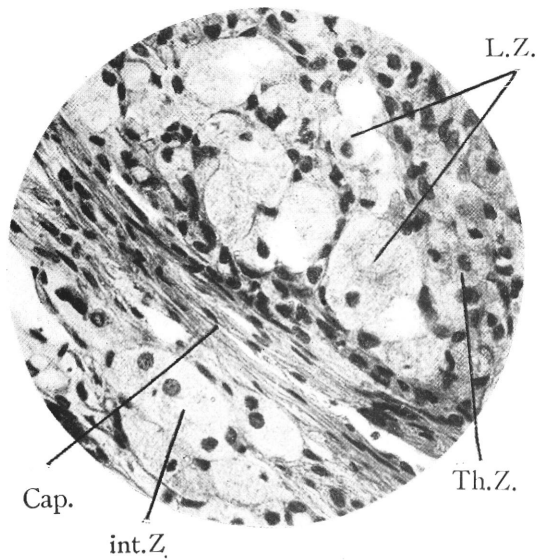


圖 七 第

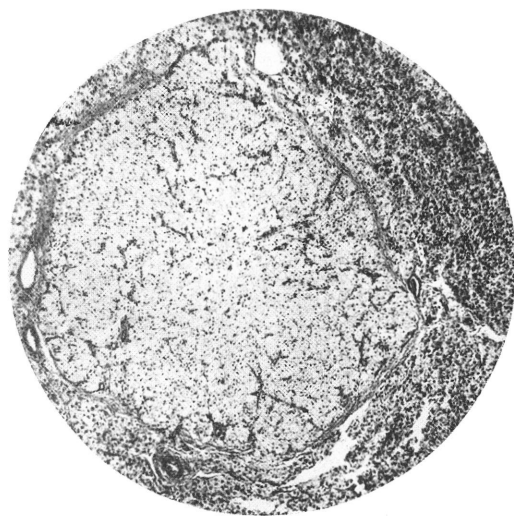


圖 八 第

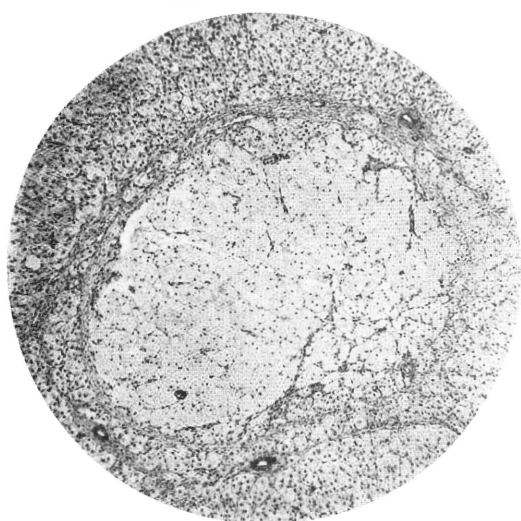


圖 九 第

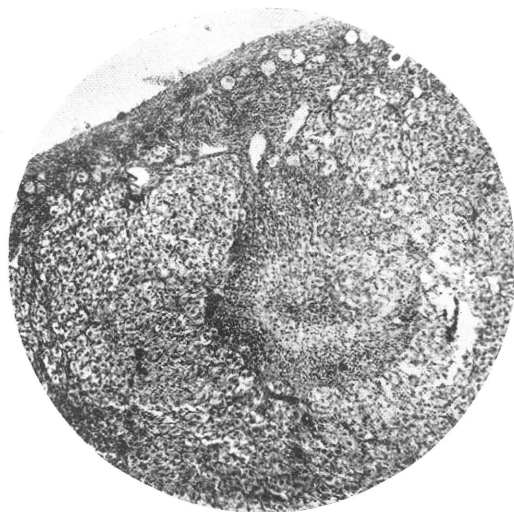


圖 十 第

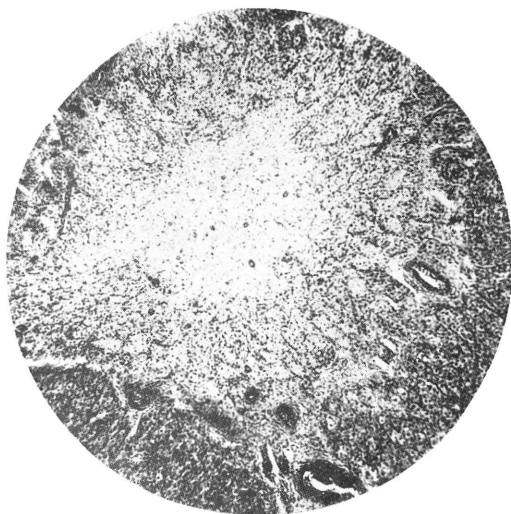
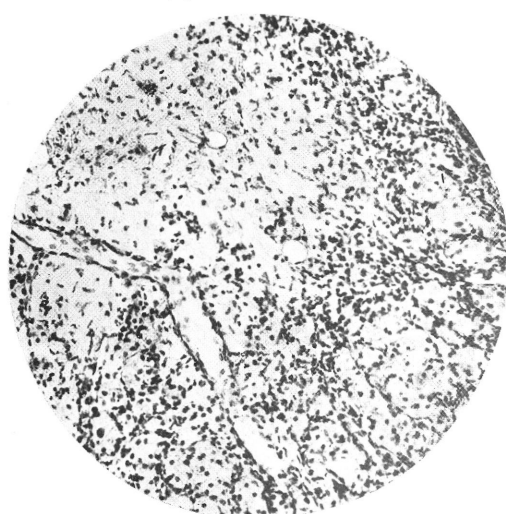


圖 一 十 第



97. 104) Wiczynski, Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 56. 105) Weishaupt, Monatschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 56. 106) Weimann u. Biach, Zur Frage d. experimentelle Cholesterose. Zeitschr. f. exp. Path. u. therap. Bd. 14. 1913. 107) 和田：十全會雜誌，第三十一卷。 108) 安田：女性「ホルモン」ニ關スル綜説、日新醫學，第十八卷。 109) Zondeck, Experimentelle Versuche, dass Wachstum des Uterus steigern. Archin f. Gyn. Bd. 120. 1923. 110) Zinserling, Zieglers Beiträge, Bd. 71. 1923.

附圖說明

- 第一圖 妊娠七日黃體ノ一部、「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Ap. 10X.)
- 第二圖 妊娠七日黃體ノ「リボイド」染色、スミス氏法染色 (同上)
- 第三圖 妊娠二十八日黃體、「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Aa 3.)
- 第四圖 同上黃體ノ一部、黃體細胞ハ多少變性現象ヲ現シ、黃體被膜内側ニ内英膜細胞ノ少數群ノ殘存スルヲ見ル。「ヘマトキシリンエオジン」染色 (Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Ap. 20X.)
- 第五圖 產褥四日黃體ノ一部、黃體細胞ハ著シク變性シ之ニ反シテ内英膜細胞及結締組織細胞増殖シ假性「エオジン」嗜好白血球浸潤ス「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Ap. 10X.)
- 第六圖 同上ノ一部、「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Ap. 20X.)
- 第七圖 黃體ノ退行後其部ニ於テ内英膜細胞ノ増殖肥大ニヨリテ形成セラレタル一種ノ間質細胞樣組織(產褥十三日)「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Aa 3.)
- 第八圖 上述ノ間質細胞樣組織ガ妊娠ニヨリテ長ク殘存シ居ルモノ、分娩後二十七日所見但本例ハ第二回目妊娠二十三日ノモノナリ「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Aa 3.)
- 第九圖 妊娠中ニ於ケル中等大濾胞ノ閉鎖、「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Aa 3.)
- 第十圖 產褥二十六日ニ於ケル黃體發生部ノ變化「ヘマトキシリンエオジン」染色。(同上)
- 第十一圖 同上ノ一部「ヘマトキシリンエオジン」染色。(Zeiss 顯微鏡、接眼 Homal I. 接物 Ap. 10X.)

L. Z. — 黃體ウチイン細胞 int. Z. — 間質細胞
Th. Z. — 内英膜細胞 Gef. — 血管
Cap. — 黃體被膜